

天 天 天 天

時 報

No. 4

1965年5月

京 都 大 学 学 士 山 岳 会

# AACKの動き

昨年5月時報第3号が発行された。それ以後、1965年1月までの会の活動を報告する。

7月カンチェンジュンガ西峯登山に対するロイヤリティのレシートをネパール王国政府より受けとり、さらに8月京大山岳部アンナプルナ南峯遠征隊長、会員樋口明生を通じて、同国政府の正式許可書を受けとった。ここに本会は総力をあげて、舟橋明賢隊長以下のカンチェンジュンガ西峯遠征隊を送り出すことになった。9月より11月まで今西会長はアフリカに、四手井副会長は中国にでかけ、多田副会長は病気だったので、桑原前会長が代理会長となった。桑原代理会長のもと、カンチェンジュンガ西峯の遠征準備は着々と進行していった。8500メートル、世界最高の処女峯を目標として、AACKはさらに輝かしい1ページをその歴史に、つけくわえようとしていた。

カンチェンジュンガ遠征後援会が結成され、その第1回集会在2日後に迫っていたとき、ラジオ・新聞の報道とともに、外務省より連絡があった。カンチェンジュンガを聖山とするシッキム住民の意向を尊重し、インド政府は登山目標の変更を、当会とネパール王国政府に要請するという。桑原代理会長と舟橋隊長は、外務省、インド大使館を訪ね、状況をまとめた。

11月5日舟橋隊長はインドに飛び、在インド日本大使館、野上朝日支局長の支援をえて、インド政府、さらにネパール政府と折衝を重ねた。だが事運は好転しない。インド政府から横槍が入ったが、ネパール政府の許可は動かぬものと期待していた。しかし、ネパールはインドの要請に応じて、許可を取り消し、しかもその正式文書が届くのがきわめておそくなった。こうしてすべての問題はシッキム政府の意向に帰せられてしまった。

(1)カンチェンジュンガ西峯は完全にネパール領内にある。(2)われわれはシッキム住民と同じ仏教徒として聖山をけがすような行動は決してとらない。この2点を理由に舟橋はシッキム政府との交渉を試みた。しかし、シッキムへの入国はむづかしい。やっと入国許可がとれたとき、本年プレ・モンスーンを狙うには、すでにタイム・オーバーであった。

理事会は一応本年プレ・モンスーンの計画は延期しさらに交渉を続けることを決定した。同時にネパール・インド両国政府に、その態度を表明した。すなわち「本会はカンチェンジュンガ西峯の登山を断念するものではない。さらに交渉を続けて、両国政府およびシッキム政府の理解をえたい。ロイヤリティは、あくまでカンチェンジュンガ西峯用として、ネパール政府で保管ねがいたい。」こうしてカンチェンジュンガ計画は再び交渉の段階に戻った。

その間京都大学山岳部はそのありあまる若さ、労力、時間を駆使して、昨年ポスト・モンスーンを目標にまたたくまに遠征隊を組織した。隊長に樋口明生、副隊長に上尾庄一郎の2会員を迎え、10月13日、アンナプルナ南峯(7248m)の初登頂に成功した。山岳部としては、インドラサン、デオチバ、スカルノ峯につぐものである。

現役の4学生は、2人ずつに分れ、登山終了後ネパール内で放浪の旅を続けている。

## 目次

AACKの動き..... (1)

AACK解散論.....本多 勝一... (2)

山と人 (西イリヤン, アラスカ, ヨーロッパ)

西イリヤン中央高地の旅.....田附 重夫... (3)

アラスカの山々.....北村 泰一... (12)

五月のモン・ブラン.....谷 泰... (24)

木曜講座——その4——

高所における人体の呼吸機能と馴化について.....中島 道郎... (30)

会員紹介

安江安宣氏.....梅棹 忠夫... (38)

田附重夫氏.....潮崎 安弘... (39)

—この表紙の“AACK”の文字は、カスティラオによってイタリア語に訳され、セピリアにて1503年に出版されたマルコポーロ著「東方見聞録」より採写したものである。—  
—京都大学図書館蔵—

## AACK 解散論

本 多 勝 一

「この雑誌はAACKの理想を天下に宣揚し、その業績を世界に誇示するために発刊されたのではあるまい。むしろ内に向って、会員相互の親睦をはかり、同時にAACKの今後の方針を相談するための部内雑誌だ」と、桑原武夫前会長は本誌創刊号の巻頭で書かれた。その一文の最後は、こう結んである。——「次号に、議論の花がにぎやかに咲くことを期待して、くどきめいた感想を終る」だが、次号では少しも議論の花が咲かなかった。最近できた3号でも、この言葉を受けた文は見当らない。この現象が、これから私の主張しようとする全体を、まず象徴している。にぎやかに咲いているのは、ベタぼめの書評みたいに無意味な「会員紹介」ばかり。この部分を見ると、読む気がしないばかりか、恥ずかしくなってくる。これはAACKの恥部のひとつであろう。

桑原前会長のこの巻頭文は、AACKの今後に対する重大な投石であった。が、この投石は、もはや手おくれに近い。医者に見捨てられた重病者みたいなもので、専ら死期を待つばかりだ。復興するためには、イチかバチかの手術をしなければなるまいが、そんな手術をしてまで助ける価値のある会なのかどうか、疑わしくさえある。そして、投石をされた桑原前会長自身、手おくれであることに果して気づいていたかどうか疑わしい。同じ文の中に、たとえば次のような部分がある。

「ヒマラヤには大きな処女峰が次第になくなってきた。もちろん、7000、6000級にまだいくらかも残ってはいる。しかし、いかに(AACKに)シニセのキャンがあるといっても、7654→7460→7???と、しだいに標高を低めてゆくとすれば、たとえ登攀技術的にいかに困難が増大していたとしても、ヒマラヤ登山史的には、またニュース・ヴァリュー的には、したがって募金成功率的には、価値の低下をまぬがれない。その登山目標を今後どう設定するか」

「ヒマラヤ山系にかぎったことはない。ほかに進出せよ、と口でいうのは楽だが、アラスカ、アンデスなどみな他の日本の大学が手をつけている。AACKはパイオニア的な仕事をえらぶ会ではなかったか」

このような発想は、私の山岳部現役時代、根本的疑問としてすでに出している。九年前の話だ(京大山岳部報告第五号、Pioneer Workとは何か)参照。この部報が出てのち、探検部が桑原教授を招いての探検

講座で、「Pioneer Workとは何か」についての批評を求めると、教授は次のように答えられたのを今も覚えている——「どうもシンドイ議論だねえ。漢字がやたらと多いし」

漢字の点はさておき、内容については何の発見もないように思われた。桑原教授は、文学の方では鋭い批評で高名だけれど、山に関してくと批評精神が鈍くなるのかしら? とにかく私は、あのころ「Pioneer Workとは何か」に対して、大学の内外を問わず(あの一文は一般商業山岳雑誌にも転載された)太刀うちできるような反撃が少しもなかったのに大変驚き、失望し、山(というより山男か)に見切りをつける決意をかためさせた。こういう状態だから、今ごろになって同じ投石をしてみても、議論の花など咲きっこない。「今や山の世界には一流の人間、がはいらなくなってきた」と、ある先輩は言ったものだ。大変きついことを私は書くが、今の現役の諸君も一度はこのことばをかみしめた方がよい(べつに私は、山岳部をやめよと言ってるのではない)。しかし、桑原教授は、

あの巻頭文の中で、さすがに鋭さをうかがわせる部分も書いている——「どうやら私のこの問題のつかみ方自体が、尖鋭な即物性に欠けておるように思われ、いよいよ引退の必要性を痛感させる」と。正にその通り投石はおそきにすぎた。もし尖鋭な即物性をそなえた問題のつかみ方をするならば、次のように言ったらよいのではないか——「AACKは、きれいなサッパリ解散して、今後各個人単位または小グループで山を楽しむこと。輝かしきAACKの時代は終わった。海外登山も、すべて自己資金で自分の好きな山に勝手に登れ。」

これでもう、私の言うべきことは終わったようだ。あとは退会手続きが残されるだけのようなのだが、ひとつだけひっかかる点がある。それは、一体AACKという団体は登山が目的なのかどうかだ。もし、山を離れてでも Pioneer Work をめざすというなら、話は違ってくる。この点をまずハッキリさせたい。しかし山岳会を名乗る団体が海底探検をやるのも妙なものだ。解散論をぶっばなして逃げだすのは局外者のとるべき態度だといわれる人もあろうから、具体的な一案を示しておきたい。

AACKの現会員は、明らかにスポーツ登山派と探検派を両極に、その間をいろんな考え方が埋めている。

問題はそこにある。スポーツ登山はこれで充分存在理由があろう。ただしパイオニアなどと言いださないこと。今後の登山界は、ヒマラヤであろうとなかろうと、岩壁登高を中心とするスポーツ・アルピニズムが主流をしめることは明白である。また探検は、むしろ古典的探検から脱したものであるから、ますます存在理由は大きい。だが、AACKは、全会員のうち、数でいえばこの両者の中間が最も多いのではないかと思う。悪くいえばどっちつかず。自らの位置さえ考え及ばぬ。本誌第3号の座談会「サルトル・カンリ遠征をめぐって」は、これら三者が入り乱れての発言で、なかなか興味深く思った。「興味深い」というのは、それぞれの発言が立場を異にするため、論議が噛み合わない現象を起しているからであって、べつに感心したというのではない。ついでだが、あの中に次の目標の候補地がいろいろ出てくる。しかしAACKの伝統をしのばせるのは、「ヤルカンドの彼方」(加藤説)と「南極の最高峰」(梅埴説)の二つに尽きる。共産圏が今のところむずかしければ、現実的には南極の最高峰しかない。ただ、共産圏がいつまでもむずかしいかどうかは、とくに最近の国際状況を考えると、油断できないと思う。南極を着実に計画し、一方では共産圏(といっても中国)にいつでも出られる準備をし、かつ働きかけることくらいが、AACKの解散記念事業といふべきか。カンチェンジュンガの第何峰なんてのは、しみつたれもいいところだ。こんなところで犬死しない

ように、遠征隊員は命を大事にしてほしいと思う。せいぜい、日本山岳会のエベレスト計画よりはマシとしか、いうことがない。

話がそれた。解散するにしても、たとえば「社団法人京大土山岳会」ではサイフの捨て場所に困るだろう。私の提案は、AACK(Academic Alpine Club of Kyoto)の、二つのAを分離することだ。発展的に解散して、純登山団体と、純学術探検団体を創設する。戦前の京大旅行部が、戦後山岳部と探検部に分離したようなものである。現役のとき別れていて、OBになるとAACKでくつつくのも変な逆コースだから、スッキリわけてしまおう。登山を探検と抱きあわせてやる方法はもう限界にきた。このように分離した上で、各個人が両者にダブって会員となることは少しもかまわない。野球部員かつ演劇部員であっても不思議はないのと同じ。目的もハッキリする。必要に応じて両者が合同遠征することも、もちろんあり得るが、原則は独立している。しかし、この種の合同遠征というやつは、どちらかが附属物になり勝ちだから、私自身は反対である。

という次第だから、AACK解散式と同時に、二つの発会式をやってもよろしい。ヤジウマの一文を寄せたが、これは近來にない建設的意見であることを自負している。今西錦司現会長を最後として幕を閉じるのも、なかなか象徴的ではないか。

## 山と人 —西イリヤン・アラスカ・ヨーロッパ—

田附重夫・北村泰一・谷 泰

## 西イリヤン中央高地の旅

田 附 重 夫

## 1 発端

戦前のその昔、京大旅行部時代にニューギニア計画がたてられ惜しくも戦争のため立消えになってしまった。それから二十有余年経ち、ヒマラヤ熱の真中であって何処か変わった所に行こうという気運が山岳部・探検部・AACK から芽生えてニューギニアが、が然クローズ・アップされて来たのである。戦後、相次いでオランダ領植民地がインドネシアの手に渡った事この新ニューギニア計画に幸いしている。インドネシアのしつような攻撃に嫌気をさしたオランダは天然資源も乏しく、利潤も産み出さないオランダ領ニューギニア(現在の西イリヤン)をとうとう投げ出してしまった。こうして実質上西イリヤンを手に入れたスカルノ大統領は大喜びで各国大使を招待して新領土上を観光

飛行した。日本大使はサルトル以来お世話になっている古内氏で、すでに加藤隊長より我々の西イリヤン計画の事をよろしく頼むと依頼していただいていた。スカルノ大統領は領土がふえて大満悦で最高峰カールステンツ峰をスカルノ峰と名づける観光飛行中に発表した。古内大使は上機嫌のスカルノ大統領をつかまえこの山を日本人に登らせてほしいとすかさず切り出された。スカルノは言下に「イエス」。独裁国で独裁者が承知すれば話は簡単である。トントン拍子にまともって日・イ合同遠征隊が西イリヤン中央高地に向う事となった。

## 2 インドネシアという国

1963年11月末に本隊は空路ジャカルタに出発した。秋冷の日本より暑さうらだるジャカルタに着いた我々はKOTI(統合参謀本部)の将校の出迎えのおかげで税関もフリー・パスする。ここの税関にまともにやら

れると袖の下なしにはすまないという。しかし彼等も軍人には頭が上らない。この軍人の総本山 KOTI が全面的に協力しているこの遠征隊は恐れるものなしである。喜こんだのも東の間で KOTI によって我々の行動がいかに束縛されているかが明らかになって来ると、この遠征隊が我々の意図とは関係なしにインドネシアの国家権力が押流されてしまっている事を認めざるを得なかった。インドネシア陸軍及び空軍のお偉方と第一回会談を開いた時、驚いた事に彼等は遠征隊に参加するメンバーもまだ決定していない。日本隊がやって来るというので慌てて数日前にやっと隊長が決定したという。我々から見れば無計画、行きあたりばつたりの他力本願の仕様のない国柄と思うが、これで結構、国が成立ってどうにかやって行っているのだから日本人のように、あくせくするばかりが能でもあるまい。ジョイントが決っており、彼等が動かなければ輸送も何も出来ないのだから、日本側がいくら力んでも空回りするだけと悟って結局インドネシア・ペースに巻込まれてしまう。

回教徒は血なまぐさいものという先入観を抱いていた所、幸いな事に彼等は回教徒ではあるが東洋的なのか仏教的なのかおとなしくてのんびりしている。やはり東洋人というのは一脈相通する所があるのだろうか。外見上、怠惰なインドネシア人と勤勉な日本人と対照的ではあるが、彼等の無計画性とその日暮しの日本人（ヨーロッパに較べて）、そして諦めの良さ等大変共通の要素が多いように見受けられる。今回の遠征は途中で計画変更相次ぎ決してスムーズに事が運んだとはいえない。その中であって国籍を異にする人々が喧嘩もせずやれたのは矢張り似たもの同志であったからと思う。相手が西欧人やアラブ等ではこうは行くまい。

誰れも足を踏み入れた事のない新領土の奥地に国民として始めて行く事はインドネシア人には大変な名誉である。その上、スカルノ大統領の名を冠した最高峰に登るのはまさに一生一代の光栄に違いない。軍部の各セクションの親分は自分の子嗣を遠征隊に、出来れば登山隊に押込もうと競い合う。親分・子分の関係は日本と同じ様に強いらしい。可哀そうにもこの将軍・大豆級の派閥争いとばかりは人の好いハミッド隊長にかかって行った。今日は空軍から、明日は特攻隊からと圧力をかけられたハミッド中佐の逃げ道はただひとつ、隊構成を膨脹させるのみであった。最初は数人のインドネシア人を加えたライト・エクスペディションの筈が日一日と大きくなり最終的に決った時は其にインドネシア側隊員は49名の大部隊になってしまった。日本から彼等のために持参した装備は全く不足する事となった。インフレの激しい物資不足のジャカルタでも大苦勞して物資を調達したインドネシア隊の準備もようやく整い、酷暑のジャカルタ滞在三週間余にしてやっと中央高地に飛び立ったのである。

備もようやく整い、酷暑のジャカルタ滞在三週間余にしてやっと中央高地に飛び立ったのである。

### 3 隊員紹介

日本側の隊長は人も知る加藤泰安、蒙古やらヒマラヤやら乾燥した大陸専門と思っていた所が湿潤の島に色気を示し大変な意気込みで、作戦・資金・渉外等あらゆる面で若手をリードして名実共に名隊長ぶりを発揮された。安江安宣副隊長は戦前のニューギニア計画にも関係されたニューギニア通で、今回の日本側科学班が学主ばかりで構成された学者の非部隊であった中でただ一人の真の学者であった。科学班としては考古学専攻課程の石毛直道、地質学専攻課程の鈴木博之、鉱山学科二回生の瀬戸口烈司君の三君が参加している。

登山班は加藤隊長以下、小生と山岳部員の水瀬昭典、松田隆雄の四名である。水瀬はチャキチャキの江戸っ子で食糧担当、猫の目のように変る行動予定に合せて見事に食糧のやりくり算段をしていつも旨いものを喰わせてくれた。いかつい顔に似合わず良く気がつき登山班の中では女房的存在であった。松田は水瀬と対照的なおっとりした神戸人で装備係をつとめる。まずジャカルタでインドネシア側に装備を分配する時から気前の良い所を見せ人気者となる。童顔と相まってインドネシア側より「ニョナ」(女の子)の愛称をうける。片言インドネシア語で水瀬が現地人をつかまえて、こんせつに教えている。その横で松田がポーターにテントをたたませている。「そこちがう、あんな、ここをこない折るんや」と大阪弁丸出しでやっている。相手に通じる程度は同じ位であるから面白い。私は現役の二人が良くがんばっているのが楽な立場だ。インドネシア側と問題が起きた時にはチョコチョコとまらめに行く役目である。

インドネシア側はでっぶり肥えたハミッド中佐が隊長である。応揚にして楽天的なこの好人物にホテイ様の愛称を奉った。四十代半ばにして初めて遠征に引張り出された彼は遠征末期にはやつれ果てていた。彼の血圧は遠征隊のパロメーターで遠征隊が行き詰ると必ず200位まで上り、軍医が懸命に治療している様子はハミッド隊長には気の毒だがニューモラスなものであった。登はん隊員として新婚はやはやのアメリカ帰りのサンディー少佐、特攻隊員のスタルト中尉とスギリン隊長、それに地元のコタバルの極楽島大学の学生アタブ、日本に留学した事もある火山学者のジャイアディの四名が参加した。いずれも雪を見るのは初めての連中にしては良くがんばりスカルノ大統領の期待に応えた。

### 4 エナロタリにて

西イリヤン海岸の飛行場ナビレから奥は単発のセスナ機を利用する他ない。宣教師のセスナ機のお世話になってエナロタリに入る。エナロタリは戦争末期に日

本軍の一部がはるかに陸路山越えて入った事のある所である。目前に広い湖を見下せる高台にあるゲスト・ハウスが遠征隊の宿舎と定められる。ワメナを中央高地の東玄関とするとエナロタリは西玄関に相当する中心地であり、オランダ領時代から白人の往来があり、ゲスト・ハウスには自家発電機まである。しかし現住民の生活は原始のままで、ニューギニア名物のユテガ(ベニス・ケース)をつけた裸の現地人がウロウロしている。始めてエナロタリに着いた時、裸の土人にとり囲まれ、褐色の肌、弓矢、豚脂とすすを塗りたくった顔に圧倒され人間というよりは動物に近い印象をうけたものだった。某隊員はあんな女の子には金をもらってもよう触らんと欲していたがその当人が一週間程の間に美人がいると目の色を変えて品定めするまでになったので、人間の環境の順応力の強さに今更感心させられる。

このカポーク族は身長150cm余りで小柄なものが多いが、なかなか筋骨たくましい。サツマイモをおかずにしてサツマイモを食べる様な単調な、バランスの悪い食生活をしているのにこんな良い体格をしているのは何故だろう。栄養学的には無茶苦茶な食生活と思うが、彼等は体内に特殊な酵素でも持っているのだろうか。それとも現代の栄養学があてにならないものだろうか。彼等には数の概念がないので年令は調べようがないが、40才にもなれば老人の部類であろう。戦争中日本軍に使われたというポーターがいたがこれなどむしろ例外であろう。彼は日本軍から「大政」と名づけられた事をまだ覚えていた。

すったもんだの討論の末、遠征隊はエナロタリで二隊に分れて行動する事になった。隊の性格が登山一本ならばすっきりしているのだが、それぞれ専門分野の異なる科学者が参加していて各々の思惑があつてまとまらない。考古学者は一カ所に定着しなければ仕事にならないというし、一方地質学者は歩き回る事が必須条件となる。更に問題をややこしくしているのにインドネシアの作戦計画がある。遠征隊は Tjenderawasih Operation (極楽島作戦) と呼ばれており、参謀本部から一切の指示がなされている。作戦計画となれば強力な無線隊もつけて連日ジャカルタの KOTI と交信せねばならない。我々が一番行ってみたい未知の土地は安全保証について責任がもてないから立ち入りを禁止するという。その上日本人だけの行動は絶対に許可されない。我々が持っている遠征の概念とインドネシア人がいう遠征とは似て非なるもので、彼等のいう如く既知のルートを取り安全性の保証された行動をするのであれば単に旅行にしか過ぎない。

ナツソ山脈の南面を廻り込む計画や、川沿いに南岸に至る計画等の意欲的な試みはすべて封じられてしまった。スカルノ峰にインドネシア人を連れて登って

やる事をだしにして広く歩き廻りたいという考えはインドネシア側がスカルノ峰に登る事だけを重視した結果、かえっておさえられてしまった。それでもまだエナロタリからペオガまでキャラバンさせるのを納得したのは有難かった。スカルノ峰に登るだけならペオガに直接空輸の方が近いのは明らかであるが、加藤隊長が巧みに、体を順応させるために長いキャラバンが必要だと説明してキャラバンに同意せしめたのである。もし今回、このキャラバンがなければ何のためにやって来たのかわからない所だった。

本隊には登山隊に石毛及び朝日新聞から派遣された藤木、本多の二氏を加え、インドネシア側を合せて39名、一方科学班は日本人3名を含む20名で、先行する本隊の後をゆっくと追いつけペオガまで行く予定である。

キャラバン出発の間際まで人員構成やルートのとおり方でもめるのはお恥しい次第だが、情報入手が極めて困難なこの地方の特殊性であろう。現地人の中にも遠くまで旅したものもある筈だが、彼等のいう地名はたびたび地図上の地名と合致しない。数の概念のない現地人は、距離を表わすのにその間に何回眠るかで示す。彼等の一泊は時には我々の三泊に値する距離の事もある。こんな次第で現地人から直接情報を得る事は言葉の不自由な事もあって困難である。次に確かな情報は宣教師から提供された。アメリカ系プロテスタントの宣教師はバイオニアの精神をいまだ失わずに未開の地に足跡を印している。彼等から得られる情報も結局街道筋の情報に限られてくる。詳しい事は現場に行かねばわからないので、もっともひろけた街道を歩いてペオガに向う事になった。クリスマスイブの日、恐らくニューギニア始めて以来の大きなキャラバンが開始された。

### 5 泥道の長道中

乾期とはいえ、ほとんど毎日のようにスクールに見舞われるニューギニア高地は泥と植物の世界である。水はけの悪い石灰岩質のためかいたる所泥沼であるが、それでも想像していたよりはるかにましだ。どんな悪疫のはびこった所かと覚悟をきめ、破傷風の予防注射まで受けて来たのに拍子抜けする程の健康地なのである。マラリヤがきついと第五性病が蔓延しているとか聞いてはいたが、マラリヤは1500m位の低地にしかなくその他の伝染病も存在しない別天地である。我々の脳裡に浮ぶ悪疫のニューギニアという戦争中の印象は、低地ニューギニアの事でここ中央高地は結核療養所でも作れば良い気候である。キャラバンシューズが毎日泥だらけになり、腰を下して休む度に尻が濡れる以外は申し分のないキャラバンである。それでも遠征は始めてのインドネシア側にはキャラバンは相当こたえるらしい。最初数日間のはりきって歩いたハミッド

ド隊長以下は、たちまち悲鳴をあげ、ホメヨについた時早々に計画変更をいだった。ジャカルタへの電報で第一日：「一同元気一杯はりきっている」第二日：「身体は疲れたが精神は高揚している」第三日：「精神的にはまだ元気が身体が動かない」。

あわよくば、石器時代を見んものと意気込んでやって来たが、残念ながら最低五年はおそすぎたようだ。プロテスタントの宣教師達の開拓者精神はまだ衰えず要所要所にステーションを設置し飛行場を構築しては教化に務める。神の存在しない原住民の生活はすべて悪であるという独善的な信念に凝り固った彼等は、我々の期待していたものを破壊し尽くしてしまう。この宣教師達の世話になって飛行機をまわしてもらわなければ遠征隊の動きがとれないとは皮肉な事だ。ハミッド隊長がベオガまでの長い旅に嫌気がさして、近道をとって街道から外れてウギンバに至り、ここからプラトーに登るといい出した時、これで文明の臭いのブンブンする表街道から離れる事をむしろ喜こんだ。

作戦計画変更に伴いすでにベオガに空輪してあった登山装備・食糧をホメヨに逆空輪する間、飛行場の片隅に張ったテントに為す事もなく時間をつぶす。三カ月の間ニューギニアの奥地を歩き廻ったというと聞えは良いが、その実、半分位はやれ食糧補給が出来ないとか、やれ無電機が故障で動けないとかいって停滞しているのだからインドネシア軍の程度がわかる。しかし停滞も楽しいものだ。近くのモニ族達はしげしげとテントを訪問して来てすぐ顔じみになってしまう。この男尊女卑の国では、男は戦争でもないかぎり、あまり仕事がない。特に力のいる開墾等を除いて鳥仕事も女達に押し付けられているから、男達は交易をしていると称して一日中ブラブラしている。我々が彼等の装身具に興味をもっているとわかると、われもわれもとやって来て交易が始まる。日本を出る時、原住民が何を喜ぶだろうかと頭をひねって、首飾り・耳輪・ナイフなどを用意して来たが、意外な事に市価1000円もするよなきらびやかな首飾りよりも、一枚50円位の鏡の方を喜んだり、ただの広告マッチが100円位の価値に通用したりする。彼等にも流行と群衆心理があり、木の棒をこすって火を起しているそばでマッチをすると、たまらなくなつてマッチにとびついて来るのであろう。こすっからいカポーク族にくらべて、モニ族はおっとりとした伊達男が多い。青や黒の顔料を豚脂でねり見事に化粧した顔に極楽鳥の羽かざりを頭にかぶり磨き込んだ弓矢をたずさえた勇姿はいささかでも西欧文明に抗しようという心意気なのであろうか。オランダ時代より西欧文明に接しているカポーク族には見られない点である。

一方、女達は背中の中袋に一杯野菜やら芋を入れて売りに来る。結婚している女で両手満足に指のついて

いるものは皆無である。身内の者が死ぬたびに、女達は指一本ずつ第2関節からつまられる運命にある。幼児死亡率は50%をはるかに越えているから、結婚して数年の間には指の二、三本はとんでしまう。ひどいになると両手共満足なのは親指だけの手を振り振り、野菜の売値をいい合っている。結婚すればすぐ老い込んでしまうとはいえ、娘達のチャーミングな事!! はるばる日本から来た珍客に美しさを認めてもらおうと数々の装身具をつけてテントのまわりをウロウロする娘さんの可愛さ。決して女性から隔離された生活をしてきたから目が狂ったのではありません。今になって彼女達の写真を見てもやはり可憐と思うから間違いないでしょう。耳には彫刻した竹をさし、首には幾重にも首飾りをかけている。珠数玉、香の高い木の実、ビーズ玉等を紐に通し、それに養虫の殻、豚の牙、子安貝、鳥のくちばし等をぶらさげた首飾りは豚の指で黒光りしているが、それが彼女達の褐色の隆起した胸と良く調和している。ミス・モニと目される美人姉妹は始終テントの廻りに来て、カメラを向けると恥しそうにしなを作る。女性の心理は文明の発達度によらず、世界中似たものらしい。

ホメヨで新春を迎えた後、キャラバンが再開された。再開第一日はインドネシア隊も元気に行程を延ばすが、午後から降り出した豪雨に難儀する。とうとうハミッド隊長の側近の軍医は道に迷い原住民の小屋に豚と共に一夜を明す破目に至った。あわてたのはハミッド隊長で、絶え入らばかりの心配ぶりで翌日からの行動は午前中のみにすると言宣する。怠け切ったキャラバンを続け、プガバに至る。いよいよ本街道から分れてケマプーの本流をさかのぼる事になる。

西イリヤンの山道は乾いている限り結構な道である。ただ、いかに急傾斜の斜面があっても、巻いたりジグザグの道をつける事はしない。直登・急降下のくりかえしにうんざりする。何と頑固な頭の悪い連中だろうと思ったが、良く考えるとそれなりの理由があるようだ。第一に石器時代からやっつと鉄器時代に入った国では、木を切るのは大仕事で、ジグザグ道をつけるのは大変な労力が要るに違いない。第二に道の補修のためにも直登急降下の道が一番手間がかからない。下生えにしても直登の道は草におおわれる事が多い。ジャングルを切り開き、つる草を断ち切って進まねばならない覚悟をして来た我々にはいづれにしても結構すぎる道である。その名の通り鱗が大地を踏んまえたようなタコの木をくぐり抜け、パンダナスの林を過ぎ、一年中太陽の当らない巨木の二層林を進み、ケマプー河沿いの最終部落ウギンバ村にキャラバンは向う。

水瀬隊員はキャラバン風景を次の歌に巧みに表現した。

1 アオエアーアオエアー

ケマプー見下すこの道は  
青と緑と黒の道

モニのニョニョ見てアマッカネ

2 アオエアーアオエアー

ケマプー見下すこの道は  
登り下りの沢の道

すべってころんでアマッカネ

3 アオエアーアオエアー

ケマプー見下すこの道は  
コテガのオランの続く道

モコモコ終ってアマッカネ

この詩は一寸説明を要する。アオエアーは原住民の歌で仕事をする時や集って踊り狂う時にハーモニーよろしく三部、四部の合唱をする。旋律は簡単であるがC・E・Gの音が基本になりそれに三度又は五度の和音をつけている所はむしろ西洋音楽に似ている。次にモニのニョニョはモニ族の娘さんの意味でアマッカネはここでは「今日は」の意味に使っている。これは便利な言葉で第二節では泥道でころんでポーターが「危い、大丈夫ですか」という意味を表わしている。ところが第三節ではベニスケースをつけたポーターが一日のポッカを終って、我々がアマッカネ(有難う)というのである。アマッカネ、アマッカネとくりかえしておれば、後は手まねで結構話が通じる万能の言葉である。

ある朝早くポーターの騒ぎに目を覚めた。ワイワイガヤガヤ奇声をあげて河岸に集まっているので、何事かと近づいてみると、三十米ばかり離れた対岸に漂う野鴨をみつけ矢を射かけている。いつもは無気力な顔をしている連中が眼をかつと見開いて獲物に狙いをつけた時は別人のように見える。恐らく狩は戦争と共に彼等の最高のスポーツなのであろう。熱戦30分にして勝負がつき、息断えて漂う獲物を勇敢なポーターが濁流にとび込み引き上げる。加藤隊長は、剥製にと野鴨を所望したが時すでにおそく石打ちをはじめ、太い羽根はひき抜かれて頭飾りに化けてしまった後だった。

1月15日、ウギンバに着く。予想外のさびれ方だ。ベオガ、ヒタリバ、イラガ、南方のダシカを結ぶ交易路の要所ときいていたが、どうも様子が怪しい。今までさかのぼって来たケマプー川沿いの部落にくらべても貧弱な村がぼつりぼつりと散在するのみで、我々の案内役をつとめているエナロタリの実力者ゴバイもあまりのさびれ様に驚いている。実は数年前の戦争の結果、ここの住民はイラガ方面に移住してしまい、一時は廃村のようになったという。この辺は無政府状態ではあるが、エナロタリにあってカポーク族だけでなくモニ族もおさえているという一番の実力者ゴバイにしても、ウギンバの消息を知らなかったというのだから、コミュニケーションの悪さはお話にならない。部落間に敵対、友好のバランスを保ちながら交易も結構行わ

れているのに、これだけコミュニケーションが乏しいのは不思議な事だ。テント地は例によって物見高い見物人で一杯になった。ウギンバはモニ、ダニが混合している地帯であるが、この両種族は独立に村を作り相互の交渉はほとんどない。テント地の山頂300m位にダニ族部落がある関係で、お客様はほとんどダニ族である。朝夕の耕作地への行き帰りにダニ女たちは必らずテントに立寄る。モニ、カポークの女性が容易に異邦人に近づかなかつたのに、このダニ女性は開放的で人見知りしない。ダニ族特有の卵型のおでこの出た顔にまっ黒の瞳をかかやかせていると怪しいセックスアピールを感じさせる。水瀬はこの魅力を意識してか無意識に知らないが、残飯などを与えて彼女らと巧みに友好的な関係を保った。うかつにダニ女に好意を示して勇猛なダニ族と戦争の原因にでもなつてはと心配したが、これは取越苦勞でむしろ後日、彼女等に我々が助けられる破目になった。

大遠征隊がウギンバ経由の道を選んだのは当然ここからプラトーを通過してイラガに抜ける道がしっかりしている前提があった。しかし今はこんな状態でイラガへの道は信用出来ない。ハミッド隊長はあわててゴバイ以下3名の偵察隊を送り出す。丁度悪天候に災いされた偵察隊は霧雨の断間なく降るプラトーをさまよって一週間後に帰着した。疲労困憊したゴバイ達がいよいよには、イラガへのトレード・ルートは荒れ放題でニュージラードキャンプ跡と覚しき所まで荷物をもてば一週間かかるという。道は苦むしてすべりやすく、プラトーに近づいてからは凍りつきそうに冷く濡れた石灰岩の上を進むのは装備のないポーター達には大変な事だという。天気が良いればともかく、快晴の連続が望めない現在、大部隊が共に行動する事を前提とすればこの道はきびしすぎるようだ。一方、ウギンバに滞在する遠征隊は川岸に近い水浴に便利な場所にインドネシア隊が、水に不自由だが乾いた丘の上に日本隊が泊り、藤木、本多、石毛の三隊員は三十分位上流にある最奥の部落で住み込み調査をしている。インドネシア隊員は殆んどが回教徒であり、戒律で定められた毎日何回かの沐浴をせねばならない。彼等の回教は見掛け上はアラブ諸国にくらべても大変おとなしく、回教徒特有の血なまぐさは感じられない。また、キャラバン中も熱心に聖地遙拝をしているのはハミッド隊長だけである。残りの連中は豚肉でもベーコンでもかぶりつくいい加減な回教徒ではあるが、身を清潔に保つ事は感心するばかりである。そのために彼等のキャンプ地はいつも河岸の湿地帯になる。身を切るようなつめたいケマプーの本流でマンディ(水浴)する彼等から見れば4人の日本人、特に私のように着がえも全くしない日本人はアンタッチャブルに等しく見えたであろう。しかし日本人は世界の水準からいえばはるかに清

深な部類に属している事は間違いない。英国では下宿生活していた時に一週に二度風呂に入りたいといったら、下宿のおばさんが「お前は何とせいたくなきれい好きなんだろう」と皮肉たっぷりに感心した事をつけ加えておこう。

キャラパンの生活は単調である。カポーク族、モニ族の子供各一人をお小姓として使っているが、この二人の子供とたまたま通るダニ族ぐらしか相手にするものがいない。退屈のぎに加藤隊長が用意して来られた美人写真による嗜好調査を行った所、インドネシヤ将校は可憐型、下士官は家庭婦人又は若干もっさり型、ダニ族はセクシー型を選ぶ傾向がある。ダニ族の選択は特に服装等の顔以外の条件で支配されているだろうからあまりあてにはならない。が私自身の選択はダニ族のそれとどんぴしゃりであった。

偵察隊を待つ間、我々は呑気であったが、ハミッド隊長にしてみれば気が気でなく血圧は上りっぱなしであった。一番の問題はポーターの食糧である。芋の豊富にあるウギンバを期待して来た所、村人の食糧にも事欠く状態であるから不足分はインドネシヤ隊員用の米に喰込んで来る。一日に 30kg 以上の米をポーターに喰われ、偵察隊を待っている間に深刻な食糧不足になって来た。登山隊のみの小人数で行動するなら可能であろうが、無電隊まで引きつれた大遠征隊は今や半身不随の巨大獣のようなものだ。「もうだめだ」とハミッドが KOTI に電報を打った所、即座に「no retreat」と返事されて困り切った彼は遂にヒタリバに転進する事に決した。彼がここで手を上げれば登山隊だけで行動出来ると思っていたのだが、期待も空しくなった。今となつては 2 日行程の転進さえ容易ではない。プガバから来ていたモニ族のポーター達はすでに消え失せている。残っているのは中核のカポークのポーターだけだ。エナロタリを出てから数日間脱走する者は脱落して、ウギンバまでついて来たカポーク族は皆遠征隊に雇われている意識をもった連中である。しかし、プガバよりのモニ族は、カポーク族にくらべて既に人間もおっとりしてがめつきがなく感じは良いが、この連中にしてみれば遠征隊に何となく面白そうな事がありそうだからついて来たというわけなのだろう。いわば趣味でポッカを手伝ってやっているのだという所があり、自分が主人のような顔をしている。ウギンバで滞在が長くなり面白くなるとさっさと帰ってしまった。誰も彼等の行動を止める事は出来ない。無欲ほど強いものはないのだから。

1月24日。ヒタリバに出発しようとしてもポーターの絶対数が足りない。仕方がないのでインドネシヤ隊員のみ先発し、我々はポーターの都合がつくまでウギンバ滞在をつづける事となる。こんなさびれた村でポーターが集まるだろうかと心配していた所、顔なじみ

のダニ族がやって来て、我々に協力してくれるという。彼女はワニヅギ部落に帰り村民を説得し、明日は老若男女総出でポッカしてくれる事になった。日常の仕事はほとんど女性に押しつけられていて、しかも結婚は売買結婚である事から女性の地位は低いように考えられるが実際は女性の発言力は相当大きい。

1月25日。朝早くから村人が集って来るがなかなか出発にならない。どうやらまだ村の中で何処までポッカの手伝いをするかでもめているらしい。やっと10時になって一村総出のピクニックが始った。まだ 5, 6 才の女の子まで出て来てサブザックを持って来る。ワン・ピッチごとにあめ玉をしゃぶらせて我々がむしろ彼等村民の一部になった気持で一日を過した。5 時前山腹のゆるい傾斜地にある泊り場に荷物をほうり出すとダニ族はさっさと引返していった。今朝から7時間かかって歩いた道をいくら空身とはいっても日暮れまでにワニヅギ村に帰れるのだろうか。恐るべき駿足である。朝、部落を出る時に例のダニ族が争っていたのは彼女がヒタリバまでついていくというのを皆が「外国人についてヒタリバへなど行かず日帰り帰ってこい」と止めていたのだろう。これでまたしてもポーター難に見舞われた。今はもうなれてしまったエナロタリを出てからほとんど毎日ポーターの夜逃げに悩まされ、近くの部落でポーターをかり集めないとは出発出来ない事が何度もあった。おそらく自然児の彼等には逃亡という観念はないだろう。自由意志で手伝ってくれる連中に雇用関係を理解させようとしても無理な話だ。しかし有難い事に、とんでもない山の中に荷物を放り出されないうざり、近くの部落にも物珍らしさのために遠征隊の荷物をかつぎにくるめてたい連中がいるものだ。この時も一日二日待っていると隣り村から三々五々と集ってヒタリバまでポッカしてくれた。

ヒタリバはウギンバと異なり豊かな谷である。ウギンバは西洋文明の洗礼をうけておらず、ダニ族は未教化で物質的にも貧しかったが誇りの高さがあつた。ここヒタリバは宣教師カット夫妻が住み込んで教化に務めた甲斐あってキリスト教の普及度は高い。すでに学校も開かれている。肥沃な土地にカット夫妻が持ち込んだ各種の野菜が作られ物質的には恵まれているが、この人々にはすでにウギンバの覇気は失われていた。このドウギンガド谷筋には、モニ、ダニ、ウフンドニ、ダウの4種族が混在して互いに独立した言語を話すという。弱少の種族は順りになるものがないので宣教師が一番初めに接近する。まずダウが教化され誇り高き山地民族のダニは最後まで宣教師に近づかなかつたようだ。

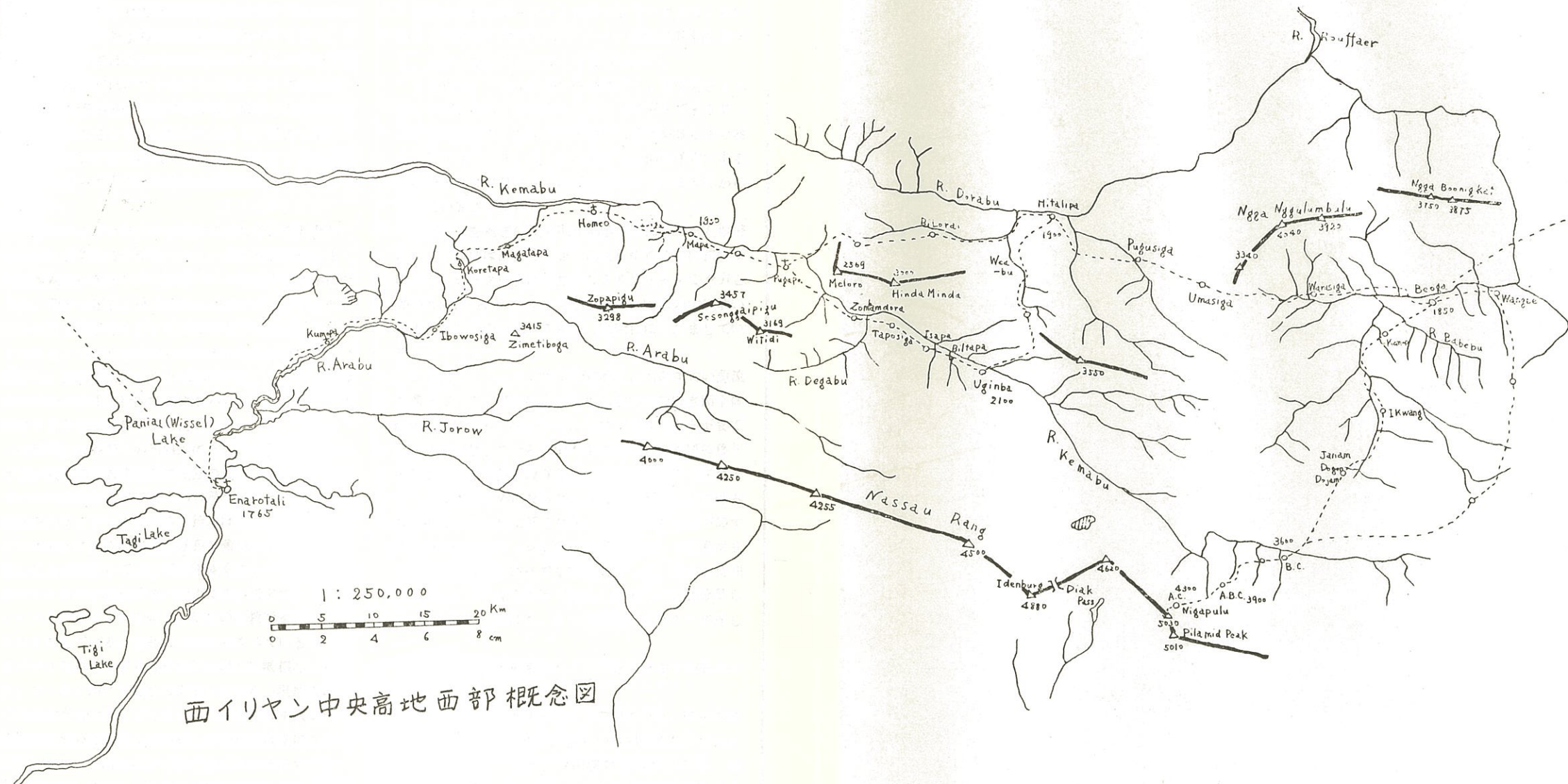
最奥の部落ウギンバですら石器を使っていないのだからヒタリバでは当然鉄器だけが使われている。石器



てくれるという。  
 日、明日は老若  
 いた。日常の仕事  
 ；しかも結婚は  
 良いように考えら  
 しい。

こ来るがなかなか  
 1で何処までポッ  
 しい。やっと10時  
 った。まだ 5, 6  
 持ってくれる。  
 せて我々がむし  
 1を過した。5時  
 荷物をほうり出  
 二。今朝から7時  
 いても日暮れ  
 ぬ。恐るべき駿足  
 女がいい争って  
 いくというのを皆  
 子かずに日帰り  
 これてまたして  
 なくてしまった。  
 ミーターの夜逃げ  
 集めないと  
 自然児の彼  
 自由意志で手伝  
 きようとしても無  
 もない山の中に  
 部落にも物珍ら  
 こくるめでたい連  
 持っている隣り  
 ぽっかしてくれ

な谷である。ウギ  
 だ、ダニ族は未教  
 育があった。こ  
 んで教化に務  
 ま高い。すでに学  
 びト夫妻が持ち込  
 められているが、  
 気は失われてい  
 二、ダニ、ウフン  
 の独立した言語を  
 るものがないので  
 ウが教化され誇  
 教師に近づかなか  
 くなっていないの  
 だ。石器



西イリヤン中央高地西部概念図



西インド中央山地の地形図

にくらべて鉄器の能率の良い事は明らかでも、仕事の能率とそれを使う結果、もたらされる生活の向上とは必ずしも同質のものではないように思われる。そもそも自然な交易に労賃としてばらまかれた鉄斧は原始社会の生活のリズムを変えて行く事だろう。たとえば伐採にしても今まで石斧のペースで行なって森林量と人口のバランスがとれていた所に能率の良すぎる鉄斧が持ち込まればたちまち山は丸坊主になってしまう。すでにヒタリバではこの傾向が現われている。原始社会でも生活の歯車は、ひとつひとつかみ合って廻っているのだから当事者の意志に関係なしに第三者が歯車のひとつをいじると全体が狂ってしまう。弓矢で楽しく戦争をしている原始の人々をいつまでもそっとしておきたいと思ってもそれは現実の前には淡い感傷にしか過ぎない。

ヒタリバよりプラトーに達する道も考えられたが、ポーターを集めるのがむづかしい事と飛行場がせまくて食糧補給が困難なので再度ベオガに転進する事になった。急がば廻れとは本当にこの事である。もしホームヨから変な近道をとらずに、最初の予定通りドウギンドガに越えておれば今ごろはスカルノ峰に登っていただろう。遠征隊は何回もよろめいた後、ようやく元のさやに納って4日行程でヒタリバからベオガに着いたのは2月3日の夕刻であった。

約10度位の谷沿いの傾斜地に作られた飛行場はセスナ機が満載で発着するのに充分の広さである。先着していた科学班の鈴木に迎えられ飛行場の上手に民家の前庭をかりてテントを張る。鈴木はすっかりインドネシア隊にとけ込み、安江副隊長と瀬戸口がホームヨに滞在して昆虫採集している間に仲良くインドネシア科学班とキャラバンを続けてベオガにやって来た。ベオガもヒタリバやホームヨと同じく新教の宣教師ギボンズ夫妻が支配している。宣教師のやり方をみていると人類は平等とか説きながらも原住民との間に厳格な一線を劃して一段と高い立場から支配している。現地人とすぐ友達付き合いをしてしまうお人好しの日本人よりは植民地支配の経験豊かな西欧人のやり方は堂に入っている。ギボンズ氏の紹介で腹心のクリスチャンがポーターに志願して来た。いよいよ登山となるとカボーク族には多くは望めずこれから先はベオガの山地民を使う事となった。

6 スカルノ峰へ

2月12日。いよいよ登山隊9名のみの旅となる。ハミッド隊長達は後からBCまでやって来るというが、我々が下山するまで会う事はないだろう。涙をポロポロこぼして隊員一人一人の手を握りしめ「成功を祈るが無理するなよ」と繰り返す。スカルノ大統領の要請に応える使命感以外に登山の成功を心から願う様子は感激的である。一方、プガバから一カ月以上も我々の

お小姓としてついて来たモニ少年も山の中で風邪でもひかれたら困るとベオガに残していく事にした所、出発の時間が近づくとシクシクと泣き出した。今までも豊かな表情の変化をみせてはいたものの、泣いて別れを惜しむ程高級な情緒を有しているとは予想外であった。

18人の精鋭のポーターと共にプラトーに向う。深い谷を二つ横断してツェンギロン沢出合下流に達する。沢の水量は河中に比して異常に多い。

2月13日。一日中沢沿いの道を行く。正午過ぎより激しい雨となる。雨の中をとぶように下りて来るポーター達に会う。彼等はベオガから荷物をBCまで運んだ帰り途である。我々がBCまで3泊の予定であるのに彼等は3日目にすでに帰途についているのだから信じ難い速さである。

塩作り場を過ぎ最後の開拓部落を後にして無人地帯に入る。雨足は激しく山腹のあまり快適でない狭い所に泊る。ポーター達は皆熱心なクリスチャンで夕方と朝の2回は長いお祈りを欠かさない。民謡の中に歌い込まれた祈りを唱和する声が、原始林にこだましている。

2月14日。ベノゴン河沿いに行く。ものすごい急流で濁っている。河中は2~3mしかないのに水面全体が泡だっている。滝がほとんどなく河は上から下まで急な樋状をなしている。倒木を渡って道は右岸に移りそのままゆるい斜面の直登となった。ようやくプラトへの最後のつめになったようだ。高度につれて巨木の2層林はだんだん低くなり、3000m付近で上下の生活層の一致したブッシュの中に突込んだ。このあたりで美しいのは何といってもアカメガンだ。花かと思間違うばかりの新芽をつけている。やぶくぐり30分足らずで突然視界が広がった。やっと待望のプラトーに達したらしい。

3200mの静かな草原のキャンプ地は今までの最高のものであった。

2月15日。ポックリポックリ草原を行き、時折木性シダの疎林を抜け石灰の一枚岩の緩斜面を登り切った峠でパッとカールステンツ山塊の全容が見えた。50日の間待ち望んだ山々。今はその圧倒的な北壁が目前にあるのだ。イラガより続く高原の眼下にケマブー源流を見下し、その対岸には左に新雪が降ったように白く輝く石灰岩の4500m位の山々、右には一段と高くスノー・キャップをいただくいくつかのピーク、更に右には台地状の主峰(?)から数条のアイス・フォールをはさんでダヤク峠まで雪の稜線がつづいている。BCはケマブー河南岸である。石灰岩のドリーネを映す池をすぎ、ケマブーがうまく伏流になっている所を利用して渡る。これだけ上流であるのにまともに渡渉出来ないほど水量が多い。BCは昨夜のキャンプに優る



申し分ない岡の上に設置した。高度3500m。

優秀なポーター12名をハイ・ポーターとして残し、かねてから約束してあった衣料を支給する。彼等と文明国よりの人を区別する最大のものは衣服だと思っているのであろう。文明人気取りになってズボンを前後逆にはくもの、上衣をはこうとするもの、大変な騒ぎである。その時雨が降って来た。ポーター達は折角着た衣服を脱いでしまって元の裸に逆もどりだ。一張羅を濡らすのは勿体ないらしい。

2月16日。一日ゆっくりとBCにて過す。インドネシア隊の最年長のジャイアディはとてこれから先行動を共にするのは無理のようだ。BCの連絡係として残ってもらおう事にする。

2月17日。BCからはトアン達も重荷をかつぐ。ここから先の道案内はポーターにまかせきりしか仕方がない。意志の疎通は充分ではないが、どうやら以前に白人についてスカルノ峰の麓まで行った事があるらしい。それが何時、何人で行ったかは数字と時の観念がないからわからない。おそらく去年という言葉もないであろう。ギボンスがいうに何年前かと聞くには「俺の家にクリスマス・ツリーが立つのを何回見たか」という具合にたずねるそうだ。我々より以前に確実にこの地方に入ったのは1961年のテンプル達だけである。オーストリアのハーラー達がこの地方に入りイェンブルグを含むこの山塊のピークを総なめにした事は知っていたが彼等が何処を通ったかわからない。また、それ以外に以前に大きな飛行機事故があつてその調査に白人が入ったというがポーター達が参加したのは一体どの遠征隊なのだろうか。山登りの恰好をしたり、クランボンやビッケルを見せてこんな連中かときいても全然要領を得ない。結局、あきらめてポーターについて行く。

正午より豪雨となり小川のほとりに泊る。

2月18日。西南にプラトーを進み、ある谷の内院のような盆地に小屋がけの跡がいくつか見られる地点に達した。南方をむむとこの谷の乗越の彼方に氷を戴いた双峰が見える。どうやらこの地がニューゼaland隊やダコダ機墜落事故の時のBCになったらしい。

2月19日。早朝から日本側全員にスギリンを加えて偵察に出る。乗越を越えたとたんに荒涼たる北壁とその裾に横たわる二つの湖が全容を現わした。それは今までの長いキャラバンの苦勞を忘れさせる景観であった。双峰の東峰は鋭峰で西峰は台地状に見える。どちらが高いか判らぬがいずれかが最高峰ンガブルである事に間違いはない。双峰の北壁は約800mの高度差で切り立っている。特に西峰は見事なバットレスになっている。双峰につづく各ピークの間にはガリーが入っているが、その上部はアイスフォールになっていたりして登路に使えそうなものはない。勿論ロック・クライ

ミングとして覚悟をきめて取り組めば、岩は石灰岩でかたいし、快適なルートが何本か考えられるが、山登りは初めてのインドネシア人の事を考えるとともかく2本の足で立って歩けるルートを探さねばならない。北壁の下の湖水をぐるっと廻りつぶさに偵察するが、岩棚にひっかかった飛行機の残がいを見つけただけでルートの手がかりには得られなかった。

ニューゼaland隊の報告書「ナポーク」によればンガブルとカールステンツ・ピラミッドのCOLには容易に達し得ると記してあり、写真まで掲載されてあるがこれは一体何処の事だろう。はるか西方に登れそうなガレ場が見えてこれが「ナポーク」の写真と似ているようにも見えるがそのCOLはもっと東方でなければならぬ。良く判らないまま引返しキャンプを北壁直下に移す事にする。

2月20日。昨日に劣らない快晴だ。ポーター達がケマブーBCにボッカに下っているので今日は停滞となる。帰着したポーターに聞くとハミッド隊長等もゆっくりケマブーBCに向っているそうだ。

2月21日。朝より本降りである。矢張りここ二日間の良すぎる天気は長続きしない。

2月22日。2人のトアンをつれて行った事があるというポーターに同じ所に案内せよという、彼は双峰の麓につれていった。そこには飛行機の残がいで作られた十字架が立てられていた。どうもこのトアンはハーラー達の事ではなく、飛行機事故の救助パーティーの事らしい。

雨足しげく、早急にテントにもぐり込む。高度計は4300mを示し、いくら赤道直下といえ氷雨にぬれると大変危険である。ポーター達はここまで裸体でやって来るのだから耐寒力は我々よりはるかに優れている。

2月23日。終日雨に為す事なし。

2月24日。朝の時間を利用して主峰、ピラミッド間のCOLの偵察を水瀬、松田と4名のインドネシア隊員が行うが、結果は北壁の直登より手ごわいという悲観的なものだった。ニューゼaland隊が悪天候のためか位置の判断を誤っていた事は明らかになった。残るは西方にルートを求めるより仕方がない。午後は例の如く雨となる。

2月25日。若し快晴なれば田附、水瀬、スギリンが西面ルートの偵察とあわよくばアタックを行う予定だったが暗雲が4100~4200mに垂れ込めていまにも降り出しそうな天気だ。北壁の下を西に廻り小さなCOLを越えると、目指すガリーの下部が暗雲の切れ目に見えた。ガレ場に続くガリーは暗雲の内に消え詳細は判らぬが充分登れる確信を得た。

2月26日。第一次アタック隊が主稜線まで達するも視界悪く引返す。ガリー上部の氷の急斜面に時間がかかるだけでむつかしい所はないという。主稜線に出れ

ば頂上まではただラッセルのみだろう。どうやら成否は天候にかかっている。

ニューゼaland隊もその写真から考えるとこのルートをとったとしか思えない。彼等の報告書は何とも不可解なものだ。

明日のアタックのためキャンプを取付きのガレ場近くに移す。これで一時間半ばかり得になった。

2月27、28日。貴重な時間がどうしようもない悪天のために無為に過ぎていく。食糧も不足勝ちだ。ダコダBCにいるポーター達の米も充分ではない。もっともポーター達はいくら米を与えても充分という事はない。計数の出来ない彼等は旨い米があればあるだけ喰ってしまう。食糧を貯えておく習慣のない彼等は徹底的に「旨いものは宵に喰え」方式なので常に隊員がついていないと食糧管理は出来ない。三日分の米を一日で喰って叱られても何故トアンが怒っているのかわからずキョトンとしている。

2月29日。やっと長雨が晴れた。加藤隊長に留守を守ってもらい5時17分7名でアタックに向う。上部のラッセルが深いので大人数の方が有利である。

ワン・ピッチも行かない間にサンディー少佐は呼吸困難でひっくりかえってしまった。キャンプに送り返した後、後を追う。2時間半の後主稜線に達する。今日こそは頂上へと意気上り、ラッセルに精を出したのも束の間、とんでもないキレットに行詰ってしまった。頂上まで続いていると思った雪面はアイス・フォールとなって切れているではないか。ガスのため良く見えぬがアイス・フォールの底から対面の氷河に入れば今度こそ頂上に達せられるらしい。インドネシアの4名を残し、降り口の偵察に右往左往する。200mの落差があり最大70度位の氷にフィックスをはってインドネシア人を降すのは一仕事だ。何とか氷のない所を思うが仕方なく真直に降下しはじめた。天気はすでにくずれアタックの望みは断えた。ルート工作のみをして引返す。

キャンプにはBCよりハミッド隊長の慰問品が来ていた。謹厳なモスレムがジンの差入れをする程、加藤隊長の飲み助ぶりは知れ渡っている。

3月1日。三度目の正直、今日こそと5時に出発。例のアイス・フォールでは案の定、時間がかかり降り切った時は10時となる。合計は100mのフィックスが張ってあるとはいえ、急な氷の斜間をアイゼンもはいた事なかった連中が恐がらずに下りたのは偉いと思う。選抜された特攻隊員だけに良い根性をしている。若い大学生アタプもニコニコして人が好く特攻隊に劣らなうがなっている。

ンガブルに続く氷河に取付く頃から例の如く天気が怪しくなる。好運にもガスに時々切れ目があり何とか方向が定められる。水瀬、松田の現役山岳部員の馬力

でラッセルもはかどり1時30分に頂上らしい場所に着いた。あやふやな事だが一面のっぺりとした雪原で視界が悪いときは何ともならない。下山の途につこうとした時、突然ガスが晴れて眼前にもっと高いピークがあるではないか。あわてて本当の最高点まで足をのばす。今度こそ最高峰である事を辛抱よくガスの時間を待って確認した。

最近出版されたH. Harrerの著書「Ich komme aus der Steinzeit」(「日本語訳「石器時代への旅」新潮社」)によるとンガブルよりカールステンツ・ピラミッドを高いとしている。地図上ではンガブルが最高峰となっているがその高度差はわずか20mである。我々の感じではやはりンガブルの方が高いと思う。

深雪の中をモグモグ歩いている内に頂上に至るのは呆気ない幕切れだ。純粋に登頂を喜ぶにはすでに第8の登山。むしろ素人のインドネシア隊員を三人も無事にここまで導いて来た喜びが大きい。スギリン、スタルトとアタプの三名は何とか下に早く成功を知らせたい大変な事だ。スタルト中尉はピストルを6発ぶっぱなす。これはあらかじめ定められた連絡方法らしいが、風の有る日にピストルの音が下まで聞こえるかどうか考えても判りそうなものだ。しかし軍人は飽くまで命令に忠実であらねばならぬ。次にはスカルノ大統領より託された3m四方はあろう大インドネシア旗を雪面にひろげた。成功の報と同時に飛行機をとばせて登頂確認の目印にするためである。翌日飛行機がやって来た時には旗は新雪に埋って見つからなかったという。こんなユーモラスなくつかの所業の後、帰途についた。

往路のラッセルがあるにもかかわらずインドネシア側は登頂で気が抜けたのかヨタヨタしている。アイス・フォールの下についた時はすでに夕やみ迫りビバークは必至となった。みぞれさえ降り始め恰好の岩のてっぺりにすわり込み一夜を過す。初めての雪山でのビバークは特攻隊員といえども心細かっただろう。

しかし決して弱音は吐かない。アタプの片言の英語と片言のインドネシア語でも充分意志は通ずる。時にはスタルト中尉やスギリン曹長が若い頃日本軍から習い覚えた日本語を混ぜて話は尽きない。遂には日・イ歌合戦となり雪模様の外を忘れなごやかに夜が更けていった。

翌日、テント地に帰り着くまで7時間もかかった。キャンプで待ちくたびれるサンディー少佐と加藤隊長に迎えられ、ケマブーBCに雨の中を撤退した時はハミッド隊長がワーワー泣いてテントから飛び出して来て「サクセス、サクセス」と隊員に抱きついて喜んだ。

四十才を過ぎた申佐が手離して泣いたのは成功の喜びに加えて、否それ以上にスカルノ大統領から変更の余地なく申し渡された任務、すなわち山に登る事から

解放された喜びの故かもしれない。その意味でハミッド隊長との再会の場面は遠征隊の性格を端的に表わしたものであった。

### 7 エピローグ

頂上でのスダルト中尉のピストルの乱射、BCで感泣したハミッド中佐に始まる興奮はワメナ、コタバル、ピアクと遠征隊がジャカルタに近づくにつれて異常の度合を増して来た。新聞、ラジオは連日遠征隊の事を英雄扱いして報じている。興奮の極はジャカルタに着いて沿道人に埋った中を無蓋ジープに乗せられて大統領官邸のレセプションに向った時だ。たしかに何処かが狂っている。ある見方をすれば日本隊はインドネシアの国威発揚の片棒をかついで踊らされた猿のような存在であろう。また、普通では入国しにくい西イリヤンにジョイントを利用して旨くもぐり込んだともいえる。いずれにしても日本で考えていた遠大な計画はインドネシア軍の作戦計画に巻き込まれたためにその最低限を遂行したに止ったが、遠征を通じてインドネシア隊員といざこざもなく楽しく歩き、山に登れた事は何にもましてさいわいな事だった。

## アラスカの山々

ブラックバーン第3登  
リーガル初登頂

北村 泰一

K<sub>12</sub>計画が盛上ってきた1964年の夏頃、勤務先の同志社から、アラスカへの呼びかけがあった。勿論その時はK<sub>12</sub>計画があるからと謝辞したが、そのK<sub>12</sub>計画も12月の末頃、パキスタン政府のK<sub>12</sub>計画不許可の通知に接してあえなく挫折してしまっただけで、1月の末、再びアラスカの件がもち上がったが今度は断わる理由はない。しかしアラスカに足をつっこむには解決すべき多くの問題があり、すぐには承諾し兼ねた。

まずアラスカへの自分の気持である。南極にいる頃暇にまかせて将来の目標をたてたことがあったが、それではアラスカ・カナダ地方は1960年代の末ということになっている。つまり若い時代には、より高いより峻しい地域を欲していたのである。今アラスカへゆけば大分順序が狂ってくる。当時、K<sub>12</sub>挫折の消沈した空気の中から漸やくカンチエンジュンガへの息吹きが出てきた。しかし8500mは自分の域を出ている。いずれ"8000m"にせよ自分のペースとしてはまず7000mが妥当なところだ。目標が8000mともなれば隊としても大きくなりすぎる。これは自分の肌にあわぬとカンチはあっさりあきらめがついた。アラスカは今の場合、自分の外から与えられたものであるが、高度とか隊の規模からいってもまず自分に適していると考えずばなるまい。

次に人の問題である。今度の隊には海外遠征の経験者は自分以外にない、従ってすべての責任は好むと好まざるとに拘わらず自分の肩にかかってくる。しかし自分の経験も南極のそれしかないが、それとてあまりに隊の規模が大きく、又当時最年少という立場もあって、自分の存在は巨大な歯車の周囲の小歯車群のまたその一歯にすぎぬ存在であり、その経験が今度は隊のスケールは小さいとはいえず、その中心の歯車、いや時としてはそれをまわす動力にさえならなくてはならぬのであるから心細いことこの上もない。AACKの場合なら黙っていても事がどんどん運ぶが、アラスカの場合はそうは必ずしもゆかない。誰か相談相手になる人が一人ほしい。それが当時のいつわらぬ心算であった。

しかし考えてみれば我々にはあまりにも人をたより先輩をたよりすぎている。先輩のきずいたAACKという安楽椅子にあまりにも安易にすわりすぎているのではないか。たとえば募金の問題。若手で一応の議論をするにしても、結局は「それはボスの考えることだ」でケリがついてしまう。「それではいけない。もうよいかげんにボスをたよるのをやめにしよう」などという殊勝な意見が出て「せっかくボスがいるのだ。立っている者は親でも使え」とつい安易なゆきかたにいつのまにか落ちてしまっているのを常としていた。「使え」ならよいが、親にたよるしか方法がないのではいかにも情けない阿呆息子ではないか。よしアラスカは一つのチャンスである。親をたよらず仲間をたよらず一休どれ程のことが出来るか。ひとつためてみよう。これが得た結論であった。その翌日アラスカをやりますと返事をした。

しかし結果はAACKがいかに人材の豊富な団体であるかを知ったのみであった。このことはAACK外で仕事をした人達の共通した感想だと思ふ。阿呆息子の「親にたよらず仲間をたよらず」という意気は壮とすにたつたが、結局は仲間のすばらしさを認識し、親にはまだまだ至らぬことを自覚したのみであった。

こうしてとにかく「アラスカ」が動き出したのは3月初めであった。まずどんな隊にするかを考えなくてはならない。かねて自分の理想としていたのは文武両道の遠征隊である。つまり遠征の多角経営化である。従来もAACKの遠征は伝統的に、学術登山隊(?)の名のもとに出かけたが、それにおとらぬいやそれ以上のものとした。学術の程度ももう少し引き上げたい、そして登山の程度も下げたくない。こういう欲ばった考えがあった。しかし現実には与えられた条件ではとても理想とするには程遠いが、とにかく与えられたもので出来るだけのものはやってみよう。

次に地域の選定である。アラスカの山岳地帯は南の太平洋岸側にかたまっている。マッキンレー (Mt.

Mckinley) 地域には、高い山々があるが、すでにアメリカの重中のプレイ・グラウンド化し、それに明治・早稲田の足跡もあり、日本でいえば槍・穂高。これは第一に除外された。ついでカナダ国境のセント・エライアス (St. Elias), さらにカナダに入るがローガン (Mt. Logan), これは山としてはなかなか立派なものであるが、毎年数パーティの登山隊が入り、未探検という意においては価値が下る。それにアプローチも長く、また関学や関西登高会も名乗り出ている。これは剣に相当しオミット。次の山はマッキンレーとローガン山塊の中央に位置するランゲル (Wrangell Mts.) 山塊。ここにはシアチェンやバルトロを凌ぐナベスナ氷河 (Nabesna Glacier) があり、その最高峰はブラックバーン峰 (Blackburn 5038m)。これは毛勝猫又にあたる。初登は50年前の1912年頃、しかし初登というだけで記録はほとんどない Alpine Journal にはほんの15行ばかり。おまけにアプローチも短い。さらに現在の山日記の「アラスカの山々」に未登峰としてのこっているリーガル峰 (Regal 4300m) もこの山塊に属している。山としての器量は剣・穂高におとるがこれならなんとかゆける。こうして目標の地域はランゲル山塊ときまった。

登山隊は現役を主とし、海外の山は自分としても初陣であり、そう高きは望めない。ブラックバーンの5038mは今の場合まず自分の力で出来る範囲という点では辛抱しなくてはならない。それに Regal の初登とそれを結ぶ稜線の縦走を加えれば自分として上々の出来であると考えた。さらに学術の方は、高緯度地方という特色と自分の専門を考えれば、地球物理以外にはない。自分としてはやはり山登りも出来、今回の目的になった観測も出来る人物を探したが、これは現役の学生達の域を出ている。種々物色の結果出身教室である地球物理の大学院博士課程の荒木君に白羽の矢をたてた。こうして学術の方も単なるルーチン観測と異って研究的内容をもった地球磁場の脈動現象の観測と V.L.F. (宇宙電磁場現象) の観測、それに隊長の西原教授が地理出身であることから氷河の応力測定というかたい目標をかかげて隊が出来上がった。

結果として Blackburn 第3登、Regal 初登と山の方は初期の目的をまあまあ果たし、学術の方も V.L.F. は120点、地球磁場の測定は60点。氷河の応力測定50点。本人の話だから点のよい方はあまり信用が出来ない。

### 山麓への旅

東南アジア、インド方面と異って船には苦勞をした。アラスカ方面に航路をもつのが川崎汽船一社であるからである。何度もお百度をふみ、やっと6名アンカレッジへ直行する船便が確保出来たのも東の間、出発の一カ月前になって急に就航する船が変更になった。

6名は2名となり、しかもアブレた4名は予定より半月も早くサンフランシスコ経由で出発しなくてはならない。出発直前の数日がいかに有効で重要であるは、遠征でも試験でも多くの先例が示すところである。隊の主力が半月も早く出てしまっただけでは、まだ集っていない物資の梱包から荷積にいたる迄、準備の上で大変な支障をきたすことになる。とて4名航空機にする余裕もない。とにかくやれるところ迄やらなくてはならない。遠征隊出発前の常である忙しさにさらに輪をかけた数日が過ぎて、先発隊4名は6月5日サンフランシスコへ出発した。

6月17日後発隊2名と荷物をアンカレッジへ送り出したあと、自分は20日夜ノースウエスト機でアンカレッジにとび、その日のうちに到着した。アンカレッジ迄6時間、東向きだから、ねたと思つたらもう日が昇りしかも同じ日附なので変な具合だ。先発隊4名とアンカレッジで合流し、本隊到着迄の10日あまりを偵察に費したがその話は省こう。

7月2日後発隊2名と荷物が、そして翌3日隊長がアンカレッジに到着し、これで一行8名全員が揃ったことになる。

アンカレッジの街は、あれ程の震害の跡も見せない程すっかり片附いていて、ここが陥没したあとだと説明されてはじめてそれと気がつき、当時の惨状をしのぶ始末であった。

山麓へ至る第1の根拠点は、アンカレッジより東北へ約350kmの距離にあるガルカナ (Gulkana) というところである。仕事はそこへまず1トンあまりの荷を運ぶことにある。幸いにもガルカナへは立派なハイウェイ、所謂グレン・ハイウェイ (Glen HWY) が通じているので、トラックによる荷物の輸送が可能である。しかし、アラスカは日本と異って大変な物価高、中でも人件費はべらぼうに高い。運転手つきでトラックを借りると1日250ドル(約9万円)を余分にとられる。これではとてもかなわない。多少危険でも、我々自身で運転して行く他はない。幸い長谷川君が免許を持っているのでトラックを借り、その第1歩を踏み出したのは7月4日の早朝であった。

バルマー (Palmer) を過ぎる頃から道はマタヌスカ (Matanuska) 溪谷に沿って相当な登り坂になる。どんどん高度を稼ぎ溪谷がやや広くなった頃、左岸より大きな氷河が本流に入っているのが見えた。これが有名なマタヌスカ氷河である。このマタヌスカ氷河は他の数多い氷河とやや趣を異にしている。普通大きな山岳氷河の末端といえば、所謂ターミナル・モレーン (terminal moraine) で、真黒になる程汚されているものだが、このマタヌスカ氷河は末端まで美しく、折からの陽光にキラキラと輝いていた。

マタヌスカ氷河を過ぎ、シープ山脈 (Sheep Moun-

ains) のすそをまく山道を20km進んだところにある峠を越すと、忽然として大平原が展開される。高度約600m。見渡す限りの湖沼と森林。我々はアラスカの内地部に歩を踏み入れたのであった。初めてこの地に足をふみ入れた探検家達の感激をしのびながら、水平線の彼方までただ真直にのびるハイウェイをひた走りに走る。このあたりはほとんど平坦で、小高い岡を上ったり下ったりして道路がついている。

ハイウェイの数カ所で道路拡張工事をやっていた。日本と異なるところは、そこに働く人影が大変まばらであるという事である。ただ巨大な土木工事車が数台甲虫がはうように動いているだけだ。それでいて、1週間後に再びそこを通った時には、ぐんぐん仕事はかどっている様子がみえ、2カ月後の帰途にはすっかり完成していたのには驚かされた。日本のように、やたらと人間が多い割合に、工事に日数がかかるのとは大分様子が異っていた。

いくつかの岡を越え、ガルクナに着く。ここに大きな飛行場があり、ウィルソン (Jack. E. Wilson) というブッシュ・パイロット (bush pilot) が住んでいる。ブッシュ・パイロットとは、ブッシュのはえているようなところでも、ちょっとしたスペースさえあれば勇敢に離着陸することからこうした名前がついたそうである。いわばその道の野武士的存在である。アラスカは、いまだに狩猟のたのしめる数少ない土地のひとつで、彼等はそのガイドとして生計をたてている。

このアラスカに、ブッシュ・パイロットは数多く居ても、スキーをつけて氷河上に離着陸できるものは多くはない。西の方、マッキンレー地方にドン・シェルドン (Don Sheldon)、そして東のガルクナにこのウィルソンだけだとは本人の話である。

このガルクナから、基地になるナベスナ氷河まで直線距離にして約100km、航路にして160km以上はあろう。この間の輸送手段が問題であった。無論、自動車道路などはない。前にも述べたように人件費がまことに高く、ヒマラヤのように人夫を使うわけにはいかない。例をあげると、アルバイト白人学生1日30ドル(約10800円)、アラスカ大学の日本人助教授1日43ドル(約15500円)、そしてRCAに勤める35才位の高級技術者になると1日133ドル(約48000円)、全く嘆息が出るような額である。したがって、たとえ人間がいるにしても、そんな人間を使うよりも飛行機で輸送する方がずっと安上りで済む。飛行機といってもパイパー・スーパーカブという、ほんの小さな2人用の小型機である。1人で尾部をひょいと持ち上げて、簡単に方向転換できる程度のものである。

基地は、ナベスナ氷河の末端より少し下流のオレンジ・ヒル (Orange Hill) と大体の場所の選定はしてあるものの、果してそこが基地として適当か否か、まず

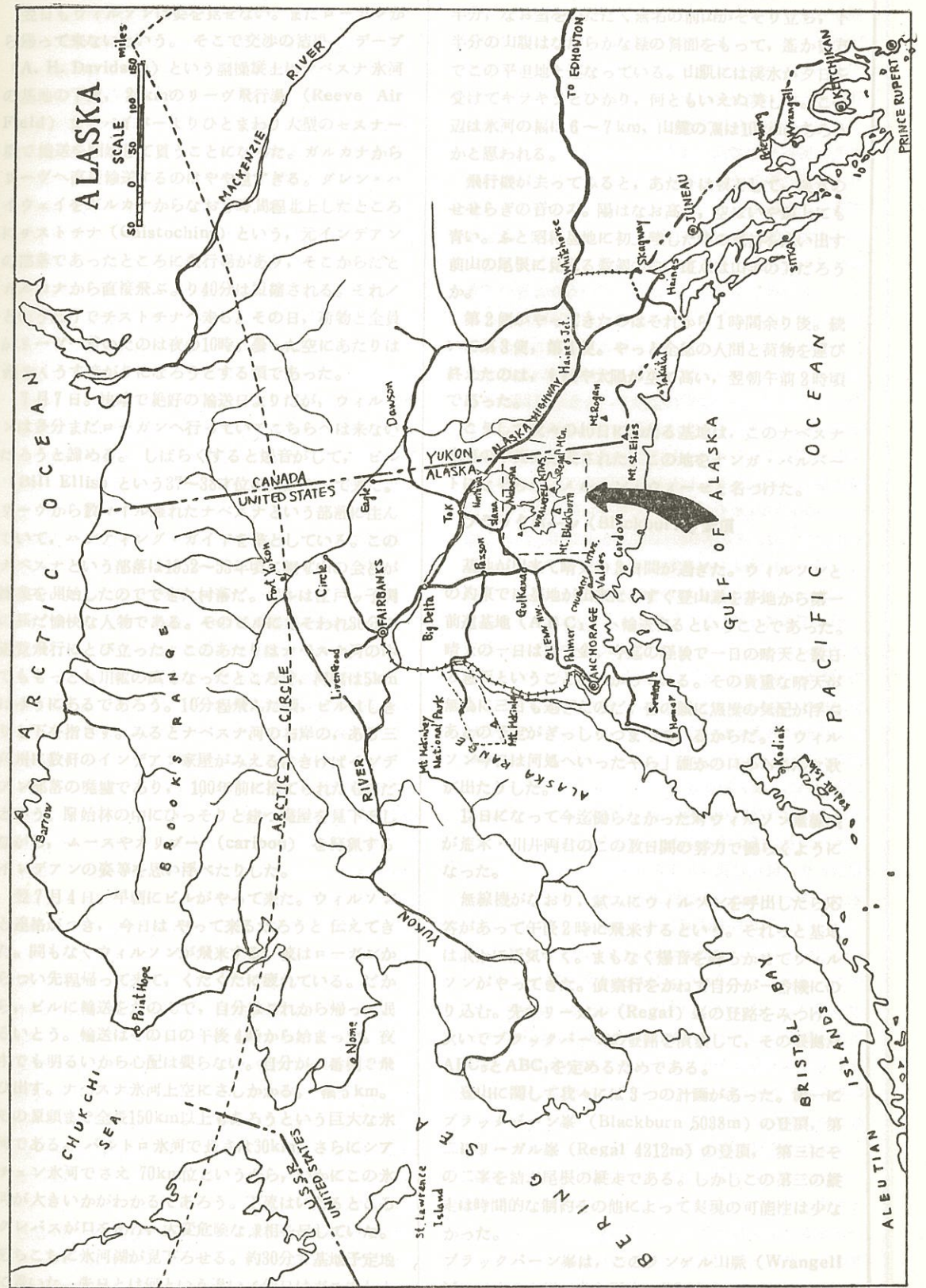
偵察してみなくてはならない。ガルクナに着いた日の午後4時頃、隊長と共に偵察に飛び立つ。オレンジ・ヒルまで約1時間の行程。極地の夏の陽は沈まず、上空から見下ろす原野は湖と森林をうまく配合した一幅の絵であった。その中を銅河 (Copper River) が原始林を裁割るようしてダクダクたる泥水を流している。アラスカは氷河土壌であるのと、この辺は特に火山灰質の土であるので、川は大抵泥水である。処々の川辺から、泥水があふれ出し、原始林の中へ泥が木を押し倒しながら流れた跡が見える。パイパーはそうした地上の目印をたよりに進んで行く。湖で水を飲むムース (moose)、森林の中を走り去る名も知らぬ動物達。谷間に苔をはむ山羊 (mountain sheep) の群。アラスカの自然は豊かである。ドラム峯 (Mt. Drum, 3660m)、サンフォード峯 (Mt. Sanford, 4952m) の山麓をぐるりとまわり、ゴート谷 (Goat Valley) 沿ってナベスナ谷に近づく。雲は低く、今にも雨になりそうな天気であった。

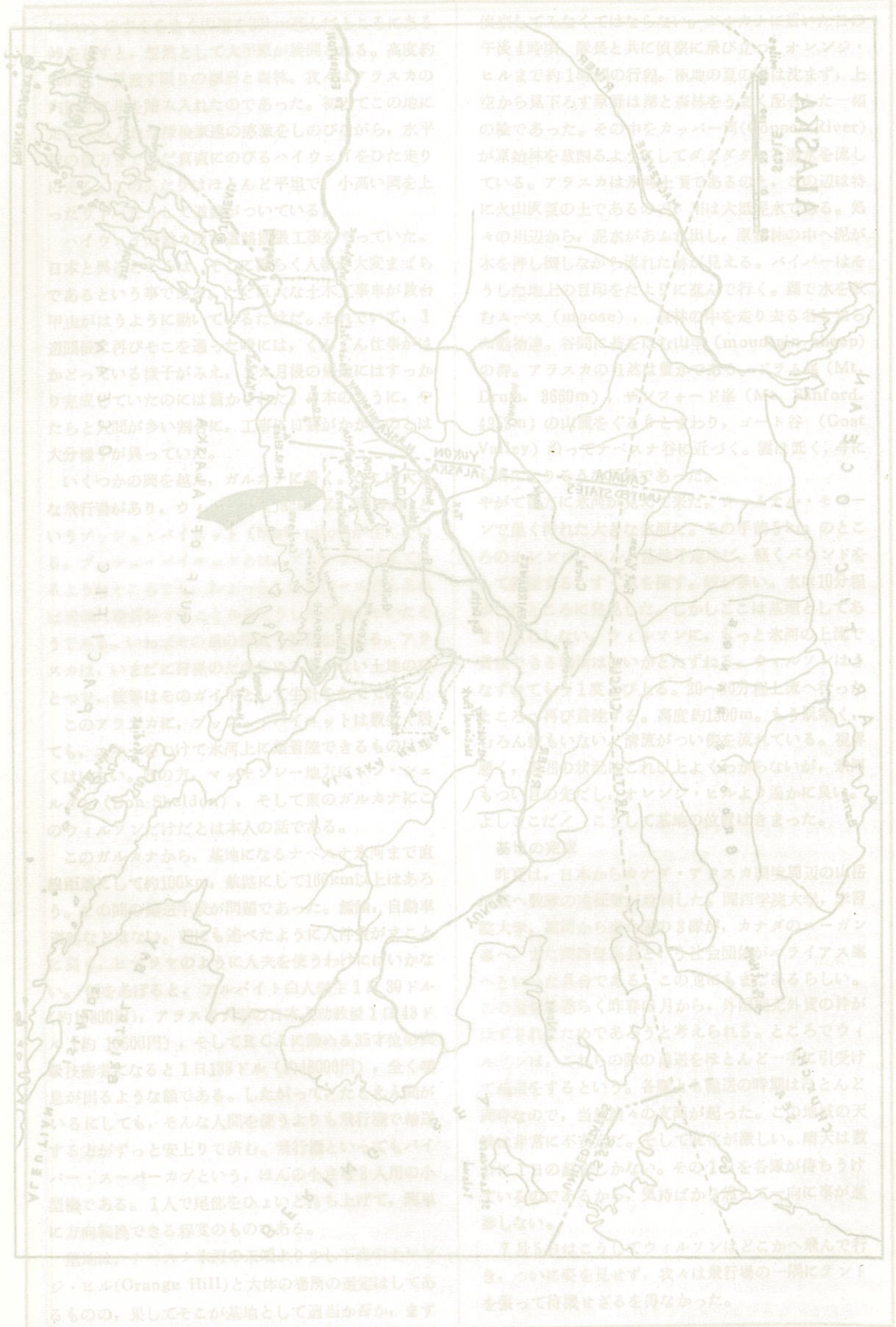
やがて前方に氷河が見えて来た。ターミナル・モレーンで黒く汚れた大きな氷河だ。その手前5kmのところのオレンジ・ヒル、基地予定地だ。軽くバウンドをして着陸する。すぐ水を探す。蚊が多い。水は10分程歩いたところに発見した。しかしここは基地としてあまり感心しない。ウィルソンに、もっと氷河の上流で着陸できる場所はないかとたずねる。ウィルソンはうなずいてもう1度とび上る。20~30分程上流へ行ったらところへ再び着陸する。高度約1300m。もう肌寒く、むろん蚊もない。清流がつい傍を流れている。視界悪く、周囲の状況はこれ以上よくわからないが、氷河もつい目の先だし、オレンジ・ヒルより遙かに良い。よしこだノ こうして基地の位置はきまった。

### 基地の完成

昨夏は、日本からカナダ・アラスカ国境周辺の山岳地域へ数隊の遠征隊が殺到した。関西学院大学、学習院大学、福岡から来た隊の3隊が、カナダのローガン峯へ、また関西登高会という社会団体がエライアス峯へと行った具合である。この他にもまだあるらしい。この現象は恐らく昨春四月から、外国観光外貨の枠がはずされたためであろうと考えられる。ところでウィルソンは、これらの隊の輸送をほとんど一手に引受けて輸送をするという。各隊とも輸送の時期はほとんど同時なので、当然諸々の支障が起った。この地域の天候は非常に不安定だ。そして変化が激しい。晴天は数日に1日の割合しかない。その1日を各隊が待ちうけているのであるから、気持ばかり焦って一向に事が進捗しない。

7月5日はこうしてウィルソンはどこかへ飛んで行き、ついに姿を見せず、我々は飛行場の一角にテントを張って待機せざるを得なかった。





翌日もウィルソンは姿を見せない。まだローガンから帰って来ないという。そこで交渉の結果、デーブ (A. H. Davidson) という副操縦士にナベスナ氷河の基地の下流、20kmのリーヴ飛行場 (Reeve Air Field) までパイパーよりひとまわり大型のセスナー機で輸送を開始して貰うことになった。ガルカナからリーヴへ直接輸送するのはやや遠すぎる。グレン・ハイウェイをガルカナからなお2時間程北上したところにチストチナ (Chistochina) という、元インディアンの部落であったところに飛行場があり、そこからだとガルカナから直接飛ぶより40分は短縮される。それ／＼というわけでチストチナへ走る。その日、荷物と全員がリーヴへ着いたのは夜の10時。曇った空にあたりは漸やくす暗がりになるうとする頃であった。

7月7日。快晴で絶好の輸送日よりだが、ウィルソンは多分まだローガンへ行ってこちらへは来ないだろうと諦める。しばらくすると爆音がして、ビル (Bill Ellis) という37~38才位の男がやって来た。リーヴから数マイル離れたナベスナという部落に住んでいて、ハンティング・ガイドを業としている。このナベスナという部落は1952~53年頃に銅鉱山の会社が操業を開始したのでできた村落だ。ビルは江戸っ子調の甚だ愉快な人物である。そのビルにさそわれ30分の遊覧飛行にとび立った。このあたりはナベスナ河の中でももっとも川幅の広がったところで、河幅は5kmはゆうにあるであろう。10分程飛んだ頃、ビルはしきりと下を指さす。みるとナベスナ河の右岸の、ある三角州に数軒のインディアン家屋がみえる。きけばインディアン部落の廃墟であり、100年前に捨てられたものだという。原始林の中にひっそりと建つ廃屋を見下ろしながら、ムスヤカリブー (caribou) を狩猟するインディアンの姿等を思い浮べたりした。

翌7月4日。早朝にビルがやって来た。ウィルソンと連絡がつき、今日は やって来るだろうと 伝えてきた。間もなくウィルソンが飛来する。彼はローガンからつい先程帰って来て、くたくたに疲れている。だから、ビルに輸送をたのんで、自分はこれから帰って眠るという。輸送はその日の午後4時から始まった。夜中でも明るいから心配は要らない。自分が一番機で飛び出す。ナベスナ氷河上空にさしかかる。幅5km。その原頭まで全長150km以上もあろうという巨大な氷河である。バルトロ氷河で長さは30km、さらにシアチェン氷河でさえ70km位というから、いかにこの氷河が大きいかわかるであろう。下流はいたるところクレバスが口を明け、大変危険な 景相を呈していた。あちこちに氷河湖が見下ろせる。約30分で基地予定地に着いた。先日とは何という違い／＼先日はガスでわからなかったが、基地予定地は氷河のワキの氷河堆積物でできた広々とした平坦地の一隅にあり、眼前には上

半分、なお雪をいただく無名の前山がそそり立ち、下半分の山腹はなだらかな緑の斜面をもって、遙か彼方でこの平坦地と連なっている。山肌には溪水が夕日を受けてキラキラとひかり、何ともいぬ美しさ。この辺は氷河の幅は6~7km、山麓の幅は10kmはあろうかと思われる。

飛行機が去ってみると、あたりは寂として、溪水のせせらぎの音のみ。陽はなお高く、空はいやが上にも青い。ふと昭和基地に初上陸した時の気持を思い出す前山の尾根に見える数個の白い斑点は山羊の群だろうか。

第2便がやってきたのはそれから1時間余り後。続いて第3便、第4便。やっと全部の人間と荷物を運び終えたのは、もはや太陽が空に高い、翌朝午前2時頃であった。

こうして我々の40日にわたる基地は、このナベスナ氷河の中流に完成された。この地をナンガ・バルバートになぞらえ、メルヘン・ウィーゼと名づけた。

**ブラックバーン (Blackburn) 登頂**

基地が出来て晴天の3日間が過ぎた。ウィルソンとの約束では基地が出来たらすぐ登山隊を基地から第一前進基地 (ABC<sub>1</sub>) へ輸送するということであった。晴天の一日は価値千金。今迄の経験で一日の晴天と数日の悪天ということがわかっている。その貴重な晴天が無為に三日も過ぎたのだ。皆の顔に焦燥の気配が浮ぶあとの予定がぎっしりつまっているからだ。「ウィルソン今日は何処へいったやら」誰かの口からこんな歌が出たりした。

13日になって今迄働らなかつた対ウィルソン無線機が荒木・川井両君のこの数日間の努力で働らくようになった。

無線機がなおり、試みにウィルソンを呼出したら応答があつて午後2時に飛来するという。それと基地は俄かに活気づく。まもなく爆音を轟ろかせてウィルソンがやってきた。偵察行をかねて自分が一番機にのり込む。先ずリーガル (Regal) 峯の登路をみつけ、次いでブラックバーンの登路を偵察して、その根拠点ABC<sub>2</sub>とABC<sub>1</sub>を定めるためである。

登山に関して我々には3つの計画があつた。第一にブラックバーン峯 (Blackburn 5038m) の登頂、第二にリーガル峯 (Regal 4212m) の登頂、第三にその二峯を結ぶ根根の縦走である。しかしこの第三の縦走は時間的な制約その他によって実現の可能性は少なかった。

ブラックバーン峯は、このランゲル山脈 (Wrangell Mts.) 中の主峯であり巨大な体軀をもつ雪と氷の山である。第一登は1913年アメリカのドラ・キーン隊が我々のとは反対側のケニコット氷河 (Kennicott Gl.)

側から登頂した。第二登はそれから約半世紀の後の1958年アメリカ各地からの混成隊、ブルーマ隊によってナベスナ側から登頂された。その間いくつかの隊が登頂に失敗していたが、

チストチナで荷物を輸送している時、一人の元気な老人が傍へやってき、君達はどこから来てどこへゆこうとしているのかねと話しかけてきた。日本からやって来たことを知ると、よくも遠いところからやって来たなと感にたえぬ様子。さらにブラックバーン登頂計画を知ると老人の目がキラリと輝いた。そしてブラックバーンは誰が初登頂したか知っているかときいてきた。何故そんなことをきくのか不思議に思いつつ、ドラ・キーンが1913年に登ったと答える。ところがその老人、ドラ・キーンは決して登ってはいないのだときた。話があまり調子はずれなので、もう一度問い返したところ、彼は74才で今は退役しているが当時はガイドをしていてドラ・キーンについてブラックバーン登頂に加わったという。しかし自分は途中迄しか行っていないが仲間のガイドはドラ・キーンについて頂上近くまで行った。その仲間の話によると登頂したことになる日は嵐で、自分は途中で待っていたが、ドラ・キーン達はその嵐の中を出かけていった。まもなく帰ってきて登頂したというが、あの嵐の中で登頂出来る筈がないということである。これは登山家にとって相当重要なことである。しかしドラ・キーンは初登頂から今は半世紀もたっている。自分は歴史家ではない。詳細に調査すればドラ・キーンは偽登の証拠があげられるかも知れないが、この老人の話も100%信用出来ないし、また反証をあげる努力をする気もない。まあよいではないか。50年前の話ともなれば仮に偽登であったとしても時効にかかっている。そんなことの詮策より、現在の我々による登頂の方が大切である。老人が去ったあとそんな風に考えた。

第二のリーガル峯に関しては文献も写真もなく、この点で全く「未知の山」であった。高度は4200mそこそこ。だが比較的離れた独立峯なので大抵の地図にはのっていない。我々はこの「未知さ」に強い魅力を感じた。基地からもリーガル峯は前山にかくされその姿をみることは出来なかった。どんな山だろうか？我々の隊の力で登り得る山か？こうした疑問が絶えず心を占めていた。

まもなく機は基地を飛び立った。対地高度約300mナベスナ水河の全貌が捕えられる。下流では荒々しかかった水河も上流では大分穏かになって来た。モレーンが何本か水河を縦わりに入っている。このモレーンの数を数えれば上流に存在する支流の数がわかるといわれている。数十頭の山羊の群を眼下にみおろしながら、機はナベスナ水河源頭雪原から東に連路をとり、リーガルへ向う。「どんな山だろうか？」それは初め

で見合いをするあの心のときめきにも似ていた。やがて或前南峯の岩壁をまがりきると目の前が一度に開けて来た。「しめた！これならいける！」まず思ったことはそれであった。リーガルの周用を偵察する。西北尾根はクレバス(crevasse)が多く、それにあまりにも長い。南尾根か又はダイレクトに頂上に続く西尾根を登るべきだ。これでリーガルはよしと。さて次は縦走路だ。機はブラックバーンに向いまもなく縦走路にさしかかる。おおこれは悪い！鋭いナイフ・エッジが重々と続く。

このあたりの山相は大体大わけして、二つにわけられる。3000m級の山の相と5000m級のそれとである。このあたりの雪線は2000～3000mの間にある。だからそのあたりの高さで一番侵蝕・風化が激しくなる。事実5000m級の山は、山頂付近では非常に穏やかな相をしていて登攀にそう困難な技術はいらない。しかし3000m級になるとその多くの峯は絶壁と鋭い稜線にとりかこまれ、しかも岩質は極端にもろい。縦走路は簡単に諦めた。やがてブラックバーンにさしかかる。まず最初に予定した東北尾根の偵察にかかる。下半部はよしと。だが下半から上半にさしかかるところが悪そうだ。もっと近づく。おおこれは絶望的だ。下半と上半を連結する尾根の両側は1000m以上もなご落ち鋭いナイフ・エッジが1～2マイルも続きそのドンゾマリに急傾斜の氷壁が立ちだけり、そして上半へと続いていて。現有勢力の4名ではとてもこの悪尾根の輸送は続けられまい。とは思うものの、何とかここに可能なルートはみつけれないか。ウィルソンに頼んで3度4度その上空をとんだが、とぶ程に見る程に否定的な気持になって来た。さあどうする。ルート変更か？又はあくまでこの尾根を試みるか？だがこの尾根を放棄すれば、6年前アメリカ隊によって登られている尾根を登らねばならない。我々はこの尾根をやりたいのだ。1分、2分と時間がたつ。ウィルソンがうながす。さあどう？一瞬皆々の考えがさっと心を走る。自分はこの尾根をやりたい。仕事というものは多少不安でも全身全霊を打ち込めば、必ず道が開けるものだ。思いきってここにしろという声ど、いやいやお前は必ず勝てる勝負だけをやるのだという声交互にきこえる。何も知らぬウィルソンは予定地の東北尾根の末端めがけて降り出す。もう猶余は出来ない一瞬心を決める。「よし俺は必ず勝つ勝負だけをしよう」と。だがまだ前途に不安は残る。北西稜は果して可能か？

候補尾根の一つに考えていた中央稜も実際にみると雪崩の危険が多くあまり感心しない。北西稜のルートも決して安全とはいえないが、前二者に較べてずっと安全そうに見えた。ウィルソンは北西稜へゆくり高度を下げ始めた。その時これから降りようとする谷底

から800m程上に一寸したコルがあってそのナベスナ側にゆるい傾斜をもつ雪原があるのをみつけた。ウィルソンにそこへ降りられないだろうかたずねると、わからぬが調べてみようかと高度を上げ始めた。2～3回雪原上を旋回する。しばらく考えていた彼はやがてOKのサインをして下降しはじめた。

軽いショックと共に着陸する。正確な着陸だった。眼前にこれから登ろうとする北西稜がかなりな傾斜でもって立ちはだかる。雪崩の心配もない。うん、ここはABC<sub>1</sub>として適当だ。だがこの地がこのあたりでもっとも気象条件の悪いところであろうとはその時知る由もなかった。

ウィルソンはすぐ帰っていった。高度2800m。頂上迄あと2200m。キャンプを2つ出せばよからうと胸算用をする。

一時間程して第二便で内藤君がやってきた。この頃から弱い風が出だしてきた。第三便川井君がやって来た時、風の為機がバランスを失い極度の脚が少しひん曲ってしまった。あと松本君が残っているがこの天気は明日までもつから今日の輸送はこれで打切り、ガルカナに戻って修理すると爆音を残して去っていった。爆音が去ると静寂がひしひしと迫ってくる。天気はいやが上にもよい。遠くナベスナ雪原の岩壁も望まれる。だがしかしこの天気はいつ迄もつものか。

その日は早めに寝る。真夜中12時になってもまだ外は明るい。ふと夢のかすかな奥にカタカタという音がする。何だろうと夢うつつの内にハッと気がつく。飛行機だ。外へ出ると未だ機影は見えないが確かに音がする。あたりの静寂の中にあつて針の音一本でも聞きとれる位であった。まもなく松本君が降りたて来た。これで万事OK。ウィルソンと握手して別れる。7月14日午前6時であった。

さて今日とはかく偵察をかねて目の前の氷壁を登らねばならない。8時出発。肩の荷がずしりと重い。

10時頃約200m程登る。やっとなコルの向う側のクスクラナ水河(Kuskulana Gl.)が眺められる高さだ。ナベスナ側と異って、雪が大変少ない。おそらく谷全体がナベスナ程大規模ではないので雪の供給が少ないこと、南斜面なので雪の昇華が激しいからであろう雪崩の音しきり。固定ザイルをどんどん使用する。急傾斜で60°はあろう。しかし雪はしっかりしている。3500m位の地点から斜面に蒼氷が出だしてきた。雪と蒼氷の混合である。午後3時30分、とある氷塊の突き出した蔭に、わずかに平坦な空間のあるところで停止する。ここは下からみていた前南峯にはまだまだ及ぶまい。高度は3700m、富士山の高さだ。まだ時間は早かったがこれから上はなほ傾斜が増し、デボ地点が果してみつかるかどうかはわからないので、その日はそこに荷物をおきABC<sub>1</sub>迄おいる。あれ程晴れていた

のに、ABC<sub>1</sub>に降りた頃はすっかり曇り小雪さえバラついて来た。

翌朝15日、再び晴天。昨日の疲れがとりきれずけだるい身体をむちうって再び荷上げ。昨日のトレースが残っており、大いに高度をかせぐ。肩の荷が重い。ヒマラヤと異ってアラスカでは人夫がいなくて荷上げはすべて隊員でなくてはならない。4人で300Kgの荷は相当なものである。若い3人はほとんど進む。自分は現役の頃より足はおそい。3人におくれをとるまいと進むが思うように進まない。やっとなのことで追いつきザイル2本もってもらう。これで大分怪くなった。やはり荷物にハンディをつけなくてはならない。自分の年が感ぜられて悲しかった。

昨日のデボ地点へ3時間も早くつく。もっていた固定ザイル250mはすべて使用した。このデボ地点より上は一寸みたところでも傾斜が相当に急で、この先どれ程固定ザイルが必要かわからない。川井・松本両君を偵察に出し、内藤君と私はテントを張ったあと、ルートに固定ザイルをはったりして明日にそなえた。まもなく両君が帰着したが、その報告によるとこれからは蒼氷と雪と急傾斜で今迄のルートの中ではもっとも悪く、彼等はその悪場の終りそうな4000mの地点迄登ってきたとのことであった。そこでこのデボ地点を正式に第一キャンプ地(C<sub>1</sub>)とすることにきめた。第一キャンプは氷塊の蔭のほんの一坪程のスペースを利用して張られ、頭上は蒼氷が続き眼下は1000m以上もナギ落ちていたという絶景の場所である。ついそばにランゲル峯(Wrangell 4346m)、サンフォード峯(Sanford 5032m)、ジャーヴィス峯(Jarvis 4593m)が望まれる。この地を中天にかかるキャンプという意味で、鷲ノ巣キャンプと呼ぶことにした。その日は再びABC<sub>1</sub>に降りる。

翌朝4時に起きる。-6°C。前夜バラバラと雪の音がしていたので今日は駄目かと思っていたらまた快晴である。テントを片付け、もうかよいなれた道となったルートを3度荷上げする。体の調子もついてきたので快調に進む。はじめは固定ザイルをはり慎重に進んだ3つの悪場も簡単にやりすごし、3時間程で鷲ノ巣キャンプに到着した。この3日間連続晴天が続いたので、トレースが消えず大変幸運であった。若し一たん悪天になりトレースが消えたら、またはじめからラッセルのしなをしなくてはならない。

その夜は久しぶりに氷でつくった水のみ、南極の味を思い出した。

ウィスキーを飲みながら、翌日の登頂作戦をたてる。鷲ノ巣キャンプから頂上迄は高距離にして1200m。高距離だけから判断すればラッシュで行ってゆけない高さではないが途中でどんな悪場があるかもしれない。確実に登頂するためにはもうひとつキャンプを建設しなけ

ればならなかった。しかしテントの数や大きさからいって、もはや4人同時に行動するわけにはゆかない。そこで第一登頂隊として川井・内藤両君を、第二登頂隊として松本君と私を決め、第二登頂隊は第一登頂隊を支援して翌日は第2キャンプ(C<sub>2</sub>)を建設することにした。当然第一登頂隊に選ばれると思っていた松本君は、日頃の隠やかさに似ずむっつりと黙りこんで早々と寝こんでしまった。翌7月17日は3時に起床。もう外は明るい。空は部厚そうな高層雲にとざされ風一つなく、嵐の前の静けさといった不気味な感じ。視界も悪い。今日は荒れそうだ。

6時に鷲ノ巣キャンプを出発。すぐ目の前の急傾斜を登る。川井・松本両君の努力で100mの蒼氷の壁にステップが切られる。彼等の技術は信頼出来る。私はただあとからついて行けばよかった。

4000mのあたりで蒼氷の急傾斜は終り、4100mあたりから傾斜はゆるく雪も柔かくなって来た。松本君は元気よくラッセルしてゆくが、自分はなかなかついてゆけない。肩の荷がくいの。明らかに高度の影響を自覚した。一寸早すぎると思ったが、4400mのところにC<sub>2</sub>を建設する。天候は悪化の傾向がみえる。急がねばならない。風は冷たく高所服を着てもゾクゾクしてくる。軽い頭痛がする。呼吸をいくらしめてもしたりない感じである。第一登頂隊の川井・内藤両君をC<sub>2</sub>に残し再び急斜面を鷲ノ巣キャンプへと降りた。往路3時間、帰路2時間、行動時間の短かさの割には、ぐったりとした疲労を覚えた。

鷲ノ巣キャンプに戻って1時間程した午後1時頃猛然たる風が吹き出した。今にもさげんばかりのテントのハタメキ。テントのすぐ上の氷塊のかどをきる風は悪魔の悲鳴に似て、この絶壁の一角の高度4000mの小さな鷲ノ巣キャンプは狂騒の場と化した。よかった、もう1時間寝坊していたら、あの蒼氷の急斜面でこの嵐にあったところであったとその幸運をよろこびあった。今にもほりさげんばかりのテントのハタメキ。ふと南極のボヌーテンへの犬橇旅行のことを思い出した。当時の私達はまだ極地の嵐を知らない故に、突然にやって来たブリザードにテントの支柱を立てるひまもなく、唯テントの布をかぶり、シュラフにもぐりひたすら嵐のおさまるのを待っていた時の不安。それに比べてこの気持の豊かさ、嵐の程度は若干おちるにしても、シュラフにもぐり当時を回想する余裕もっていた自分であった。

夕方7時頃風はおさまり始めた。空も快晴となる。一時的な前線の通過か？ 眼下に雲がとびすばらしい景観。テントの外のはすっかり雪で埋っていた。日が落ちる。淡い星が2つ3つ。明日もこの天気もちますように。時々思い出したように嵐の名残りの風がさつと雪を飛ばしていった。

翌18日も3時に起きる。風もすっかりやんで絶好の登頂日。今日はC<sub>2</sub>から第一登頂隊が登頂し、鷲ノ巣キャンプから我々第二登頂隊がC<sub>2</sub>迄登ることになっている。しかし天気がよく、それにもし身体の状態がよかったら同時登頂をやろうと決める。第二登頂隊に入ったことを残念がっていた松本君はすっかり元気をとり戻していた。

5時に出発。サブザック軽装の快適さ。ピッチぐんぐんのぼり2時間でC<sub>2</sub>着。第一登頂隊はすでにその時より4時間も前に出発していることを知った。

C<sub>2</sub>から上はだだっぴろい尾根。技術的には何の心配もないがヒドン・クレバスだけが恐い。それに高度影響という関所も通らねばならない。

昨日の怪い頭痛はすっかり治っていたが、C<sub>2</sub>を通過した頃より段々高度影響を自覚して来た。息切れ、立ちくらみが次第に激しくなってくる。4800m位より上は、歩くことの変れよりも、如何にちょっとでも多く酸素を吸収するかの方へ努力が集中された。60歩進んで20歩やすみ、40歩あゆみはで、10歩やすむ。うっかりしていると深呼吸が浅くなり意識が朦朧と恍惚状態になる。ハッと我にかえって再び一杯深呼吸をする。小さな肺はフル運転して、今にも破れんばかりのドクドクという音が耳にきこえそうだ。

10時頃第一登頂隊が降りて来たのに出会う。8時に頂上に至ったという。さすが一番若く元気な内藤君も足もとがもつれているように見えた。

それからあとただ如何に呼吸をするかに終始した。うすれてゆく意識の底で第三登の辛さを噛みしめた。これが初登ならどれだけ気持ちに張りの出てくることかと。

11時30分、だだっぴろい頂上に着く。まるで飛行場か何かのような頂上だ。抱きあって喜びあうところだが、一向にそんな感激はわからない。ああ、もうおしまいといった感じである。これも第三登の悲しさのせいかもしれない。

このランゲル山脈の5000m前後の頂上の形には共通した点がある。北西にみえるランゲル峯、その北のサンフォード峯、ナベスナ・プラトーをこしてジャーヴィス峯、東に遠くボナ峯の頂上はいずれも円頂であるが、中腹から下が急傾斜で谷になぞおちている。これもこの辺の浸蝕が3000m前後の高度でもっとも激しいという事実を示しているものであろう。

1時間程周囲の山を写真におさめる。遠くローガン峯、セント・エライアスが望まれる。日本の他のパーティもこの好天をつかんで快調に行動していることであろう。彼等の成功を祈った。

C<sub>2</sub>へ下降する頃、往路あれ程好調だった松本君が、軽い頭痛をうったえる。食欲もない。自分は往路に比して反対に快調になって来た。食欲も旺盛であ

る。その夜はC<sub>2</sub>で泊った。松本君は依然不調。軽く茶を飲んだだけであった。

翌19日昨日鷲ノ巣キャンプにおいた。川井・内藤両君が、C<sub>2</sub>徴収のサポートに来てくれた。

その日は鷲ノ巣キャンプで泊る。昨日のあれ程の好天気、今日は曇で視界も悪い。思えば幸運であった。

7月13日以来毎日行動出来、トントンとここ迄来たがもう荒れても構わない。いや1日位荒れてくれ、それでなければ身体がもたんわいなどと話して、一仕事終えたあとの解放感を楽しんだ。

2・3日前から頭痛をうったえていた内藤君はその日もお頭痛をうったえていた。高所影響について皆の話をきいて火のような結論を得た。人にもよることは無論だが、高度影響は高年令(といっても35才位までだが)程早く現われるが早く順応する。若い程影響が現われるのは遅いが順応も遅い。しかしこの結論が一般的であるか、まして医学的に正当さをもつかどうかはしらない。その夜のペーコン・エッグのうまかったこと。夕方の雲海の美しさ。

翌日ナベスナ側は雲海でみちみちているのに、峠をこしたクスクラナ氷河側は一片の雲もない。まるで盆にミルクをみたしたようだ。珍らしく風もナベスナ側よりチチナ(Chitina)側に吹き、ナベスナ側の雲をクスクラナ氷河側へ吹きこぼす。クスクラナ氷河へ吹きこぼれた雲片はたちまち霧散してしまう。

予定より早く登頂が出来たので、食糧がすっかりあまってしまった。捨てたいところだが我々貧乏隊は、そう気を大きくしてはいられない。それにABC<sub>1</sub>からBCへ必ずしもすぐ帰れるとは限らない。往路せたく張った固定ザイルも、次のリーガル峯登攀に使用が予定されている。あれやこれやで、又山のような荷物になってしまった。だが仕事を終えた気持は軽い。ABC<sub>1</sub>迄空身で1時間30分の行程を5時間あまりかかって下降した。ふり仰ぐとトレースが遙かに続き長壁の彼方に消えている。

BCとの無線連絡によると、翌22日にウィルソンがこのABC<sub>1</sub>へ徴収に飛来し、そして同時に第二の目的リーガル峯登頂の為の隊をABC<sub>2</sub>に送り込む筈になっていた。12日はまたもや快晴、リーガル峯が美しい姿をみせていた。しかしその翌日22日より、天気は俄然悪くなり、雪さえ降り出した。無論ウィルソンは来るべくもない。それからあと7日間というのは、風、雪、ホワイト・アウト(white out)の連続であった。しかし無理してもっておいた食糧がものをいって、気持は豊かだった。我々は寝寝喰って、喰ってまた眠ればよかった。行動不能の7日間が過ぎて8日目、さすがの食糧も底がみえだし、そろそろウィルソンを頼らず自力で歩いて基地迄帰らねばならぬ時期が来たようだった。少し前から基地と交信して疑問

に思っていたことは、ABC<sub>1</sub>ではとても行動の出来ない日、基地では晴れていてブラックバーンの頂上も見えないということである。基地からの通信では、そんな時山の中腹に雲がかかっているとのことだった。すると我々は雲の中になることになる。そういえば登高中頂上附近は晴れていても、眼下のABC<sub>1</sub>附近にはいつも雲片がまつわりついていたことを思い出したクスクラナ氷河から吹き上げる気流が、コルをこえたところで雲となり、ABC<sub>1</sub>を包んでしまうのだ。するとABC<sub>1</sub>では行動不能でも下へ降りれば行動可能な天気であろうことが予想出来る。私は残りの燃料と食糧を考慮に入れ29日夕方を下山日と決定した。ABC<sub>1</sub>での長期滞在を気にしたウィルソンは、29日早朝のわずかな晴天を利用してABC<sub>1</sub>へ飛来した。しかし雪の状態が悪く、人や荷を積んではとても離陸出来ないという。それではもう少し下の雪原まで徒歩で降りたら雪もザラメ化して都合がよいと思うがどうかとたずねるとグッド・アイディアだという。我々はABC<sub>1</sub>に約半分の荷を残して、氷河を降ることにした。途中にはクレバスが多く、迂回したりしたが、いずれも積雪がたっぷりあって、大抵のスノー・ブリッジが渡れたのは幸いであった。このへの積雪期は夏期である。冬は内陸特有のカラッ風だけで、雪はほんの冬で50cm程しか降らないが、夏期は数mのドカ雪が降るといふ。一寸妙なものである。3時には予定の高度約2200mの地点につき、ウィルソンを待つ。ふりかえるとABC<sub>1</sub>だけに雲がかかり、あとはきれいに晴れ上っている。それとも知らずに7日間も沈滞していた自分が迂闊であった。ABC<sub>1</sub>をCamp of cloud makerと名づけた。ABC<sub>1</sub>から吹き降ろす風も、ここ迄くるともう生あったかい。やがてウィルソンが飛来したが、今度は風が強くて着陸出来ないという。ウィルソンはこの天気は2~3日もつからとまた帰ってしまった。飛行機とは便利なようで不便である。

翌30日、保証してくれた天候もアラスカの天気と女心、の例え。全天どんより曇っているが、しかし飛んで飛べないことはなさそうだ。8分頃爆音。まず第一に川井君、ついで松本君をのせて基地へ。内藤君はリーガル峯のメンバーに加えたのでABC<sub>2</sub>へ。あとひとり雪原に残る。

この頃よりウィルソンの保証が効き出し天気は好転してきた。まだABC<sub>1</sub>には多くの物資が残してある。中にはリーガル峯に必要なものも相当にある。何とかABC<sub>1</sub>迄とりにゆかねばならない。そう考えている内にABC<sub>1</sub>の雲が晴れているのに気がついた。これは面白い。さっきから気がついてきたが、どうもABC<sub>1</sub>の雲は周期的にかかたり消失したりしているようだ。さらに気をつけてみると、ABC<sub>1</sub>の北東、ブラックバーンの正面氷壁の途中から雲が湧き出し、ゆ

っくりABC<sub>1</sub>に移動してまもなく消えることがわかった。これは一つの発見であった。周期を計ると、正確に50分。10分間程晴れていてまた曇ってしまう。これはしめた。次にウィルソンが飛来する時間を計算すると丁度ABC<sub>1</sub>の晴れる時間に相当する。さあこの予想はあたるかどうか。もし今ABC<sub>1</sub>の荷を徹収しないと恐らく永久に徹収出来ないであろう。リーガル登高も、その為に不可能ではないが大変苦しくなる。そう考えている内に爆音がきこえてきた。ABC<sub>1</sub>はまだ晴れていない。ウィルソンが降りて来て、さあお前の番だぞとうながす。ふとみるとABC<sub>1</sub>は晴れ出しているのではないか。今だ！ このチャンスを逃がしてはとウィルソンに懇請する。ウィルソンは渋い顔である。あの場所はノー・グッドで、彼としては人間が一番大切だから、それさえ無事に運べたら荷物はよいではないかという。自分の寸たらずの英語がもどかしい。いやあそこにはリーガル登頂用の固定ザイルと小テントがあるのだと説明して、やっと納得した。ABCはまだ晴れている。さあ急がなくてはならない。10分間の晴間がもう3分すぎた。ABC<sub>1</sub>へ着陸。雪は悪いとウィルソンはにがい顔。ハリアップ、ハリアップと急がせる中をやっと荷の大部分を収容する。9分すぎた。もうガスが湧いて来て、そろそろABC<sub>1</sub>を包もうとしている。何度かエンジンをふかすが機は動かない。雪のマサツが多いからだ。私が降りて翼をゆさぶり、やっと動き出した。機にとびのる。滑走！ しかしやはりマサツが多くスピードが出ず飛び上れない。普通30~40mで離陸するのが、80mをこしても100mをこしてもとび上る気配もない。800m彼方には大きなクレバスがある。大丈夫かウィルソン！と思わず心に叫ぶ。500mをすぎてもまだ機は雪面を滑っている。ウィルソンもブレーキをかけようとしぬい。南無三！ 失敗したか！ クレバスがみえて来た。みるみる迫る。あとほんの20~30m程に思えたところで身体がフワリと浮く。大クレバスをすぐ1~2m下の足もとにみて機は浮び上った。ヤレヤレ。ウィルソンもふり返ってニヤリと笑う。やがて一路ABC<sub>2</sub>へ。そこには長谷川・田中両君の新手と内藤君が待っていた。さあこれからリーガル峰だ。山のハンゴも楽ではなかった。

リーガル峰登攀

リーガル峰は高度4212m。高度こそ低いが今迄登攀の記録も写真もなく、一切が未知の山である。根拠地ABC<sub>2</sub>からも前山が邪魔になって頂上のはんの一部しか見えない。しかし偵察飛行をした時の結果とブラックバーン頂上からの遠望したところとを総合すると、ルートを選べばどうにか登れる山相とふんだ。ところどころ岩が出てはいるがほとんど岩なしにルートが選べる。長谷川君はさっさとロック・ハーケン等を

リストからはずしてしまった。

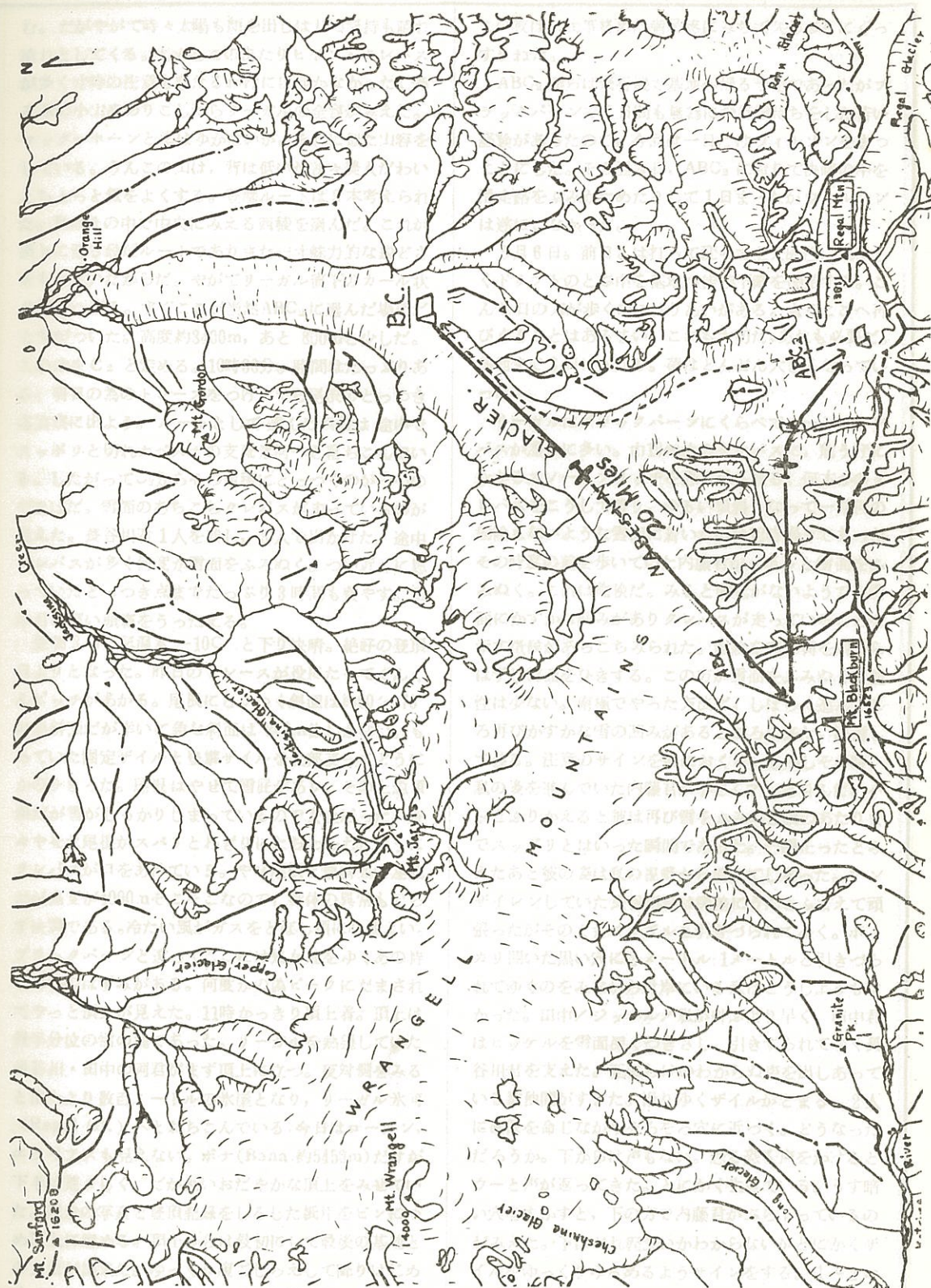
このABC<sub>2</sub>はかつて私が偵察飛行をしてあらかじめ定めた地とはどうも様子が違う。あとでわかったことだが、手違いでウィルソンが私の予定していたところとは異なるところへ降りてしまったのだった。私が飛来した時は、ガスがかかっており、その地を地図上で確認することが出来なかった。ABC<sub>2</sub>からはリーガルは無難なこと、附近の山もガスのため見え、自分の位置もつかめなくてはなほだ心細い状態であった。

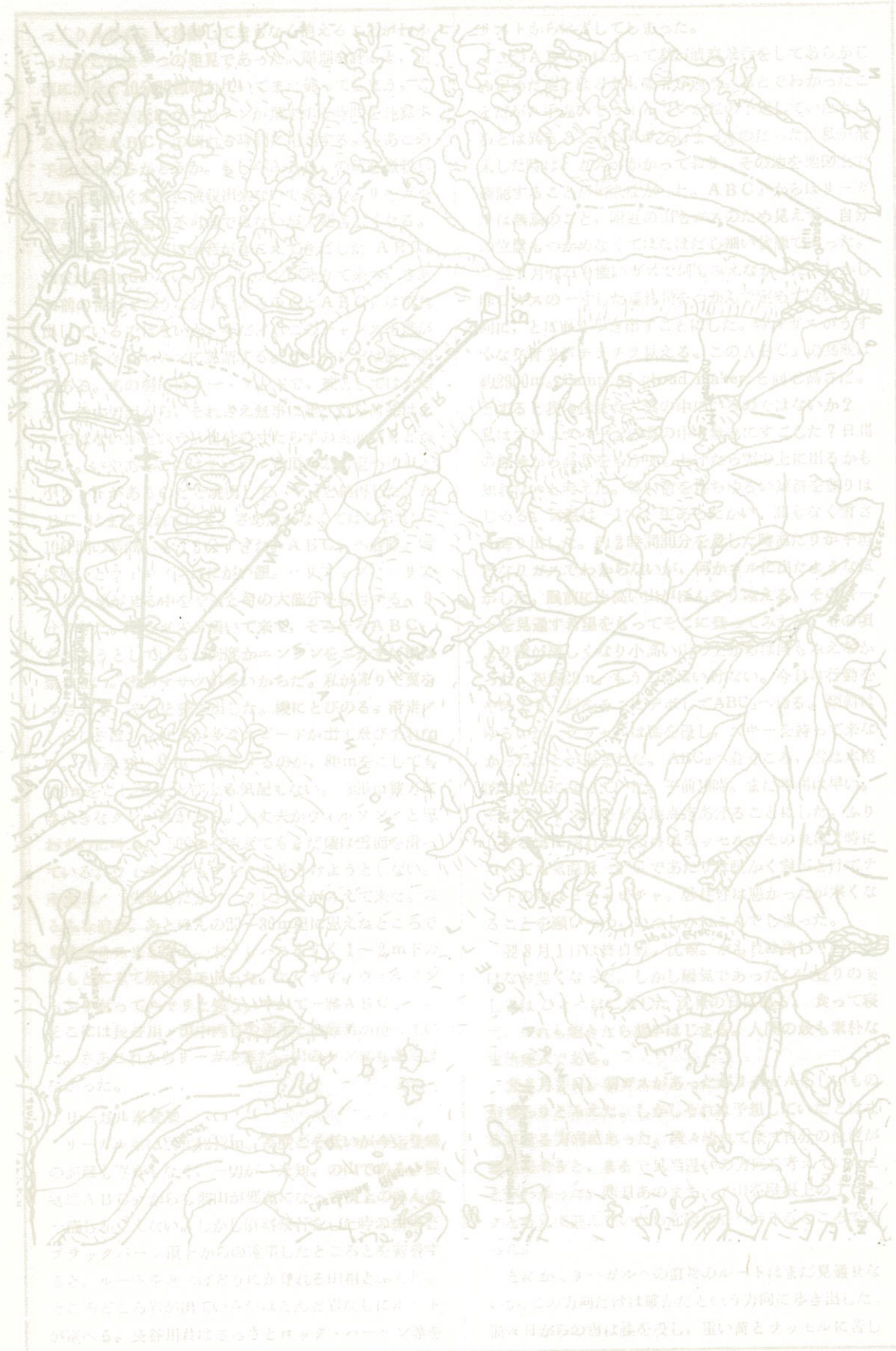
翌7月31日も濃いガスで何もみえなかった。しかし昨日ガスの一寸した晴れ間をつかんで決めておいた方向に、とにかく歩き出すことにした。時々ガスがうすくなり青空がチラチラ見える。このABC<sub>2</sub>の高度は約2900m。Camp of cloud makerと同じ高さだ。とすると我々はまた、雲の中にいるのではないかと私はブラックバーンの雲の中で無為にすごした7日間の経緯から高度をもう少し上げたら雲の上に出るかも知れないと考えた。軽い荷を持ちゆるい傾斜を登りはじめる。気温は-1°C。生あったかい。間もなく雪さえ降り出した。約2時間30分を費した時あたりが平坦となりガスでわからないが、何かコルに出たような気がした。眼前に小高い山がぼんやり見える。そのルートを見通す希望をもってそこに登ってみたが、その頃より雪が激しくなり小高い山の上からは何もみえなかった。視程20m。もうこれはいけぬ。今日は行動をやめよう。荷をそこにデポしてABC<sub>2</sub>へ帰る。傾斜はゆるいが、ラッセルは膝を没し、スキーを持って来なかったことが悔まれた。ABC<sub>2</sub>へ着くころ、雪は本格的なものになっていた。午前10時。まだ時間は早い。そこでキャンプをデポ地点迄あげることにした。ふりしきる雪に濡れながら再びラッセル。その夜は8時になっても気温は-4°Cあたりは暖かく雪がとけてテントの中はビチャビチャ。居住性は悪かったが寒くなることを願いつつ、いつしかねこんでしまった。

翌8月1日は終日雪。沈殿。水もれは激しく居住性はなお悪くなった。しかし陽気であった。山登りの楽しさはひとつはこうした沈殿の日にある。食って寝て、それも飽きたら話のはじまる。人間の最も素朴な生活様式である。

翌8月2日。朝ガスがあったがリーガルらしいものがちらりとみえた。しかしそれは予想していたとはまるで異なる方向にあった。段々晴れて来て自分の位置が確認出来る。まるで見当違いの方向を考えていたことがわかった。昨日のまま、小山を屋根上の1ピークと考えて進んでいたら危険な谷へ降りるところであった。

とにかくリーガルへの直接のルートはまだ見通せないが、この方向だけは確かだという方向に歩き出した。前々日からの雪は膝を没し、重い荷とラッセルに苦し





む。だがやがて時々太陽も顔を出しはじめ気持ちも晴れ晴れとしてくる。しかしこのあたりヒドン・クレバスが多く寸時の注意も怠るわけにはしかなかった。ある氷の小山をのりこしたらリーガルの全容がみえた。マッターホーンと迄はしかなないが、それに似た山容をしている。うんこの山は、背は低いが伸々美人だわいとちょっと気をよくする。登攀ルートは3本考えられた。私はその中で中央にみえる西稜を選んだ。これが頂上に至る最短ルートでありまた一寸魅力的な鋭さをもっていたからだ。やがてリーガル直下のカール状の雪原へ出る。すぐここが当然ABC<sub>2</sub>に選んだ場所だと気がついた。高度約3400m、あと800mと少しだ。この地をC<sub>2</sub>と定める。10時30分。時間はたっぷりある。明日の為にトレースをつけがてら尾根のとっつき迄偵察に出よう。ルートとして選んだ西稜は途中でスッポリと切れナベスナの支流氷河へと落ちこんでいる。したがってC<sub>2</sub>からその西稜にとっつくのが一つのやまばだ。雪面のあちこちクレバスが走っているのが見えた。長谷川君1人を残し、3人で出かけた。途中クレバスが多く何度か雪面をふみぬく。つい近くに思っていたとっつき点までたっぷり3時間も費やす。田中君は軽い頭痛をうったえる。

翌朝3日、気温も-10C'と下り快晴。絶好の登頂日よりとなった。昨日のトレースが役にたつてぐんぐんピッチがあがる。尾根にとりつく斜面は約60'~70'の急斜面だが幸いに急な斜面は200m位しかない。もっていた固定ザイルと登攀ザイルを全部使ってどうにかのりきった。尾根はやせて雪庇があり、その上急傾斜だが雪がしっかりとまっているので安全だった。時々やせた尾根がスッポリとわがりにたちわられたようにクレバスが口をあけている。やせ尾根と急斜面の連続だが高度が4000mそこそこなので、身体の異常も起らず快調である。冷たい風がガスをとばし頬に心地よい。ブラックバーンと違ってここには処女地をゆくあの特有の心のはずみがある。何度かの偽ピークにだまされてやっと頂上が見えた。11時かっきり頂上着。頂上は畳半分位の雪の塊であった。リーガルを熱望していた長谷川・田中の両君がまず頂上に立つ。反対側をみると頂上より数百メートルの氷崖となり、リーガル氷可(Regal Gl.)へとおちこんでいる。今日はローガン、エライアスも見えない。ボナ(Bona 約5450m)だけが下半は荒々しく、だが丸いおだやかな頂上をみせていた。記念の写真と登頂記録をした紙片をビンにつめ頂上に埋める。頂上からは最初にして最後の基地との交信が出来た。ゆっくり腹ごしらえして降りをはじめ。帰途は早い。あとは無事基地を帰着出来れば自分の仕事の半分は終る。急な尾根も帰途の雪崩を心配していた最後の斜面も、雪が安定していて難なく通過。C<sub>2</sub>に帰着したのは出発して9時間後の15時であった。

この夜は二仕事終わった満足感にみちて久しぶりにぐっすりねた。

ABC<sub>2</sub>からは飛行機で基地へ帰る予定であったがブラックバーンで7日間も無為に飛行機待ちをした苦い経験があったので、今回は一日だけウィルソンをまつことにした。その翌々日、ABC<sub>2</sub>において快晴の中を滑走路をふみかためたりして1日まったがウィルソンは遂にこなかった。

8月6日。前日とは打って変って全天灰色。風激しくドリフトのとぶ中を基地へ徒歩下降を開始する。こんな日の方が歩くのにはりあがある。もうここへ再びくることはあるまい。これも大切だ、あれも必要だ。基地まで3日はかかる。荷はどんどん大きくなっていった。

リーガルはブラックバーンにくらべてルートにクレバスが遙かに多い。巾10cm位のクレバスに、危うげにかかるスノーブリッジを恐る恐る渡る。何本かのクレバスをこうして渡り、ゆるい傾斜となつて一見何の危険もないような雪面に着いたのは12時過ぎであった。その時私の前を歩いていた内藤君がゴボッと雪面をふみぬく。これは危険だ。みると変化がないようでも雪面にかすかな凹みがありクレバスが走っていることを示す徴候があちこちみられた。危険を感じ荷を肩からはずし雪面をひきずる。この方が雪面をふみぬく可能性は少ない。南極でやった方法だ。しばらく進んだころ再びかすかな雪の凹みがあるところに来た。注意して渡る。注意のサインを後におくる。しかしその時、私の後を進んでいた内藤君が小さくアッと叫んだ。ハッとふりかえると彼は再び雪をふみぬき腰のあたりまでスッポリとはいった瞬間であった。一瞬止つたとみえたあと彼の姿は私の視野から消えてしまった。アンザイレンしていた長谷川君は突差にうんとふまえて頑張ったがそのままズルズルと引きづられてゆく。ポツカリ開いた黒い穴に2メートル、1メートルと引きづられてゆくのを見ながら対岸にいる私はどうしようもなかった。田中ノジヘルノ私が叫ぶより早く、田中君はビッケルを雪面深くつきさし、引きずられてゆく長谷川君を支えた。互にわけのわからぬ声を出しあっている数秒間がすぎた。滑りゆくザイルがとまる。2人に確保を命じながらそろそろ穴に近づく。どうなったのだろうか。下からは声もない。恐る恐る声をかけるとウーと声が返ってきた。とにかく生きている。うす暗い穴をすかすと、下の方で内藤君がぶら下がっているのがみえた。下はどれ程深いかわからないがとにかくザイルをゆっくりゆるめるようサインをする。1~2m程ゆるめた頃、下から元気な声がかえって来た。やれやれ。彼は体がしめつけられ声が出なかったようだ。幸いに彼の体から2m位のところでスノーブリッジがかかっており、その上におり立つことが出来たよう



であった。15m位の深さはゆうにあるか。

クレバスから彼をひっぱりあげることが出来たのはそれから1時間あまり後であった。不思議なことに被害はテルモス1本だけであった。

はい出た内藤君の元気な顔をみてホッと安堵の胸をなでおろす。ともあれ茶をわかし気をおちつけることにした。よく気をつけてみるとこのあたりは傾斜はほとんどないのにクレバスと覚しき雪面の凹みがあちこちにある。このあたりは大変なクレバス地帯なのだ。目ざす今夜のキャンプ地迄あと何十本のクレバスを渡らねばならぬであろうか。それからあとはクレバスとみれば這伏前進をした。20メートル歩いては、はいっくぱり、10メートル歩いてはジッヘルした。まだクレバスとわかるころはこうしてのりきれるが、始末の悪いのはどうみてもクレバスとわからぬ地点である。内藤君は三度目のふみぬきをした。さすが太った腹の彼もこの日にみえぬクレバスの恐怖にすっかり参り、歩は遅々として進まなかった。

やっとクレバス地帯を抜けたのは午後4時、距離にしてほんの1キロメートル位を実に4時間もかかったのだ。しかしキャンプへの道はなお遠かった。その夜のキャンプは是非共彼方にみえるモレーンの上でしたかった。クレバスの恐怖は去ったがそれからは軟雪に悩まされた。ワカンは荷物の関係上、上のキャンプに放棄してきたのだ。雪面は若干クラストしはじめ始末の悪いことに数歩毎にずぼりと膝迄もぐった。その度毎に持病の痔にピンピンひびく。つらい2時間がすぎモレーンも目の前に見えるようになってきた。高度は2000m。雪面にはパドル(paddle)があらわれ出した。大きいのは運動場くらいのもある。このあたりの雪原は暖かさのためにとんとんとき、それが下の氷の上にとまり、流れずにたまっているため一見雪原であっても、膝くらいまでもぐると足は水の中にはまりこみ靴も何もビチャビチャになる。

やっとのことでモレーンのキャンプ地についたのは18時に近かった。朝出発して12時間目であった。こうして私達のリーガル登高行も終わった。アメリカ国内の未登峰の日本人による最初の登頂という仕事を終えて、私達の心はみちたりていた。

#### ナベスナの住民達

基地がつくられた傍の氷河はナベスナ氷河(Nabesna Gl.)呼ばれていて、ナベスナとはこの地方の総称で、したがってそこに住むインディアンはナベスナ・インディアン、河はナベスナ河と呼ばれている。Nabeとはインディアン語でクッキング、aは水を意味するのだそう。つまりこのあたりのインディアンは、川辺で石を並べてカマドを作り、食事をつくることから、「川辺で料理をする人々」という意味で、Nabesna

というのが出て来たのだそう。

アラスカには大わけにして四種族の原住民が住んでいる。第一に北極海沿岸、ベーリング海沿岸そしてユーコンの下流と中流の一部に住むエスキモー(Eskimor)、第二にアメリカ大陸北西部、アラスカの内地からカナダの西部のかなり大地域に分布するアタパスカン・インディアン(Athapascan Indians)、そして太平洋南西海岸、シトカ(Sitka)ジュノー(Juneou)等を中心とするドリンジット・インディアン(Tlingit Indians)、最後にアリューンシャン列島に住むアリュート(Aleuts)の四種族である。我々の接したのは、このアタパスカン・インディアンで、それはまた多くの細かい部族にわかれていて、アラスカに住んでいるものだけでも、コユコン(Koyukon)、インガルク(Ingak), タナナ(Tanana)、タナイナ(Tanaina)、ナベスナ(Nabesna)、アーテナ(Ahtena)クッチン(Kutchia)、及びハム(Ham)の多くの部族を数えることができる。まだ人類学的分類は完成しておらず、タナ・インディアンを上下にわけて、ナベスナ・インディアンをその上部タナナ・インディアン(Upper Tanana Indians)に含める学者もいる。

ナベスナ氷河の末端近くにリーヴ飛行場がある。飛行場といっても、河原が広がったところで、平坦な土地を利用して、そこにガソリンの空缶の標式をたてただけのものである。その対岸に廃墟になったインディアン部落が三つ程あった。約100年前のものだそうである。その他にもこのあたりに昔からある部落は、最近とんとん崩壊して、他に移住していくそうである。彼等は何故に、そして何処へ移っていったのであろうか。私はこれ等のインディアンの末裔を探し出そうと考えた。

このナベスナ氷河の末端から200km程下流に、ナベスナ部落という村がある。私は荒木君と共にここを訪れた。もしかしたら、ここが彼等の移住地であるかもしれないと思ったからである。ナベスナ部落は、アラスカ・ハイウェイ沿いのカナダ国境近くにあるノース・ウェイ(North Way)という小さい軍の航空基地のある村から、なお南へ約10km程入ったところにある。訪れたのは夜の八時頃、うす暗がりにもう顔の判別さえつきかねる程であった。車が部落に入ると、我々はわっと子供達にとり囲まれてしまった。話しているのは英語ではなさそう。これは困った。その時一人の青年が近づいて来た。酋長に会いたいといったら、彼等が何かをしゃべり合っていたが、やがて、案内するからついて来いという。あたりはもう真暗である。電灯は無論ない。多少無気味に思ったが、エーイ、ママヨとついて行く。やがて少し離れた一軒家に着く。顔も何もわからない。意を決して、はじめまして、と挨拶をする。手さげライトをつけ、まず自分を照らして

そして相手に向けた。やっと相手の様子がわかる。まだ若い30才台のセイカンな顔をした青年であった。見るとまわりには、同じような青年がぐるりととりまいている。相手は無言である。その雰囲気を押されて不安になり、やたらとしゃべった。自分達は日本から来た調査隊である事等といっても、相手は理解した様子もない。仕方なしに、日本という遠い国から来た旅人で、ほら君達と自分の顔は似ているだろう。日本にも君達と同じ顔をした人が多数いる。日本人と君達は同じ祖先を持つのではないか、これを調べに来た。君達の遠い祖先の話をしてくれないか等といったら、やっと訪問の目的が理解できた様子。若い酋長はそれなら村の古老に紹介してやるからと初めて口を開いた。何かほっとしたのを感じる。はずかしい事だが、自分の頭には西部劇でみるあのインディアンの酋長と、眼の前の酋長が一つに重なって見えていたのだ。この若い酋長、年は34才、英語名をケニー・アルバート(Kenny Albert)、インディアン名はないそうである。シトカの学校に行っていたという。アメリカ政府は原住人教育対策として、シトカに原住人の為の学校を建て、各地から各種族、エスキモー、インディアン、アリュート等の子弟を全額政府負担で、連れて来て教育しているのである。部落民の酋長の選び方も、昔のように武力でその人を選ぶのではなく、教育程度とか、そうしたもので人を判定するようになって来た。

まもなく或る一軒のみすぼらしい家に着いた。90才の老人と、74才の老妻が住んでいた。老人といってもなおカクシヤクとしたものであり、とても90才とは思えない元気でである。狩もすれば、薪割りもする。前酋長であり、現酋長の義父にあたる。その顔つきは、セイカンというより、むしろ物識り老人といった感を受けた。5~6坪の平屋の家屋をカーテンでしきり、ベッドもあればキッチンもあるという、いわゆるエフィシェンシー(efficiency)というタイプのものである。数キロメートル先迄電気がきているのに、ここではランプを使用し、そのほのかな光である室内は、一目で貧しい暮しである事がわかるものであった。この老人の名をワルター・ノースウェイ(Walter Northway)といい、1874年生れだから丁度90才になる。インディアン名をハチュニアと呼ぶ。強いという意味だそう。生れたのはジャクシナ(Jacksina)谷といって、ナベスナ河の支流にあたる場所であったが、彼等の主要な食糧であるムースやキャリブーが、年と共に減り当時の酋長であったハチュニアが一族をひき連れ、このノースウェイの地に移住して来た。ここではムースやキャリブーに加えて、川にはホワイト・フィッシュ(white fish)が豊かであった。1917年の話である。

彼等は文字を持たない。素人知識だが、この事は南北両アメリカ大陸に散在するインディアンに共通のよう

である。特に、あの不滅の文化金字塔を建てたペルー・アンデスに住むインディオでさえ、文化はあっても文字がないのである。勿論簡単な絵画文字を持っている部族はあるが。しかしこのナベスナ・インディアン達は、もっぱら言葉だけである。だがその言葉も、今は年々すたれつつあり、30才より若い人達で原語を完全に話す者は数少ないそうである。

話によるとチ(Ch)はカパー(Copper)であり、ア(a)は水、湖、川、を表わすという。そういえばナベスナ地方には、このChとaを組合せた土地の名が非常に多い。チストチナ(Chistochina)、チサナ(Chisana)、チチナ(Chitina)等々、あげれば限りがない。つまりこの地方は、多かれ少かれ銅が出る事から、こうした原名がついたものであろう。

数は1~10迄はそれぞれ個有の呼名があり、11は10+1、20以上は25=2×10+5というふうと呼ぶ。100以上の数はないそうである。結婚もいたって簡単である。男はまず狩の腕前をみせて家族を飢えさせないだけの腕前のあることを示し、また家を建てて寒さから家族を守ることができることも示さねばならない。女性の方は成熟さえすればいつでも結婚できる。普通14才位が結婚の平均年齢である。ハチュニアの妻も14才で結婚した。結婚式というものは一切ない。ただ、娘の両親や娘に皮等を贈り、結婚の承諾をとればそれでよい。あとは一緒に暮せば世間の人は夫婦と見做すそうである。

面白いことに、彼等にも赤ん坊の時には青いアザを尻に持つという。これをバース・マーク(birth mark)という。君達の祖先はどこから来たかと問うと、古老はしばらく考えていて知らないと言った。若い酋長は西の方からとはっきり答えたが、これは学校で習ったのかもしれない。このナベスナ部落から4~5km離れたところにテトリン・インディアン(Tetling Indians)の部落があるが、ここでもこのバース・マークが大抵の赤ん坊にあると答えた。150km程離れたメンタスタ部落(Mentasta Village)では、バース・マークはあるにはあるが大変少ないそうである。

彼等との話は種々の話題にとんだ。この前酋長の老人、日本人を見たのは無論初めて、地図をかいても彼等は、このノースウェイと、生れ故郷のジャクシナ谷しか地理の概念はなかった。ただ遠い遠い、彼等の知っているナベスナ河の何万倍もある川(太平洋)の向うに、彼等に似ている、しかしどこか違う人間が住んでいることを知って、大変満足げだった。

最後に、若い酋長に向って貴方達は幸福かときいたら、いやわし達は貧しい。私達は働らいて金を得なければならぬ。その為にはまず教育が大切だ。インディアンの学校を建てる事が一番だ。そう答えた彼の顔には、前途への希望と意志が満ちあふれているようであ

った。私は当初、この人々と西部劇のインディアンを一  
緒にしていたことを心に恥じた。彼等の発展と幸福を  
祈って古老の家を辞した。

### 五月のモン・ブラン

谷 泰

アオスタの谷はイタリア側のアルプス溪谷の中でも  
比較的貧しい谷におもえた。岩がちの傾斜地にブドウ  
棚がなん段にも回廊状にはしっている。家屋も石づみ  
の粗な肌を露出させている。曇りがちのせいもあつた。  
道にたたずむ老人や子供のなりもみすぼらしくみ  
えた。

ちょうど初回の草刈り時であった。海拔4500mのこ  
の谷には春もややおそめにやってくる。馬車の荷台の  
うえにつんだ乾草の山のうえに、まだもっと積めるだ  
ろうとばかり、長いフォークで草を放りあげ一家総  
出の野仕事の風景がいたるところでみられた。貧しい  
谷であるだけに、草刈り時のにぎわいが谷に活気を与  
える。それにしても家畜にくわせるための草刈り仕事  
が、農作業の中で占める割合の大きさ。それはそのま  
まあの様々に加工した肉のヨーロッパ人の毎食の皿の  
中で占める割合の大きさ、それにつながるのだ。まっ  
たくいたるところで、どんな平地でも、どんな山地で  
も草刈りだ。

右に左にやたらにうねったアスファルトの坂道をマ  
ライニーの運転する車はハンドルを切りながら、あが  
りきる。するとクールマイエールの村についた。五月  
下旬である。まだ登山客を迎えるには早い。ようやく  
下からあがってきて、窓に敷物をひろげて風をあてて  
いる店開き準備の宿屋。突貫工事といっても日本にく  
らべればよほどスロー・テンポだろうが、それでも日  
曜返上の建設途上のマンモス・ホテル。ホテルといっ  
たが外観は、都会近郊の普通の大アパートとなんの変  
りもない。そういうホテルが、最近どっどと建ったとい  
う。クールマイエールの村といったが、ここは都会の  
いちコロニーにすぎない。さしずめミラノの郊外であ  
る。都会の野性を失なった無数の遊牧民達の夏の都な  
のだ。現代においては、移牧するのは羊を飼うアルプ  
の住民ではなく、どうやら都会人の方のようである。

5月25日の夕方もうす暗くなってからだった。  
われわれ一行はこのクールマイエールに集まった。総  
員8人。リーダーはフォスコ・マライニー。かれについて  
いまさら説明することもないだろう。山については、  
ガッシュブルムIVの隊員。その後ヒンズークシュ・サ  
ラグラールへ、イタリア山岳会ローマ支部の学士メン

パーの遠征隊長として行っている。パオロ・コンシリオ。30すぎだろう。小柄でつねに  
微笑が消えない。イタリア山岳会ローマ支部の学士メ  
ンパーである。1959年には、ローマで組織したサラグ  
ラール隊に参加。この遠征の推進者の一人であった。  
商売は建築家だが、山の方が大事であるようだ。プー  
タンに入りたらしいが、中ソ論争以来、プータンは  
ヨーロッパ人にはやや遠くなったと残念がっていた。  
肩を張らずにごまめによく働らく。

同じくローマ支部学士メンバーのフランコ・アレッ  
ト。30台なかばをすぎているだろうか。大柄な長身の  
男である。サラグラール隊に参加、頂上に立っている。  
山では頑固者であったが、それには皮肉りの十分な経  
験が裏打ちされているかにみうけた。とくにモン・ブ  
ランの岩峰のルートについては、一行の中で一番正確  
な知識の持主だった。ハンティングをかぶって振舞いが  
ぶっきら棒であった。この国で十分意味をもつ伝統的  
地位には用のない、セルフ・メイド・マンとしてのプ  
ラグラティズムをその振舞のうちにみた。

それにくらべるとディノ・デ・リゾは苦勞知らずの  
だだっ子のような所があった。大声でグループの誰か  
れおかまいなく、文句を並べた。長身で一見ベン  
キぬりかトビ職人かのような印象をあたえたが、なか  
なかの資産家の息子である。イタリアにはこういう、  
なにも働らなくても、くえる家柄が案外に多い。  
農地改革は不完全にししか実施されなかった結果でも  
ある。自費で奥さんのテレザと一緒にモロッコの出へ  
遠征している。苦勞知らずでひょうきんなだけに面白い  
人物であった。奥さんのテレザはその逆に人の面倒を  
みる明るい性格の女性である。山にも十分強かった。

ヴィンチエンツォ・モンティはローマの近く、ア  
ブルツォ地方の医者である。登山経験はあまり豊富で  
はないが十分の資産家だ。暇のある階級の一人であ  
らう。長身で奥さんのマリア・アントアネットと一緒に  
やってきた。パオラ・カステリ。彼女は、ジャンカルロ・カ  
ステリという同じくサラグラール隊員で、すぐれた登  
山家の奥さんである。亭主は国連 F・A・O の農業技  
師として、ナイジェリアにいたので、彼女一人でやっ  
てきた。女学生のように若々しく控え目であったが、  
彼女も山には十分強かった。

ポンベオ・ノリジェリオ。ポンベオなどというは  
ローマの武将のように堂々としているかと思うけれども  
むしろ小柄である。ジェノヴァ山岳会のメンバーだが  
終始マライニーにオリエントのことをききたがった。

そして一人の日本人、私が加わって大パーティとな  
った。

5月26日。朝、曇。宿屋で朝食をすませると、車の  
屋根にスキーをしばりつけて、ケーブル・ターミナル

にむかう。

モン・ブランには主要な氷河が、南のイタリア側か  
ら2本、北のフランス側から4本流れ出ている。その  
イタリア側稜線からの氷河は、みな急勾配で流れ降っ  
ている。それに対して、フランス側の斜面はゆるやか  
である。だから夏山ルートも、そのほとんどがフラン  
ス側に発している。シャモニーが登山ベースとして先  
にひらけたのは当然である。シャモニー側を表モン・  
ブランとすれば、イタリアのクールマイエール側はさ  
しづめ裏モン・ブランである。

ケーブル・ターミナルのあるアントレーヴからゴン  
ドラにのる。この線は57年に開通したというのだから  
昔のことではない。左下方に、ゴンドラの窓から、ト  
ンネルの入口がみえた。山腹を貫いて、直接シャモ  
ニーに車でいける道をつくらうというのである。一応今  
年両側から掘った穴も通じ合うようになったのだが、  
車が通るのは来年からだという。そうなれば、聖ペ  
ルナルド峠もさびれるかもしれない。ゴンドラは8人  
の大男達と荷物とスキーをのせると一杯になった。こ  
んな曇った日に、景色みの観光客など来る訳がない。  
高度差約2000m、全長400mのケーブルである。ガス  
の中を急勾配にのぼってゆく。やがて雪が降りはじめ  
る。なにもみえない。そして雪がちらつく。冷えびえ  
したトリノ小屋、終点についた。

ここからさらに別のケーブルにのると、シャモ  
ニーに降りることができる。仏伊合作の長大なケーブル  
である。動く氷河上にケーブルを支える鉄柱をたてるこ  
とはできない。広いジャン氷河の上を約3kmあまり、  
支柱なしのケーブルが、ゆるい懸垂線を描いて張られ  
ているのである。

いちど飛行機がこのケーブルに触れて、切れたこと  
がある。日本の新聞に報道されたかどうか知らない。  
そのことを教えてくれたイタリア人は、日本はイタリ  
アよりも進んだ国なのだから、そういう記事が新聞に  
のらないはずはない、といって息子と大声で口論して  
いたのを思い出しておかしくなった。

ともかくヨーロッパ・アルプス近辺のケーブル敷  
設密度の大きいことにおどろく。しかもそれが風致を損  
わないのが不思議である。一つにはデザインのうまさ  
もある。しかしそれ以上に、機械美の冷たさと、岩と  
氷だけの無機質自然との間には、なにか調和しあうも  
のがあのかもしれない。

新トリノ小屋は3階建のガッチリとした建物である。  
一階が食堂になっている。石油ストーブがもえている  
今日はどうせこんな天気なのだからというので食堂に  
腰をおろす。早目の昼食をした。小屋には番人夫婦と  
若い女一人がいる。おかみさんは、都会の女性が手伝  
おうとするのを断わって自分でテキパキとスープをテ  
ーブルに並べた。スープ、パンそしてチーズ。昼食後

はなにもすることがない。こんなときイタリア人は議  
論かトランプをして時間をつぶすことになる。めいめ  
い雑誌や新聞をもくもくと読むなどということは、ド  
イツ人のすることであるらしい。といっても、マ  
ライニーはトランプよりは本を読む方がよいようであ  
った。彼はよくイタリア人は本を読まないと批判するこ  
とがある。たしかに、女工が岩波新書を読むなどとい  
うことはまずまれなことであろう。

ポンベオが日本はどうしてアジアの中で、唯一の国  
として西欧化を早く達成することができたのだろうと  
尋ねる。それには様々な要因があるが、イスラム教な  
どちがう日本の宗教の性格というものも大きいだろう  
とこんなことを話しながら、「ポンベオは西欧化とい  
ったけれども日本は近代化したけれども西欧化しては  
いないよ。」ということのマライニーは忘れない。「西  
欧化も近代化もほとんど同義だろう。」という顔を  
しているポンベオに彼は説明する。「西欧化しても近代  
化してない国もある。たとえばフィリピンがそれだ。  
生活はまったく西歐的だが、決して近代化してはい  
ない。」と区別することはちゃんとマライニーは区別  
している。「日本はアジアの中でも唯一の特殊の国で、  
西歐の方法で科学研究をしていると思うけれども、そ  
うは思わないか。」と、ある三十代の生化学者に同意  
を求められたときには、相手が自然科学者であるだけ  
にあきればたことがあった。科学をするというのは、  
西歐の科学をすることで、科学者であることは、西歐  
人により近づくことであるという暗々裡の命題は、な  
お根づよく知識人の中にさえ残っていることがある。

ポンベオのような質問はまだましなのだ。  
ときどき小屋の外にでてみる。ブルッと身体がちぢ  
むほど寒い。ガスのあいまにみえる谷間はどっどと切れ  
おちて雪もつかぬ壁である。「まだ雪が降ってよ。」  
などといいながら、用を足しにいった者は寒そうに帰  
ってくる。

夕食。夜は早目にかいこ棚のベッドにねる。  
5月27日。6時。外はもう明るい。マライニーが早  
く用意するようにとせかしている。「お早ようござい  
ます。」と私の所へ来ると、調子をつけて日本語であ  
いさつする。窓からモン・ブランがみえる。周囲の岩  
峰の中で、モン・ブランの主峰だけが女性的である。  
逆の窓からは、クールマイエールの村、そして左手に  
グラン・バラディソの山腹がみえた。ここにはなお多  
くの野性動物がいて、そのおもしろい生態がみられる  
という。準備のおそいのは女性のつねだ。彼女らの準  
備をまつあいだ、コル・デ・ジガンテにアイゼンをつ  
けて往復する。

昨日降った新雪をふんでコルに立つと、東側にはも  
う雲が湧いている。その平たい雲の上に、マッター  
ホルンとモンテ・ローザの上部がぬきんでていた。モ

ンテ・ローザは、初秋の空気の澄んだ朝には、ミラノの郊外から、そのまばゆいばかりに輝やく姿をみる事ができたのだ。マッター・ホルンをぢかにみるのははじめてである。右手下方に、巨人のキバという名のついた特徴的な尖峰がみえる。カラコラムだってこういう尖峰はたくさんあるのだけれども、岩壁の巨大なマスの中ではトゲ位にしかみえない。ヨーロッパ・アルプスはそれに比べて規模が小さい。だから岩のほりに適した尖峰が岩稜に適度なアクセントを与えている。ホクロも大柄な顔では生きてこないのに似ている。突起にまで細かく名前をついたヨーロッパ・アルプスは十分意味にあふれたところにちがいない。

小屋にもどる。8時すぎ、スキーをかついでコルにむかって出発。フランコ・アレットが先頭に立つ。新雪のおおうコルをこえと、フランス領である。私はここで生れてはじめて、フランスに入国した。スキーをつける。上空にはエギ・ディ・ミディからのケーブル線が走っている。谷の上部はすでにガスが湧いて視界は不良であった。フランコの先導で左にトラヴァースする。フランボー岩の上部をまいてこの谷の上部氷河、ジャン氷河に入る。ここは雪はかたく、しまっていた。長い滑降がこれから始まった。各人思い思いのシュプールを描きながら降りる。

ジャン氷河の上方はガスがあっぴえびえしていたが、少し降りるとガスも晴れて、広い氷河の真中に出る。適度に制動をかけながら降りた。マライーニが先頭になる。彼のスキーはダイナミックで安定していた。ボンベオや、ヴィンチェンツォ・モンティもゲレンデスタイルだがスピードはある。それに比べると、パオロ・コンシリオは、もちろん私よりはうまいが、決してスタイルのよい方ではない。安全第一主義といった滑り方である。山屋のスキーの方がスタイルがわるいのは日本ばかりのことではないのだな、ということを見つけた。

ジャン氷河は下方末端で、ブランシュ氷河と合流する。そのため中心部はクレバスが多く、小さなアイス・フォールのようなものだ。そこで左へ左へ迂回してまきながら降りる。クレヴァスをこまわり避けてググザグをきる。

こういうとき、ディノ・デ・リゾは、アッとと思うような離れ業をやる。もちろんそのときは、周回の者への事前通告は忘れない。「おれはあそこをクイクイとまわって、あの手前でサッと停ってみせるゾ。」制動をかけてサッと停らないと前はクレヴァスというところで、うまく成功して停ると「ウォーッ、うまくいったゾ。」などといって喜んでいる。うまくいかぬときはもちろん、手前で尻もちをついたことである。周囲の者がとりたてて注意をしている訳でもないのに彼はこういう自己表示をして満足になるのだ。

このクレヴァスの巣をきりぬけるとタクール氷河に入る。雪はだんだん重くなった。エギ・ド・タクール稜線が美しい。もう陽ざしが暑い。コルからすべりつづけである。パオラがややつかれたのかおくれた。休みをとる。右岸の岩壁には、顕著な氷河削痕が刻まれている。ゆるい斜面をまっすぐに降りる。こんどはパオロ・コンシリオが先頭である。やがて雪が消えはじめ、むき出しの氷河が表にでてくるようになる。大休止。大石の上で昼食にする。チーズ、パンそれに角砂糖だけである。フランコ・アレットが左手のエギ・ド・クレボンの登山ルートの説明をする。背後には、グラン・ジョラスの一部がみえてきた。われわれの降りてきたジャン氷河の上方は、もうみえなくなった。長い滑降であった。

メール・ド・グラスに入る。ここから下は雪だけがきつく、氷河上の川や湖がひんぱんにあらわれる。1~2cmあまりうす雪のつもったデコボコの氷河上を走ると、ローラー・スケートで、粗いコンクリートの上を走っているようだ。勾配はきつくないのに、スピードがいやにでる。スキーがガタガタ音をたてる。アッというまに、パドルをつききり、ギャップをのりこえて、小川をわたって止ることを知らない。一方のスキーが谷間を走れば他方は丘の上を走るといった具合で、実に奇妙な滑降である。転倒すれば尻の骨をいやというほどうつにきまっている、と用心すれば案外にころばない。この氷河面の波形の起伏もしかし、下にゆきにつれて、波長とその幅を増す。それが十分大きくなってしまえば、うねりの中の小舟のように、安定してよいのだけれども、その途中で幅1mあまりの、スキーにはどうにもしようのない大きさの起伏にでくわす。もうスキーも役立たなくなった。はじめて二本足で氷河の上に立った。

モンタンヴェールまでの約2kmは、大きなクレヴァスの複雑に走った中を、ルートを求めて降りてゆけば、なにかカラコラムの8月の氷河上をあるいているような気持になる。たしかに、カラコラムから西、ヨーロッパ・アルプスまでの山々は、一つづきの山岳景観のヴァリエーションだといってもよいだろう。

このクレヴァスの走る氷河上で、フランスの学生が3人、テントを張っている。下を流れる水をポンプで汲みあげては、測定をしている。さしづめ氷河学の研究である。アルプスの氷河はこの数十年間のあいだに相当に後退している。左右の岩壁には、氷に削られてまもないことをよく示す色合いのはっきりした帯が、10mばかりの幅ではしっている。

シャモニーゆきの高山電車の終点にやってきた。氷河はまだ下までつづいている。4月ならまだ下までスキーでゆけるのだそうだが、このクレヴァスがひらいては、もちろん電車だ。それにこのホテルで腹をみ

たすことが第一だ。

これまで静かだった谷に焼玉エンジンの音がなりびびく。氷河の中にトンネルを掘って客を呼んでいるオヤジの、排水ポンプの音なのだ。ぬりのはげたベンチに坐って、ポケットと陽をあびながら、われわれの到着をみつめている。氷河上から登山電車の停留所までケーブルであることができる。その待合所にフランス人、ドイツ人、アメリカ人がそれぞれのお国柄の服装でしきりにグラン・ジョラスにむけてシャッターをきっている。われわれが氷河の起伏の背後からあらわれるとしきりに手をふってこちをむいてくれという。どこにむいてもベーコンのようにヒダのはした灰色の氷河しか入ってこないところに、よい人物の被写体があらわれたからである。ニコニコして手をあげてやると、シャッターをきって、ダンケ・シェーンとくりかえす。ドイツの老人夫婦であった。

3時半やれやれとガラス張りのホテルのテラスで食事。ポルディー酒の乾杯。ニンニクのきいたジャガイモニワトリ、そして大皿に盛ってきた多種のチーズも、アッというまに平らげてしまう。予想より勘定が高かったというのでひともんちゃく。それでもおたべになったのは、これとこれと……小柄な亭主はおちつきはらったまま一つ一つ数えあげる。そして最後にニヤッと笑った。高いぞなどと大声でどなっていたディノ・デ・リゾよりは一枚も二枚も上手で、おちついたものである。

赤い登山電車がゆっくりとしたスピードで、びっしりとつまった針葉樹の森の間を降りてゆく。カラマツにモミの類。ハシバミの下ばえ、それにフキの頭さえ白い花を咲かせているではないか。日本の木曾の山林の中にもいるようだと思うほどの濃い緑。雨量が多いのだ。アルプス以北は、やはりまた別の世界がひろがるのも無理もない。

パオロ・コンシリオが手頃な宿を探してくる。夏場以前の突然のお客なので、肥ったおかみがあわてて廊下を掃除している。

夕食。明日は早いので早目に就寝。

5月28日。6時に起きると、あいにく曇っている。今日の予定は、グラン・ミュレツ小屋までである。スキーをかついで、7時発のケーブルにまにあうようにいそいだ。このケーブルでもわれわれ以外には、上の小屋に牛乳を運ぶ男しかいない。

2300mのブラン・ド・エギーにつく。ここからさらにケーブルにのれば、昨日出発したトリツ小屋に達する。ブラン・ド・エギーはガスで視界わずかに数メートル、なにもみえない。しめっぽく、冷えたベンチのむこうで鈴の音がきこえる。放牧の羊の群が、貧弱な草をむしり取るように喰っている。わびしい鈴の音であった。

あいているはずの売店もしまっていたので、仕方な

くチーズ片を分配。8時45分出発する。パールラン氷河をトラヴァースして、視界のわるい中を進行する。うしろからグラン・ミュレツ小屋の番人が交代のためにあがってきた。おいこしぎわにこれから何時間あまりかかるかときけば、みなさんの足なら4時間はたっぷりかかるでしょうという。こういって軽い足どりでやってしまった。この日はしきりにあと何時間かかるかということが気になった。

ボゾン氷河に入る。やや霧が晴れてきた。6~7mあまりの高さのセラック氷河が立ちならんでいる。高度2700m。タコネー氷河との合流点までくると、もう平面距離ではいくらもない。山小屋の近くまで来ている。しかし、ここからはえらく急傾斜であった。急な斜面をググザグにキック・ターンをくり返して登る。長身の者は山側の足からターンできるのに、こちらは谷側の足からだ。すると40~50cmは損する。ことに傾斜の急な所では、ずっずつとずれおちる。ガスがまたでてきて消耗がはげしかった。ボンベオとマライーニと私だけが先行して、他の者はずっとおくられている。上からヒラリヒラリとおちてくるのは交代がきたので降りる小屋の番人だった。真横にきてビタリととまった。今、小屋にはあまり食糧はないけれども、晴ればヘリコプターが補給することになっている、という。上方に岩峰がみえてくる。グラン・ミュレツの岩である。ガスのあい間からジュラルミン張りの小屋がみえた。最後の80mの登りは、われわれをつかれさせるのに十分急であった。

しめったザック、しめった靴下、重いしめりものを全部放りだすと、備えつけのゴム靴をはいて、ホールに入る。3階建の案外大きな小屋である。京大ヒュッテの3倍近くはあるだろうか。好感のもてる番人だった。仏・独・伊の3カ国語をしゃべる。1時間あまりおくらせて第二陣が到着したという。窓からみおろせば急な斜面、霧の中を泳ぐようにあがってくるのがみえた。はるか下のシャモニー村は晴天。高度2500mあまりのところはガスなのだ。

昼寝、そして夕食。明日晴天のばあいは、1時おきというので8時にねる。

5月29日。番人がおこしにくる。外にでてみるが天気はわるく、星もみえない。今日はオフということにする。思う存分眠って8時すぎにごそそとおきだした。所在なくトランプをする。トランプは私と組んだ組がしばしば勝つ。ついでに、番人と話す。「ガストン・レビュファと登ったことがあるのか?」「ええ、ガストンとは2回ほど登った。でも彼は昔はアルピニストだったが、今はもうジャーナリストだ。ボナッティは今でも山登りを続けている。ガストンはもう今は決してトランプで登ろうとはしな

い。」ふだんはあまり口数の多くない彼は、このとききつぱりと、ガストンを批判した。午後オーストリアの山案内人のグループが12人到着する。身体つきはみないかつい。品はあまりよい方ではなかった。ドイツ人が来たときいて、一瞬興奮する。イタリア人は、ドイツ人がきらいである。とくに中南部の人々はとくに好きでないらしい。決して彼らのことをよくはいわない。たしかに、団体行動で氣勢をあげたり、秩序にしたがうことのすきなドイツ人気質は、徹底した個人主義で、規則で自分を縛る位なら、お互いに不干渉であった方がよいイタリア人気質とあはずがな。はたにいる日本人の私はその対照を、どうしてこうもちがうものかと、面白く眺めているだけだが、彼らにすればそうはいかない。

「ある夏、稜線で昼めしをとっていたら、3人のドイツ人がやってきて、そばでやはり食事をはじめた。ザックから彼らは大きな缶詰をだしてあけると、中に加工食品で、黒い糊のようなものが入っている。それを3人はお互いに、ものもいわずに、もくもくとたべた。そしてまただまって出発してしまった。まるで牛がめしをくっているみたいなんだ。あれで一体食事といったものなんだろうかね」などという話をはじめ。オーストリア人の一行は、脇のテーブルで食事をすませると、靴に油をぬったり、トラップをやりはじめ。日本人のいることを知ると、チラッとみても、ニコリと笑う。つづいてドイツ人2人、イタリアのミラノ人2人が到着して小屋の中は急ににぎやかになった。

イタリア山岳会が発行している部厚なガイド・ブックを読む。モン・ブランのためだけに、3冊もあててあるのだから大変詳しい。200年間のあいだにそれだけ多くの意味がこの山に附加された訳だ。1分冊の初めの部分に、気候、地質、地理的特性の概観、さらに民俗学的、歴史的概観がのべてある。それらを読んでゆくうちに、こういうことが書いてあった。

モン・ブランの地名について、谷の村民達は、とくにこの雪をいただく山頂に関心がなかった。アルピニズムが盛んになるにつれて、漸次その周辺の村名を氷河や山頂にあてるようになったケースが多いとある。元来山岳信仰というものが少ないこのヨーロッパでは地名もこういう新しいものが多いのかもしれない。それにしてもなぜ山岳信仰がないのか。キリスト教が単にそれを消し去ったというだけのことではない、もっとベーシックな原因があるように思える。民俗学ないしは文化人類学の一つの面白いテーマだろう。柳田国男があとづけたムラの住人とは区別される山人というもの、ヨーロッパではたとえ、かつては住んでいたとしても、早く文化的に同化されてしまったのではないかと思われる。それほど、山の生活と平地の生活と

の間に本質的差はない。アルプスのメドウにしても放牧の羊の群にしても、平地に降りればなくなるものかという決してそうではない。水のおおう、悪魔の住む高地以外、農牧生活は、ヨーロッパのどこにもみられる普遍的な生活の姿なのだ。こういう連続した世界では、山人も安心して別世界として山間にとじこめることもできなかったのかもしれない。山岳信仰の不在とそれがどう結びつくかまだ分らないが、こういう違いは、なんらかの意味をもっているのではないだろうか。

夕方外にでると気温はぐんぐんと降っているようである。空が晴れてきた。明日は晴にちがいない。携帯食を配って準備をすますと8時にねる。

5月30日。朝2時に起きる。外は月影が明るく、雪面があわく光っている。アイゼンをつけてスキーをかつく。遅起きのオーストリアのパーティが先発した。彼等は急ピッチで登ってゆく。女性をまじえたわれわれのパーティはどうしてもおそくなる。ワン・ピッチ登るとスキーをつける。グラン・ミュレーの大岩の上について、顕著な岩が氷河を二つに分けている。その右手をデグザグを描きながら登ると、明るくなってきた。空はなおつめたい。クレヴァスを適当にさけながら、マライーとパオラと私が先に立つ。オーストリア・パーティはもうグラン・プラトーに入ったらしく姿がみえない。

4時すぎ、グラン・プラトーに出たとき、ちょうどモン・ブランの頂上が桃色にはえはじめたところであった。ひえびえとした大雪原の中でのほなやぎである。

ドーム・コルへむけて雪原を横断する。手袋の中の指が冷たく痛い。パオロ・コンシリョやフランコの後続隊は担当おけている。われわれがドーム・コルへの登りにかかる頃、雪原にあらわれた。このコルに達すれば、あとは急な稜線沿いに登りつづければ頂上だ。コルは広々としていた。そこからイタリア側の山々がみえる。クール・マイエール、そしてグラン・パラディソもみえる。雪はかたく、あとはアイゼンをきかして稜線にそって登ると、風が強く、がまんならぬほど寒い。傾斜の急な斜面をトラヴァースしてヴァロ小屋に入った。

朝食をとる。パンとコンデンスド・ミルクのチューブ。これから最後の登りだ。

高度差約450m。オーストリアのガイド達は、もう頂上からの降りにかかってくる。早い早い。やがて小屋の近くまで来た。アイゼンなしである。あいさつをすると、どっどっとおりていってしまった。

場所によってアイゼンがかたくしまる場所もある。広かった尾根もやせてきて、雪のエッジが、ゆるいカーブをえがきながら、頂上へのびあがっている。ポッス尾根という。左

側は切れおちている。アンザイレンする。雪がえらく深くもぐようになった。頂上につく。11時である。4810m。ヨーロッパの最高点。パオラも全くつかれた気配がない。さしづめ日本ならパンザイでも三唱ということかもしれないが、ここはフランスとイタリアの国境線上だ。3人は握手をかわす。南側はグラン・パラディソがみえるが、今日はマッターホルンは雲塊におおわれてみえない。記念撮影のち下山にむかった。

ヴァロ小屋に降りると、3人は小屋のうらの風当りのない陽だまりで横になった。岩のぬくもりとすでに陽やけた顔にまぶしくふりそそぐ陽光のぬくもりとを身体の両面に感じながら、このあまりにすっきりとまとまったヨーロッパ・アルプスもそれなりに面白いけれども、やっぱり野性味のある山の方がいいなと思った。

後続パーティの到着をまって、一斉に広い雪原をスキーをつけて帰路についた。

これは自由大塚の来用とくる大塚の門の取調... (The text in this column is extremely faint and largely illegible, appearing to be bleed-through or very low-contrast print.)

これは自由大塚の来用とくる大塚の門の取調... (The text in this column is extremely faint and largely illegible, appearing to be bleed-through or very low-contrast print.)

木曜講座 —その4—

高所における人体の呼吸機能と馴化について

中島 道郎

この講座は毎週木曜日夜AACKルームに集まる  
若手の木曜会で行われた講義に若干手を加えたものである。

§ 1 呼吸生理学概説

高所における人体の呼吸機能について述べるまえに呼吸生理学というもののあらましについて、大方の復習の意味で、簡単に説明しておきたいと思う。

生体が外気より酸素をとり入れて、炭酸ガスを排泄する現象を呼吸と呼ぶわけだが、それに関与する機構として、呼吸運動、ガス交換、ガス運搬、並びに呼吸調節の四つに大別することが出来る。

呼吸運動は、胸廓を動かしてする胸式呼吸と、横隔膜を上下させて行なう腹式呼吸の二つを合わせたものである。

呼吸運動によって吸込まれた外気は、咽喉から気管、気管支を経て肺泡に達する。肺泡は一層の上皮細胞から成る膜によって形成された袋状のもので、その外側には肺毛細血管がとりまいている。肺毛細血管もまた薄い一層の膜で出来ているから、この二つの膜を通して、肺泡から血中へ酸素がとりこまれ、反対に血中の炭酸ガスが肺泡に排泄される。この炭酸ガスに富んだ肺泡内の空気を肺泡気と呼び、大きく息を吐いた時一番最後に出てくる空気はこの肺泡気であるとみなされている。肺泡におけるこのガス交換を、外呼吸と呼ぶ。血中に入った酸素は赤血球の中のヘモグロビン(Hb)と結合して酸化ヘモグロビン(HbO<sub>2</sub>)となり、組織に運ばれる。Hbは酸素の多い所ではHbO<sub>2</sub>になり易く、反対に酸素の少ない所では簡単に酸素を離してHbに戻り易い性質を持っている。このHbO<sub>2</sub>の飽和度と、酸素圧との関係を示す図を、酸素解離曲線といい、S型をなすが、この曲線は、血中のpHによってpHが高ければ左へ、低ければ右へ移動するという性質を持っている。

動脈血によって末梢へ運ばれた酸素は、組織の細胞に与えられ、新陳代謝の結果を生じた炭酸ガスが血中に入り、静脈血となって肺へ運ばれる。この組織でのガス交換を内呼吸と呼ぶ。

これら一連の生命現象を調節しているのが呼吸中枢で、延髄にある。

この呼吸中枢に影響を与えるものとして二種類の化学受容器(Chemoreceptor)がある。中枢性 Chemo-

receptor は血液 pH に反応し、pH の低下、即ち炭酸ガスの増加に反応して呼吸が増加するように働く。反対に炭酸ガス分圧が低下すると呼吸を抑制するように働く。一般に脳細胞は酸素不足に弱いので、血中酸素分圧の低下は呼吸中枢の抑制になる。今一つの Chemoreceptor は、頸動脈球 Chemoreceptor と呼ばれるもので、これは動脈血中の酸素分圧の低下に反応して、呼吸を増加するように中枢に働きかけるものであって、これは、頸動脈が、耳の下あたりのところで、内頸動脈と外頸動脈の二つに分岐するその分岐部にある小さな一つの神経細胞の集りで出来ている。同様の作用をなす Chemoreceptor が大動脈弓の所にもある。非常に低酸素状態では、この二つの Chemoreceptor が反応するより前に、中枢性 Chemoreceptor が低酸素による抑制をうけてしまうので、この状態で純酸素を吸入してやっても呼吸増加は起らず、かえって危険である。このような場合には、酸素中に適当に炭酸ガスを混ぜて吸入をせしめて中枢 Chemoreceptor を刺激してやる必要がある。

以上が大体の人体呼吸機構のあらましである。

§ 2 高所呼吸生理学の発展

19世紀後半から、スポーツとしての登山がようやく盛んとなり始め、ヒマラヤその他の高峯への遠征が行なわれ始めたが、それと共に「高山病」(Altitude Sickness)という現象に目が向けられるようになり、さらにこの高山病は、山の住民には見られないところから「高所順応」(または馴化、Acclimatization)という概念が導入され、それらの機構解明に多くの努力がなされて来た。

Viault (1890) は高地住民の赤血球の多いことを観察し、Galleotti (1904) は高地では人の血中の「アルカリ予備」が減少することを報告している。

Haldene と Priestry (1935) は、1913年 Pike's Peak という山に登り、4300mの地点で、5週間滞在して種々の観察を行った結果、上の二人の説を確認することが出来たが、ここで彼等は不幸にも、高所馴化は肺泡から血中へ酸素が分泌されるようになることに

よって行われるという誤った説を立ててしまった。

Barcroft (1923) は1922年ペルー・アンデスに登り、大がかりな実験を行った結果、Haldene の説をくつがえし、高所馴化は、人体において、呼吸と循環に一連の変化が起って、その結果得られるものでありその要因として、①肺換気量の増加、②赤血球数の増加、③酸化ヘモグロビン解離曲線の左方移動の三つをあげ、酸素分泌説を否定した。

その後 Keys (1936)、Dill (1937) 等によって、Barcroft の説は確認され、さらに高所における人体の電解質平衡、体液pH、ヘモグロビンの特性などに関する新知見が得られた。

彼等の観察は大体高度4000mから5500mあたりでなされたが、それより高い所での観察となると、古いところで英国エベレスト隊による一連の報告がある。1924年隊の Somervell (1925)、1933年隊の Greene (1934)、1938年隊の Warren (1939) 等によって要約次のようなことが明らかにされた。

①完全なる馴化を得るには時間がかかり、従って、ゆっくり登る必要がある。

②極端な高所に至ると、衰退 (Deterioration) が馴化と同じような速さで起ってくる(ただしそれには寒冷、疲労、不適当な食事とかテント生活といった要因も影響してくる)。

③馴化した人なら7500mの高所で、相当な労働に耐えられる(馴化しない人が、急にこの高度にさらされると気を失うことがある)。

④しかし、たとえ馴化した場合でも、酸素吸入によって、完全なる平地での状態に引き戻すことは出来ないということ。

Field work であるこれらの研究に共通している欠点として、被験者が即ち観察者であらねばならないということが指摘されるが、その欠点を補うために、減圧室に被験者を入れ、観察者はそれを室外から眺めるといった方法をとった研究もいくつかある。その中でも Houston と Rily (1947)、並びに Rahn と Otis (1949) の二つのすぐれた研究をあげねばならないと思う。

Houston 等は4人の志願者を一か月も減圧室の中で生活させて、種々の測定を行なった結果、馴化という現象は、要するに組織内の酸素分圧をいかにして平地状態のそれに近く保つかという目的に向って、人体内で起る一連の適応現象の総合であると指摘し、それにはヘモグロビンの酸素解離曲線の特性と肺換気量の増加が大きな役割を占めるのであって、心搏出量の増加、肺胞拡散能の増加、赤血球数増加などは比較的重要度がおちるといっている。

Rahn 等は馴化した人の肺胞内酸素分圧は、馴化し

ない人のそれよりも高く、炭酸ガス分圧は、馴化した人の方が低いことを指摘し、それは低圧環境下における過呼吸によって起るためであり、さらに過呼吸は中枢性 Chemoreceptor の炭酸ガス刺激閾値が低下するためにもたらされたものであると説明した。

このような過去の研究業績の上に加えて、私は L. G. Pugh が Cho Oyu (1952)、Everest (1954)、Makalu (1960~61) に遠征してまとめ上げた業績を高く評価せねばならないと思う。彼の仕事は非常に優れているので、ここでは彼の業績を紹介することを中心に、高所における人体の呼吸機能の変化と、その馴化について述べてみようと思う。

§ 3 高度と気圧の関係

高度と気圧との関係は色々あるようだが、Pugh がとり上げているのは次の二つである。

(1) 国際慣用公式

これは自由大気における高度と気圧の関係式で、海面上の気温を15°C、気圧を760mmHg、そして温度変化係数を0.0019812°C/ft (=0.006534°C/m)として式を組立てたものである。

a) Haldene と Priestry (1953) の式

$$\frac{P_0}{P} = \left( \frac{288}{288 - 1.98H} \right)^{5.256}$$

P<sub>0</sub>: 760mmHg (海面上の気圧)  
P: 1000Hft における気圧

b) Boothby (1944) の式

$$Z = 221.15 T_{ms} \log \frac{760}{P_B}$$

$$T_{ms} (\text{絶対温度}) = 2.303 \log \frac{288}{288 - aZ}$$

a: 0.00198°C/ft  
Z: 高度 (ft)  
P<sub>B</sub>: 高度Zftにおける気圧mmHg

(2) Zuntz (1906) の公式

山地では、自由大気と条件が違うとして修正が加えられたもので、

$$\log b = \log B - \frac{h}{72(256.4 + t)}$$

b: 高所の気圧mmHg  
B: 低所の気圧mmHg  
h: その二点の高度差m  
t: その間の平均温度°C

ここに B=760mmHg, t=15°C とすると

Fitzgerald (1913) の式

$$\log b = \log 760 - \frac{h}{19540.8}$$

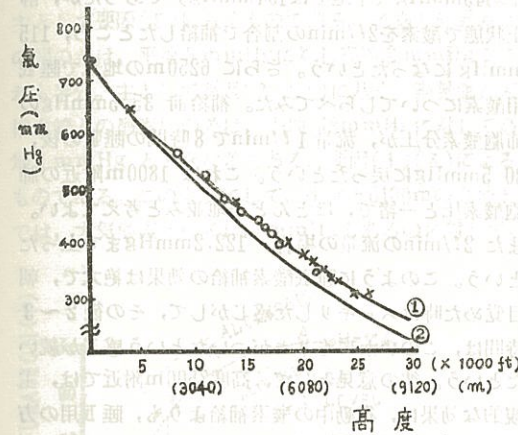
これは Pugh の Everest での実測値に非常によく一致したといっている (第1図)。

第1表 肺換気量の労作量と高度との関係 (Pugh et al., 1994)

| Sea level<br>(Bar. 750mmHg)      | Rate of Work,<br>kg-m/<br>min | Ventilation, l/min |                  | FeCO <sub>2</sub> , % | FeO <sub>2</sub> , % | Oxygen Intake,<br>l/min STP | Respiratory<br>Exchange Ratio<br>(R) | Heart Rate,<br>beats/min |
|----------------------------------|-------------------------------|--------------------|------------------|-----------------------|----------------------|-----------------------------|--------------------------------------|--------------------------|
|                                  |                               | STPD               | BTPS             |                       |                      |                             |                                      |                          |
|                                  | 300                           | 19.6 ± 2.8(10)     | 24.5 ± 3.5(10)   | 4.36 ± 0.40(10)       | 16.20 ± 0.56(10)     | 0.94 ± 0.05(10)             | 0.90 ± 0.04(10)                      | 92 ± 9(10)               |
|                                  | 600                           | 29.2 ± 2.3(8)      | 35.8 ± 3.0(8)    | 4.64 ± 0.40(8)        | 16.01 ± 0.54(8)      | 1.46 ± 0.14(8)              | 0.92 ± 0.04(8)                       | 109 ± 10(8)              |
|                                  | 900                           | 42.3 ± 4.0(12)     | 52.0 ± 4.8(12)   | 4.68 ± 0.36(12)       | 16.05 ± 0.51(12)     | 2.08 ± 0.10(12)             | 0.94 ± 0.06(12)                      | 126 ± 16(12)             |
|                                  | 1200                          | 56.8 ± 5.3(10)     | 69.4 ± 6.7(10)   | 4.69 ± 0.21(10)       | 16.19 ± 0.43(10)     | 2.72 ± 0.14(10)             | 0.98 ± 0.05(10)                      | 151 ± 15(10)             |
|                                  | 1500                          | 79.7 ± 18.5(8)     | 97.7 ± 23.3(8)   | 4.54 ± 0.59(8)        | 16.67 ± 0.73(8)      | 3.23 ± 0.17(8)              | 1.08 ± 0.07(8)                       | 185 ± 10(8)              |
|                                  | 1800                          | 113.8 ± 16.5(3)    | 138.8 ± 20.2(3)  | 3.89 ± 0.45(3)        | 17.54 ± 0.39(3)      | 3.70 ± 0.21(3)              | 1.18 ± 0.03(3)                       | 187 ± 10(3)              |
| 4650m (15300 ft) (Bar. 444 mmHg) | 300                           | 16.7 ± 2.7(5)      | 36.8 ± 5.9(5)    | 4.84 ± 0.44(5)        | 15.71 ± 0.48(5)      | 0.89 ± 0.06(5)              | 0.99 ± 0.14(3)                       | 104 ± 6(4)               |
|                                  | 600                           | 24.2 ± 1.2(4)      | 53.0 ± 2.6(4)    | 5.25 ± 0.09(3)        | 15.33 ± 0.09(3)      | 1.40 ± 0.05(4)              | 0.92 ± 0.02(2)                       | 125 ± 3(3)               |
|                                  | 900                           | 43.0 ± 7.8(4)      | 94.5 ± 17.2(4)   | 4.45 ± 0.45(4)        | 16.32 ± 0.64(4)      | 1.97 ± 0.07(4)              | 0.95 ± 0.05(4)                       | 139 ± 9(4)               |
|                                  | 1200                          | 70.9 ± 9.0(2)      | 155.4 ± 20.9(2)  | 3.75 ± 0.57(2)        | 17.50 ± 0.53(2)      | 2.36 ± 0.07(2)              | 1.10 ± 0.03(2)                       | 155 (1)                  |
|                                  | 1500                          | 76.4 ± 8.0(1)      | 167.8 ± 15.9(4)  | 3.67 ± 0.44(4)        | 17.48 ± 0.33(4)      | 2.60 ± 0.13(4)              | 1.06 ± 0.04(4)                       | 167 ± 7(3)               |
| 5800m (19000 ft) (Bar. 380 mmHg) | 300                           | 17.5 ± 1.5(26)     | 45.8 ± 4.1(26)   | 5.13 ± 0.31(17)       | 15.49 ± 0.41(17)     | 0.98 ± 0.08(26)             | 0.91 ± 0.04(26)                      | 109 ± 6(4)               |
|                                  | 600                           | 28.2 ± 2.7(12)     | 73.2 ± 7.1(12)   | 5.12 ± 0.37(10)       | 15.64 ± 0.42(10)     | 1.49 ± 0.10(10)             | 0.95 ± 0.02(11)                      | 124 ± 7(10)              |
|                                  | 900                           | 46.3 ± 13.5(10)    | 126.1 ± 20.7(10) | 4.28 ± 0.41(9)        | 16.63 ± 0.42(9)      | 2.01 ± 0.13(9)              | 1.04 ± 0.15(4)                       | 139 ± 11(8)              |
|                                  | 1200                          | 67.0 ± 7.4(5)      | 173.7 ± 19.0(5)  | 3.81 ± 0.41(4)        | 17.61 ± 0.17(4)      | 2.25 ± 0.27(5)              | 1.16 ± 0.14(5)                       | 143 ± 16(6)              |
| 6400m (21000 ft) (Bar. 344 mmHg) | 300                           | 17.5 ± 1.5(8)      | 51.2 ± 4.4(8)    | 4.81 ± 0.45(5)        | 15.72 ± 0.47(5)      | 0.95 ± 0.04(7)              | 0.90 ± 0.02(5)                       | 122 ± 7(7)               |
|                                  | 600                           | 28.7 ± 5.6(4)      | 87.5 ± 13.3(4)   | 4.92 (1)              | 15.94 (1)            | 1.33 (1)                    | 0.97 ± (1)                           | 139 ± 9(4)               |
|                                  | 900                           | 55.0 ± 4.1(7)      | 160.9 ± 12.4(7)  | 3.53 ± 0.38(5)        | 17.51 ± 0.33(5)      | 1.89 ± 0.04(5)              | 1.03 ± 0.03(5)                       | 144 ± 11(5)              |
| 7440m (24000 ft) (Bar. 300 mmHg) | 300                           | 15.5 ± 0.9(3)      | 52.6 ± 3.1(3)    | 4.81 ± 0.61(3)        | 15.49 ± 0.48(3)      | 0.87 ± 0.11(3)              | 0.85 ± 0.04(3)                       | 130 (1)                  |
|                                  | 600                           | 35.8 ± 1.8(3)      | 121.5 ± 6.3(3)   | 3.61 ± 0.48(3)        | 17.14 ± 0.24(3)      | 1.42 ± 0.03(3)              | 0.92 ± 0.09(3)                       | 140 ± 3(3)               |

カッコ内数字は観察回数を示す。

しかし、これとても非常な高度では一様に行かないものとみえて、たとえば Everest の頂上の気圧であるが、1953年の場合、7300mのCⅦの気圧が308mmHg、平均温度-26°Cであったから、8840mの頂上では気圧250mmHgと計算される。ところが1933年の場合は気圧が少し高かったらしく、6900mで305mmHgであったから、頂上は269mmHgであったろうと推算される。この高度で20mmHgの差は、1000m位の高さ差に匹敵するから、気圧計から高度を逆算する場合は慎重であらねばならないわけである。



第1図 気圧と高度の関係 (Pugh, 1957)

- ①はZuntzの公式によって算出された曲線
- ②は国際慣用公式によって算出された曲線
- ×は種々な研究者によって測定された実測値、Zuntzの公式に大体あてはまる。

§4 肺換気量について

Pughの1953年 Everest での観察によれば、朝目覚めた時の安静時肺換気量は高度5500乃至6400mにおいて、13~22l/min、平均15.8l/min (BTPS)であった。「BTPS」とは、体温、大気圧、水蒸気飽和状態における空気量である。普通平地における安静時肺換気量は5.5~9.8l/min、平均7.3l/minであるから、この高所での平均肺換気量は平地での約2倍量といえる。ところが他方この肺換気量を「STPD」すなわち0°C1気圧、乾燥状態下のガス量で表わせば、高所でも、平地でも、いずれも4~7l/minとなって高度に関係のないことがわかる。つまり、人の酸素消費量はどこにいても一定で、エネルギー代謝は外気圧に関係しないということがいえる。

それでは労作時の肺換気量はどうか。Pughは4人の生理学者と共に、Makaluの麓で越冬しつつ種々の測定を行なったがそれによると(第1表)、労作の増加に従って換気量は増加するが、STPDで表わすかぎり、高度と無関係であることが証明された。同時に酸素消費量の方も高度に関係なく、ただ労作量と平行関

係にあることを明かにした。すなわち300kg-m/minの労作時の酸素消費量は0.9l/min、600kg-m/minの労作時のそれは1.4l/min、1200kg-m/minの労作時には2l/minとなる。これから推定すると、高所における酸素の補給量として、安静時2l/min、労作時3~4l/minというのがこれまでの登山隊が使用した量の平均であるが、開放式補給器だと、大体その半分は無駄に捨てられるとすれば、そのあたりが妥当な線としてうなずけるわけである。

§5 肺胞内空気組成について

高所における人体の肺胞気組成を分析してみようとする試みは、まず1924年 Everest 隊の Somervell によってなされた。しかし残念なことには、彼は採集した肺胞気をゴム袋に入れて持って帰り、しかも道中に時間がかかりすぎていたので、炭酸ガスはほとんど抜けてしまっており、役に立たなかった。1933年のGreeneはガラス・アンプルに封入して持って帰ったので、これ以来本格的な分析が行われるようになった。Pughによれば、肺胞気組成と高度の関係は(第2表)の如くなる。しかし、この肺胞気なるものは、個人内でのサンプルによるバラツキが大きく、たとえば Hunt の場合、CⅢ(6200m)での肺胞酸素分圧は、最高49.6mmHg、最低40.9mmHgで、9mmHgもの差があり、これは1300mもの高さ差に匹敵する。それと同時にまた個人差も強く、PughはHuntよりも平均4mmHgも低かった。さて、平均値のみから推算すると、人は Everest 頂上では肺胞酸素分圧24mmHg、炭酸ガス分圧19mmHg、となるはずだといふ。ところが理論上肺胞酸素分圧は少くとも28mmHgはなければ、酸素は肺胞から血中へ移行しないはずであるから、この酸素分圧に相当する高度である7000~7700mが人の到着し得る限度ということになる。もしこの高度に十分に馴化出来たと仮定すれば、馴化した人は、しない

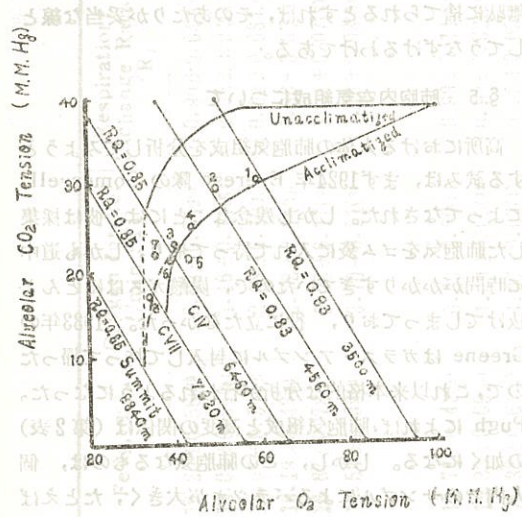
第2表 高所における肺胞気組成 (Pugh, 1957, Gill, 1962)

| 高度(m) | 気圧<br>(mmHg) | 肺胞                         |                           | R.Q  |
|-------|--------------|----------------------------|---------------------------|------|
|       |              | Pco <sub>2</sub><br>(mmHg) | Po <sub>2</sub><br>(mmHg) |      |
| 0     | 759          | 38.6                       | 104.0                     | 0.82 |
| 5400  | 397          | 25.3                       | 44.5                      | 0.89 |
| 6100  | 370          | 21.9                       | 41.1                      | 0.81 |
| 6250  | 365          | 20.3                       | 43.5                      | 0.83 |
| 6450  | 347          | 21.0                       | 39.3                      | 0.87 |
| 6850  | 337          | 21.3                       | 35.5                      | 0.82 |
| 7320  | 308          | 16.9                       | 34.1                      | 0.77 |
| 7830  | 288          | 14.3                       | 32.8                      | 0.77 |

人よりも平均して10mmHg位肺胞酸素分圧が高いということであり、それは1300m位の高さ差に匹敵するか

ら、丁度9000mまでは到達可能という理屈がなり立つそれが丁度 Everest の高さとはほとんど一致するのは偶然とはいえない事実である。

馴化した人とならない人とは肺胞気組成が違うことを Rahn と Otis は一つのダイアグラムに示したが Pugh の実測値をそれにあてはめて描いたのが(第2図)である。



第2図 呼吸一炭酸ガス一酸素曲線 (Rahn & Otis, 1949) (Pugh, 1957)

高度馴化した人とならない人の肺胞炭酸ガスならびに酸素分圧の関係。

○は実測値平均 1-3: ChoOyu, 4-8: Everest

斜線は与えられた高度における呼吸商 (R. Q) を示す。破線は1953年 Everest の data にあてはめたもの。馴化した人とならない人の差は3500m~4500mで最大。

ある高度における肺胞内の酸素量と炭酸ガス量の割合(これを呼吸商R. Qという)は体内で燃焼する物質によって一定であり、大体同じような食事をする限り人によって大きく変わるものではない。つまり図において、勾配がR. Qになるような直線をひけば、それはその高度における肺胞内酸素と炭酸ガス分圧は必ずその線上にあるはずである。ここに炭酸ガス=0とおけば、酸素分圧は外気酸素分圧であり、その高度が図上で決められる。第2図に見られる斜線はそういう意味における等高線である。これから同じ高度において、馴化した人とならない人では肺胞気組成が違うということ、すなわち、馴化した人の方が、酸素分圧は高く、炭酸ガス分圧が低いということがよく理解出来る。高所において、Pugh 等の実測値が Rahn の「Acclimatized」の曲線より左へ偏しているが、それは馴化が不十分であったことを示しているものである。このダイアグラムに関して、後で肺換気量について論ずる際もう一度述べることにする。

§ 6 酸素補給の効果

前章でのべた如く、理論上人は7700m以上では酸素の補給を必要とする。その高度では肺胞酸素分圧が29 mmHg 以下となり血中酸化ヘモグロビン飽和度が50%以下となって、内呼吸が困難となるからである。酸素欠乏が一番弱い組織は脳であり、一旦脳細胞が傷害をうけるとはやもともどらない。そういう意味で不用意に無酸素で8000m峰に登るということは無謀に近い。

Pugh によれば、5500m の地点で肺胞酸素分圧が平均45mmHg (平地では104mmHg)であったが、静止状態で酸素を2l/minの割合で補給したところ、115 mmHg になったという。さらに 6250mの地点で睡眠用酸素についてしらべてみた。補給前 35.5mmHgの肺胞酸素分圧が、流量 1 l/minで8時間の睡眠の後、80.5mmHgに戻ったという。これは 1800m附近の肺胞酸素分圧と一緒に、ほとんど平地並みと考えてよい。また 2l/minの流量の場合、122.2mmHgまで上ったという。このように睡眠酸素補給の効果は絶大で、朝目覚めた時はスッキリした感じがして、その後2~3時間は、このいかにリキがついたという感じが続いたという。彼の意見として、高度7500m附近では、主観的な効果は、行動中の酸素補給よりも、睡眠用の方が高いという。また高高度における酸素補給が、馴化を妨げはせぬかという心配も、その高度における衰退現象を考慮に入れるならば、ほとんど問題にならないということである。

行動中の酸素補給の必要量については §4 でふれた。

§ 6 高所順応のメカニズム

人体に対する高所の影響、すなわち高山病が、結局酸素不足に基くものであるとすれば、高所順応という現象は、最終的には人体組織内の酸素分圧を、平地における酸素分圧のレベルから出来るだけ落さないよう

第3表 人体各部の酸素分圧 (Houston, 1947)

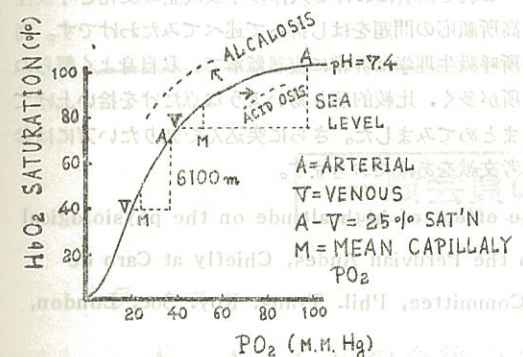
|       | 呼 気 肺 胞 動 脈 血 末 梢 血 | Po <sub>2</sub> (mmHg) | Po <sub>2</sub> (mmHg) | Po <sub>2</sub> (mmHg) | Po <sub>2</sub> (mmHg) |
|-------|---------------------|------------------------|------------------------|------------------------|------------------------|
| 平地    | 152                 | 100                    | 95                     | 47                     |                        |
| 差     |                     | 52                     | 54                     | 86                     |                        |
| 100m差 | 64                  | 38                     | 36                     | 32                     |                        |
| 差     |                     | 26                     | 2                      | 4                      |                        |
| 分 圧 差 | 88                  | 62                     | 55                     | 15                     |                        |

に、努力せんとする機序であると見なすことが出来る。それに関係のある要因をあげてみると、

- (1) ヘモグロビンの酸素解離曲線の特性

- (2) 心搏出量の増加
- (3) 赤血球数の増加
- (4) 肺胞拡散数の増加
- (5) 肺換気量の増加

などに要約されよう。その間の関係は、Houston (1947) の第3表に明らかである。すなわち彼は平地と高度6100mの地点における人体内の各部の酸素分圧を比較してみた。これでおかることは、まず大気酸素分圧と肺胞酸素分圧の差が、平地と高地では大きく違う。すなわち平地では 52mmHgの差であるのに対して、高地ではそれが 26mmHgと半分である。これは主として要因(5)に基くものである。肺胞と動脈血との間の差は、平地 5 mmHgに対し高地 2 mmHgでこれも半分。主として要因(2)(4)に基く。動脈血と末梢血管との酸素分圧の差は、平地 48mmHgに対して高地 4 mmHg と大きな差である。要因(1)(3)によるものである。このようにして、平地と6100mの高地とでは、大気酸素分圧の差は88mmHgもあるのに対して、



第3図 標準化ヘモグロビン解離曲線 (pH=7.4)

アルカロージスは右へ、アシドーシスなら左へ移動する。酸素分圧とA-V間酸素飽和度25%の差を生ずるべきPO<sub>2</sub>の差との関係。

人体血管末梢部では 15mmHgの差でしかなくなっている。馴化するにしたがってこの傾向が強まるものとみてよからう。

その要因を逐一考察してみると、

- (1) ヘモグロビンの酸素解離曲線の特性

これは第3図に示す如く、酸化ヘモグロビンは、低酸素環境になればなるほど、その結合している酸素を解離し易い特性を持っている。すなわち、血中酸化ヘモグロビンは、動脈血から、末梢組織に至るまでに、その飽和度にして約15%の酸素を放出する。そのためには、酸素分圧の高い平地では、動脈血と末梢血との間に48mmHgの酸素分圧の差が存在してはじめてそれだけの酸素が放出されるのであるが、酸素分圧の低い6100m(大気圧約380mmHg)では僅か 4 mmHgの差

でそれだけの酸素が解離される。つまり、低酸素環境下では、動脈血と組織の間の圧差が小さくて十分な酸素供給が行われるようになっていく。

ところで、体内の炭酸ガス分圧が減じて、血液 pH がアルカリに傾く(この状態をアルカローシスという)と、この曲線は左へ移動し、酸素が解離しにくくなり、反対に炭酸ガス分圧が高まって血液が酸性に傾く(この状態をアシドーシスという)とこの曲線は右へずれて、酸素は解離しやすくなる。高地では肺換気が盛んになる結果、炭酸ガスの排泄が多くなり、血中炭酸ガス分圧は低くなり血液はアルカローシスに傾くので、酸素はむしろ解離しにくくなる。これに高所順応が起ると、血中のアルカリ性物質を尿中に沢山排泄しアルカローシスを解消せしめるように調節が働いて、その不利な点が是正される。

- (2) 心搏出量の増加
- (3) 赤血球数の増加

この二つは共に血液による酸素運搬量を増加させるのに役立つ。第4表は高度と脈搏数の関係を示す一例であり、第5表は各高度における地名と、その住民

第4表 高度と脈搏数

| 高度 (m) | 気圧 (mmHg) | 脈搏数 (mim) |
|--------|-----------|-----------|
| 600    | 720       | 64        |
| 1500   | 650       | 72        |
| 4500   | 424       | 84        |

第5表 高度と住民平均赤血球数

| 地名          | 海拔 (m) | 住民平均赤血球数 (10 <sup>4</sup> /mm <sup>3</sup> ) |
|-------------|--------|--|
| Christiania | 0      | 497  |
| Zürich      | 412    | 575  |
| Davos       | 1560   | 655  |
| Arosa       | 1800   | 700  |
| Cordilleras | 4392   | 800  |

の平均赤血球数を示したものである。かくの如く、高所に至れば赤血球数は増加するが、そのために血液の粘性が高まり、かえって心搏数は増加しない場合がある。殊に強い労作をした場合には、同じ労作を平地で行なった場合の心搏数の増加程には、それが上らないことがあり、馴化の条件としては重要度は高くないといわれている。

- (4) 肺胞拡散能力の増加

West (1962) の報告によれば、5700mの地点に7週間以上滞在した結果、肺胞拡散能は15~19%増加したということである。拡散能が増加するということは肺胞から動脈血への酸素の移行がそれだけ速に行われるということを示している。しかしながら、この

拡散能の測定には一酸化炭素が用いられるのであるがこの一酸化炭素は、低酸素状態では一層ヘモグロビンとよく結合するし、ヘモグロビンはさきの要因(3)によって増加しているのであるから、この程度の拡散能の増加というのはそういう要素によるとも説明出来るので、馴化の要因としての重要度としてはこれも大したものではない。

(5) 肺換気量の増加

馴化の要因としてはこれがもっとも大きいといわれる。§3で考察した如く、常に必要量の酸素を摂取しようとする時、酸素圧の低い高所ではそれだけ多量の換気が必要なわけで、馴化にしたがって、その呼吸の調節がより合理的に行われるようになるわけである。

もう一度第2図を御覧頂きたい。この図において馴化しない人は、高度3400mあたりで、肺胞酸素圧が60mmHgになるまで呼吸量は変わらないことがわかる。つまり急激な低酸素刺激にはしばらく感じないのである。それは酸素が低くなり、酸化ヘモグロビン飽和度が低下すると、血中pHが高くなり、呼吸中枢は抑制されるためである。しかしやがて血中アルカリの尿中排泄によってこの抑制がとれ、急に呼吸が増加して肺胞炭酸ガス分圧も低くなって行く。これが馴化しない人の呼吸-酸素-炭酸ガス曲線である。

馴化が行われると、血中pHの上昇による呼吸抑制が起らなくなり、肺胞酸素圧が100mmHgを割るとすぐ換気増加が起るようになる。これが馴化した人の呼吸曲線であるが、換気が増加して炭酸ガス排泄が盛んになると、血中炭酸ガス分圧は低くなり、血液pHは高くなる。これは呼吸抑制的に働くので、続けて過呼吸を行うためにはこれでは不都合である。そこで、すでに述べたとおり、尿中のアルカリ排泄が増加して血中のpHを低くする一方、呼吸中枢の方は炭酸ガス刺激閾値が低下し、呼吸炭酸ガス状態でも十分炭酸ガス分圧に反応して呼吸が増加するように変わって行くようになる。したがって、馴化した人は少しの炭酸ガスの増加にも鋭敏になるため、呼吸停止時間を測ると明らかにその短縮が見られる。なぜなら、呼吸停止が破られるのは体内炭酸ガス蓄積が閾値に達した時であるが、その閾値が低くなれば、当然それに達する時間は短縮される道理である。これは馴化を知る一つの目安になりはしないだろうか。

これで高所における人体の呼吸機能の変化と呼吸性高所順応の問題をはし折って述べてみたわけですが。高所呼吸生理学は非常に複雑難解で、私自身よく解らぬ所が多く、比較的解り易いような点だけを拾い上げてまとめてみました。さらに突込んで知りたい方には参考文献をあげておきます。

(1) Barcroft, J. et al (1923) : Observations on the effect of high altitude on the physiological process of the human body, carried out in the Peruvian Andes, Chiefly at Caro de Pasco, Report to the Peru High Altitude Committee, Phil. Trans. Roy. Soc. London, B. 211 : 351.

(2) Boothby, W. H. et al (1944) : Handbook of Respir., Data in Aviation, Washington D. C.

(3) Dill, D. B. et al (1937) : J. Biol. Chem. 118, no 3, May.

(4) Dill, D. B. et al (1964) : Work tolerance, age and altitude, J. Appl. Physiol., 19 : 483.

(5) Fitzgerald, M. P. (1913) : The changes in the breathing and the blood at various high altitudes, Phil. Trans. Roy. Soc. B. 203 : 351

(6) Galleotti, G. (1904) : Arch. Ital. de Biol., 41 : 80.

(7) Greene, R. (1943) : Observations on the composition of alveolar air on Everest, 1933, 82 : 481.

(8) Gill, M. B. et al (1932) : Alveolar gas composition at 21000 to 25700 ft, J. Physiol., 163 : 373.

(9) Haldane, J. S. and J. G. Priestley (1935) : Respiration, 2nd ed., Oxford, Clarendon Press.

(10) Houston, C. and R. L. Riley (1947) : Respiratory and circulatory changes during acclimatization to high altitude, Amer. J. Physiol., 149 : 565.

(11) Keys, A. (1936) : The physiology of life at high altitudes, The international expedition to Chile, 1935, Sci. Monthly, 43 : 289.

(12) Pugh, L. G. C. E. (1957) : Resting ventilation and alveolar air on Mount Everest; With remarks on the relation of barometric pressure to altitude in mountains, J. Physiol., 135 : 590

(13) Pugh, L. G. C. E. (1958) : Muscular exercise on Mount Everest, J. Physiol., 141 : 233.

(14) Pugh, L. G. C. E. et al (1964) : Muscular exercise at great altitudes, J. Appl. Physiol., 19 : 431.

(15) Pugh, L. G. C. E. (1964) : Cardiac output in muscular exercise at 5800m, J. Appl. Physiol., 19 : 441.

(16) Rahn, H. and A. B. Otis (1949) : Man's respiratory response during and after acclimatization to high altitude, Amer. J. Physiol., 157 : 445.

(17) Viault, F. Q. R. (1890) : Acad. Sci., Paris, 111 : 917.

(18) Warren, C. B. M. (1939) : Alveolar air on Mount Everest, J. Physiol., 96 : 34.

(19) West, J. B. (1962) : Diffusion capacity of the lung for carbon monoxide at high altitude, J. Appl. Physiol., 17 : 421.

(20) Zuntz, N. et al (1906) : Höhenklima und Bergwanderungen, Berlin, Deutzes Verlagshaus.

一般会員の投稿を募る

テーマ

★ AACKの今後のあり方について

遠征の対象、隊の編成、登山と学術等何でも可

★ 時報の内容、編集等に対する批判

期日

昭和40年9月30日

送り先

京都市左京区吉田本町

京都大学工学部冶金学教室

近藤良夫 気付

京都大学学士山岳会



会 員 紹 介

安江安宣氏

昭和7年にわたしは京都一中に入学した。山岳部にはいると、りっぱな印刷の部報をもらった。その巻頭に、「セント・エルモの火について」という論文がのっていた。

その筆者がじっさいに経験したふしぎな火の話から始り古今東西の文献を引用しつつそれがいわゆる「セント・エルモの火」であることを立証し、さらにその本質に言及するという、きわめて学究的な大論文であった。それが、中学校の山岳部の部報にのっているのである。小学校から中学校に入ったばかりのわたしは、なるほど、中学校というのは、たいしたところだと感動したものである。

この大論文の筆者が、安江安宣氏であった。わたしは、ひじょうな尊敬とともに、その名をおぼえた。そのうちに、「あれが安江さんだ」と、上級生におしえられた。渡り廊下の雨傘おき場だった。安江大先輩は一中を卒業して浪人中で、補習科にかよっていた。かれは、悠然と傘棚から自分の傘をとり出すと、哲人のような表情で、すーっ行ってしまった。わたしは、大学者を見たという感動で、硬直してかれを見送った。

いまにしておもえば、かれはそのとき、まだティーンエージャーだったはずだ。しかし、わたしの印象では、そのときすでに、いまとおなじ顔をしていて、いまとおなじような悠容せまらざるふるまい方を身につけていた。中学生にして、あの堂々たる学術論文を書いたという点からいっても、かれは、おそるべき早熟児だったにちがいない。

その後かれは、高等蚕糸学校——いまの工芸繊維大学にすすみ、さらに京大農学部で昆虫学を専攻した。今西さんのお宅などで、しばしば顔をあわせ、たいへん親しくつきあってもらうことになった。いつでも、かれの話はすばらしく高踏的で、アカデミックなふんい気に満ちていた。わたしものに学問をやることになったが、アカデミズムに対するわたしの親近感の一部は、たしかにかれ安江さんから教えられたものと思っている。

農学部を卒業すると、かれは東京の伝染病研究所に赴任していった。のちに、岡山大学に転じて、農業の効果について研究しているということだったが、昆虫学と伝染病研究所と農業とのつながりがあいは、わたし



にはよくわからない。わたしにわかっているのは、かれがそのあいだじゅう、一貫してナチュラルリストであって、全国の山を歩きつづけていたということである。

全国的な実地踏査をもととして作製された、くわい分布図をまえにして、ニジュウヤホソツントウの日本列島における分布の話などを聞くのはたのしかった。

安江さんは、南の国の生まれである。かれのおとうさんは、いまでいえばジェットロのようなところにおられたようで、その関係で、かれは小学までジャワで育った。インドネシア語は、かれが少年時代に毎日話していたことばである。

南の島々に対するかれの情熱は、その後ずっとおとろえることもなく持続して出てゆく機会をねらっていたようだが、ついに昭和15年には当時三高の学生だった川喜田二郎をつれて、小船で、南硫黄島まで遠征してしまっ

た。山の方では、ずっと若いときから、かれがひじょうな熱意をもって調べつづけてきた山群が二つある。一つは、中国奥地のアムネマチンであり、もうひとつが西イリアンのナソウ山脈である。かれは、それらの山々について、ぼう大な資料をあつめ、いくつも論文を書いた。

終戦とともに、中国奥地への道は閉ざされ、ニューギニアの方も、かれが集めたたくさん文献は、戦災によってすべて灰になってしまった。アムネマチンもカルステンツも夢と消えて、戦後のかれは、登山家としてはひどく意気消沈していたように見える。そしてコツコツと農業の研究にいそしんでいたようである。

しかし、西イリアンへの可能性が出てきたとき、わたしが第一に思いおこした人物は、やはりかれだった。かれの、永年にわたる努力と知識の大きさからいってそれは当然だろう。かれは、西イリアンへ行くべきであった。

わたしは、この数年来のかれの転身ぶりを考えて、はたして行く気があるかどうか危ぶみながら、西イリアン計画を話した。計画を聞いて、かれは、大きな声で「行くぞーっ」とどなった。

いま、西イリアン作戦の第一段階は終った。そして、国際政治の上からは、われわれはきわめてむづかしい局面をむかえている。これから、どうすればいいであ

ろうか。ふたたび局面が開かれるまで、ひじょうに時間がかかるかもしれない。しかしわたしたちは、南の島々に関しては、かれ一流の、冷静にして持続的な

情熱に期待することができるだろう。

梅 棹 忠 夫

田 附 重 夫 氏

私は現役時代色々の山に登ったが、その思い出の多くを彼と共に有する。といっても彼は私の先輩であり、いやしくも先輩を前にして、一人前に紹介文を書くのは気がとがめる。編集者は私を実に困った立場に追い込んだものだ。

田附重夫氏は昭和10年大阪の生れで、太平洋戦争と終戦後の苦難時代にもよくすすくと育ち、昭和28年同志社高校から京都大学工学部工業化学科及び山岳部に入学した。現役時代の彼は、現在の彼とは頭髪がやや後退したのを除きほぼ変りはない。入部以来彼は持ち前の秀でた体力と才能で、しだいに頭角を現わし、4回生にはサブ・リーダーをつとめ我々後輩を叱咤激励した。

現役の4年間、彼は少なくとも二つのことを成しとげた。その一つは、ようやく大世帯となりゆく山岳部員の中、ともすれば規格化されゆく雰囲気の中に、彼独特の山行を築き上げたことである。彼の山行は、いくなれば自由に未知の原野をとびまわるといふ山行であった。北海道日高山脈の藪漕ぎ登山の魅力は彼の好んで口にするところ、自ら数度日高山脈に出かけ、戦後の山岳部に日高の知識を導入した。

もう一つは山岳部における食糧革命である。不思議なもので大世帯の山岳部で育つうちに部員の多くは、装備畑と食糧畑に分類されてくる。彼は食糧畑の最右翼であった。当時の積雪期食糧は重量の多い米を主体としたものであったが、それに彼は次々と改革を加え



めん類を主体とした軽量食糧のシステムを確立し、現在の我々の食糧の土台を作った。卒業後彼は大学院に進み、数年時イギリスのリーズ大学に2年間留学した。そこで硬軟とりまぜて何を勉強したかは判らない。しかし帰国後彼に始めて会ったとき、性格が一まわり大きくなったことを感じた。

そして今回のニューギニア

遠征、スカルノ峰の登頂成功である。この活躍については別に報告されているだろう。

彼との山行を通じて彼の性格をふり返ってみると、不思議と山での失敗がない。いや、人知れず失敗をしてそれを我々が気がつかぬのかもしれない。彼はそれほど緻密な計画と用心深さをもった精巧な男である。

終りに彼のニックネーム「ガイガー」の由来を紹介しよう。「ガイガー」は文字どおり Geiger-Müller 管のガイガーであり、昭和29年冬の笹ヶ峰合宿において、その男性的な声とまさにガーガーという話しぶりに敬意を表して命名されたものである。このガーガーが鳴り出したら、我々が何を言っても聞いてくれず、身の安全をはかるために逃げるのみで、まさにこわい「ガイガー」である。

今や彼は美しい奥さんをもらい、勉学にいそしみ、このところおとなしいが、私はこのおとなしさが続くとは思わない。まもなく、あのガーガーが鳴りひびきまたまた活躍が始まることと信ずる。

潮 崎 安 弘

AACK蔵書 目録—その2

<定期刊行物>

- Alpinismus, 1963 no. 2……, (München)
- la montagne & alpinisme, no. 41 (1963) ……, (France)
- Mountain World, 1948.1949.1950.1952.1955.1956/57.1962/63, (Switzerland)
- National Geographic, vol. 124 (1963) ……, (U.S.A.)
- The Alpine Journal, vol. 1 (1864) ……, (London)
- The American Alpine Journal, 1960.1962.1963.1964, (U.S.A.)
- The Geographical Journal, vol. 129 (1963) ……, (England)
- The Himalayan Journal, vol. 23 (1961) ……, (England)
- The Polar Record, vol. 2 (1963) ……, (England)

<単行本>

- Marvin H. Albert (1957) : The Long White Road, 175pp., (U.S.A.)
- Brongersma & Vema (1962) : To the Mountains of the Stars, 299pp., (London)
- Max Eiselin (1961) : The Ascent of Dhau'agiri, 159pp., (London)
- John Coleman-Cooke (1963) : Discovery in the Arctic, 251pp., (London)
- Toni Hagen et al (1963) : Mount Everest, 195pp., (London)
- Edmund Hillary & D. Doig (1963) : High in the Thin Cold Air, 275pp., (London)
- Sir Arthur G. Lothian (1959) : A Handbook to India Pakistan Burma Ceylon, 632pp., (London)
- Marcel Kurz (1959) Chronique Himalayenne 1940—1955, 441pp., (Zürich)
- Fosco Maraini (1964) : Where Four Worlds Meet, 260pp., (London)
- James Mills (1961) : Airborne to the Mountains, 192pp., (London)
- Wifrid Noyce (1962) : To the Unknown Mountains, 183pp., (Heinemann)
- Herbert G. Ponting (1922) : The Great White South, 305pp., (London)
- Mac'com Slessor (1964) : Red Peak, 252pp., (London)
- Gyan Singh (1961) : Lure of Everest, 212pp., (Delhi)
- Philip Temple (1962) Nawok!, 189pp., (London)
- James R. Uilman (1963) : Americans on Everest, 412pp., (U.S.A.)
- Woodrow Wilson (1964) : Four against Everest, 259pp., (London)

編集後記

★ 本号はカンチェンジュンガ計画、再度のK<sub>12</sub>計画の相次ぐ挫折のうちに作られた。その間のいらだたしい雰囲気まきこまれ、予定通りに原稿が集まらず、内容豊富な時報を作り得なかったことをおわびする。

★ ネパールにつづいてパキスタンにおいても登山の門戸が閉ざされようとしている今、以前から問題とされている「AACKの今後のあり方」について次号でも大いに論じていただきたい。本号の「AACK解散論」が再度の投石となり、議論の花が咲き競うことを期待している。(高橋)

昭和40年5月30日

発行所 京都市左京区吉田本町 京都大学内

社団法人 京都大学学士山岳会

Tel 77-8111 内192

代表者 AACK会長 今西錦司

印刷所 栗津印刷所

